

奇譚クラス

新時代の風俗雑誌

1054 **7**

7

定價 百円



本欄はすべて新版
未発表の作品です
価格は全部送料共

〔女体緊縛〕

◎寫真集◎

断然卓絶した特写
群を抜く素晴しき傑作
類例のない犠牲的安価

悦虐写真は同好者本位の迅速、確実、安価で信用のある曙書房代理部へ

◎村田那美子嬢悦虐集◎

手札型 五枚 一組 200円

◆さるぐつわ三態◆

キヤビネ版 3枚 1組 300円

◆二女連縛集◆

(中富綾子、並川トミの二嬢)

手札型 六枚 一組 300円

自分から縛りのモデルを志願してきた二人
の乙女を仲よく連縛したポーズ

◆三人連縛棒吊り◆

(杉、坂口、村田の三嬢)

キヤビネ版 3枚 1組 300円

これは誠に珍妙な写真である。予想して出
来るものでなく、偶然のチャンスをつか
んで得た三人連縛の棒吊りである。

◆様子責め3態◆

(伊吹真佐子嬢)

キヤビネ版 3枚 1組 300円

梯子に縛りつけるということは、サデイス
トの見果てぬ夢の一つである。

男性被縛写真 (縛られた男)

第三集 手札型 5枚 1組 300円

第四集 手札型 5枚 1組 300円

男性マゾ写真 (女に苛められる男)

第一集 キヤビネ 3枚 1組 300円

第二集 キヤビネ 3枚 1組 300円

◎川端多奈子嬢

第二集 悦虐姿態集◎

手札型 7枚 1組 300円

大好評の第一集に引続いて待望の第二集は
多奈子嬢の真価を遺憾なく発揮した作品と
なっている。乞御期待。

◆股間縛りの5態◆

(坂口利子嬢)

キヤビネ版 5枚 1組 500円

問題の股間縛り十数態の中から選んだ最も
強烈で美しさのある五態をおすすめする

◆椅子責めの5態◆

(伊吹真佐子嬢)

キヤビネ版 5枚 1組 500円

十四貫三百の豊満な姿態を縦横に椅子の上
に縛りつけて得た変化のある真佐子嬢の緊
縛のポーズ。

◆半吊り二態◆

(村田嬢、坂口嬢)

キヤビネ版 2枚 1組 200円

完全に吊り下げられてしまうよりも、半吊
りの方が、辛いとはモデル嬢の偽らざる告
白。

女性切腹姿態

オニ集 手札型 6枚 1組 300円

女性切腹擬態シリーズ

キヤビネ版 8枚 1組 600円

正坐より割腹に至る迄の連続写真。

目次

ロマンチックなサティズム	藤見 龍 (36)
股 配 さ 股 置	多山 幸 (44)
劇 団 と マ ス ク	阿井 龍作 (51)
あるマゾ島の告白	オ 嶋 香 (56)
ソドミ 老少の秘密	山 本 (67)
夫から妻から	文庫本 家 (72)

本誌創刊七周年記念読者入選作品

悦 楽 回 想 録	藤田 吉年 (118)
華々しき愛辱	小山 延男 (156)

私の切腹遊戯	川谷伊都子 (82)
アブニストの肥 痴 迷 (ちめい)	鬼山 純雄 (84)
新小説 性 液	伊藤 雄雄 (100)
あるマゾヒストの手帖から	坂 正三 (108)
刑罰 実 録・白木屋松駒	川野 京輔 (112)
既婚なる女性達	森本愛造 (136)
佐井清子 新小説 私の求めた男	佐井 清子 (146)
海外サティズム雑記(4)	香 野 新 (164)
鼻は花なり	北谷 英二 (171)
現代マゾヒズム芸術時評	藤 田 正 (181)
断崖への苦楽	坂田 幸夫 (185)
血染めの舞台	藤 孝元 (189)
感情教育(九)	香 野 新 (200)
切 腹 遊 戯	川谷伊都子 (117)
断 崖 時 評	藤 孝 元 (142)

二【特集】(告白と手記)

若い女の足に恋う	吉澤 昌秋 (78)
断崖への苦楽	山崎 実郎 (94)
エルゼット・マニア	秋見 幸子 (97)
異域・異人・異・断崖手記	香 野 新 (144)
フレンチ・カンカン	河原秋二 (157)
矢野龍溪	鬼山 純三 (163)
台への苦楽	藤 田 幸 (182)
コンドネーション断崖	長谷川 洋 (176)
断崖手記	村松 道一 (179)

奇譚クラブ 女七月号女目次

七月の奇譚 香野新 伊藤雄雄・藤

神崎デッサン合梯子を用いた縛り位

滝 麗子・園

FANTASTIC・DREAM

杉原 虹児・藤

新要遊戯—ダン ス—スネ

滝 麗子・園

★豪華なよそほい★ベツク嬢と花猫ムル

私が首を絞める間 華物しているんだよ

金ぞひすちづく ふおと(人間大ニ対する新怪・異談)

編を用いた縛り遊戯の連続断崖

藤田 幸・園

被虐モデルの出現を待つ 縛りを生じてとどろ

藤 田 幸

伊藤雄雄・神崎 乱れ髪・つふし島田

辻村隆・実演 写真断崖 縛り終るまで

断崖断崖・園 水昇・豹・藤・牛梨

善知鳥安方 (うとうやすかた) 伊藤晴雨・画
(解説本文66頁)



豪華なよそほい



ベック嬢と牝猫ムル

口
上

ベック嬢「皆さま、曳き出だしましたるこれなる畜生は、身体こそ小さけれ、当サーカスの花形、大学教授や博士達から動物界の奇蹟とその智能を讀えられました演技する牝猫のムルでございます。身は畜生ながら心は理性を備え、足し算引き算はおろか、方程式まで解きます。暫らくの御慰み、先ずはムルに御挨拶致します。」
(右足で軽く蹴る)「ソラ、御挨拶おし……」



磔

古來「磔」といへば陰惨無残の極刑である。が、しかも猶そこにかすかながら美を感じる。幻想がそれを模倣し増幅した。絢爛たる磔！



牛裂



朴訥愚直の兵卒も権謀に躍ら
され、戦乱の殺伐に馴れると
兇悪無残の所業に及ぶ。戦争
よ、呪われてあれ。



水葬

海が桶家のたくましい娘も、腕を縛られ、錨にくへりつけられてはせん術もない。水音と共に深く深く沈んでゆく。「その鉋で止めを刺して来い」首領は命令した。

豹



崖上の木は結びつけられた鎖に引かれてはげしく揺れた。黒人娘の絶叫がやがて細って消えた。そして引上げられたのは——鎖ばかり



伊藤晴雨撮映

特に本誌のため御提供下さった秘蔵写真

乱

れ

髪

つぶし島田

伊藤晴雨撮映



私が百を数える間

辛抱しているんだよ





これはゴム紐だから身体を動かそうと思えば動かせるのよ、でも、勝手に解いたりしたらひどいから、私が百を数え終るまで、おとなしくじつと辛抱しているんだよ、
いい子だから。

春日ルミ嬢

伊吹真佐子嬢

寫眞 図解 縛り終るまで

先ず左手首に縄を二重に巻いて縛る



次に別の縄で同じく右手首も二重に巻いて縛る



両方の縄を手首際で結び縄尻を腋の下へ廻す



両方の二の腕に二巻きして締めつける



胸で交叉さして背中の方へ戻す（のどが締らない）



背中の縄に通して締め上げる（締め具合を加減する）



縄尻を二の腕へ廻して腋のところで一ひねりする



お腹の前で結び目を作り両膝を揃えて縛る



辻村 隆実 演

モデル 伊吹真佐子嬢

余り痛くしないでネ

春日ルミ嬢 実演

モデル 伊吹真砂子嬢

捕獲

馬鹿ッ「いやいや、離して！痛いワ お姉さまの



抵抗

「なにすんのヨ、後手にねじ上げたりして、痛い、痛い、腕がよじれるヨ」



縄を用いない
縛り遊戯の

連続写真

お姉様！



あきらめ

「おとなしくするからよッ、膝頭でお尻を押さえるのだけ、やめてお願い、痛んいですもの」

観念

「お姉さま、余り痛くしないでネ、それだったらわたし縛られてもいいわ」





被虐モデルの出現を待つ

サジスチン 春日ルミ嬢の得意のポーズ

唸りを生じてとぶ鞭

今まさに鞭をふりあげようとする

春日ルミ嬢の緊迫したポーズ



まぞひすちつく・ふおと

☆ 人間犬 に対する 折檻 ☆

「芸を覚えぬ犬はこうしてやるツ」



★ 凱 歌 ★

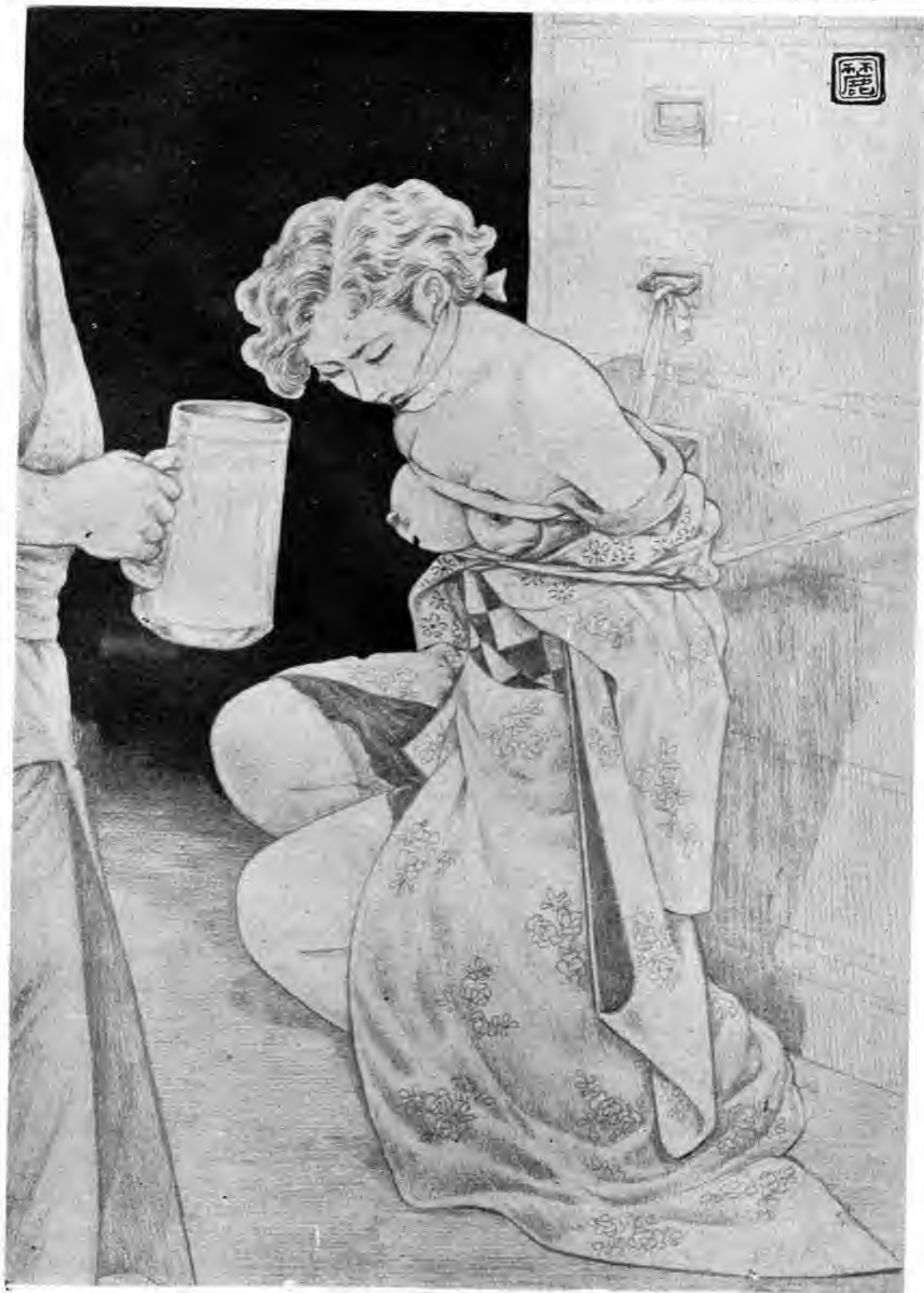
「どうだい、のびたのかい、妾の云う事をきかないから
こんな事になるのだよ、男のくせにだらしのない！
さあ、これからどうしてやろうかなあ……」



子・画

新妻遊戯 ……タンス……

軽い口喧嘩から新妻をダンスの鎖に縛って台所からジョツキー杯の塩水を持つて飲ませようとして美しい妻の姿に呆然としている。



新妻遊戯 ……ネ コ……

瀧 麗

初々しいお掃除姿の新妻を縛つて立たしておくと飼猫が妻の足に
じやれている。真白い妻の足に朝日がまぶしい。



デッサン

を用いた縛り

滝 麗子・画



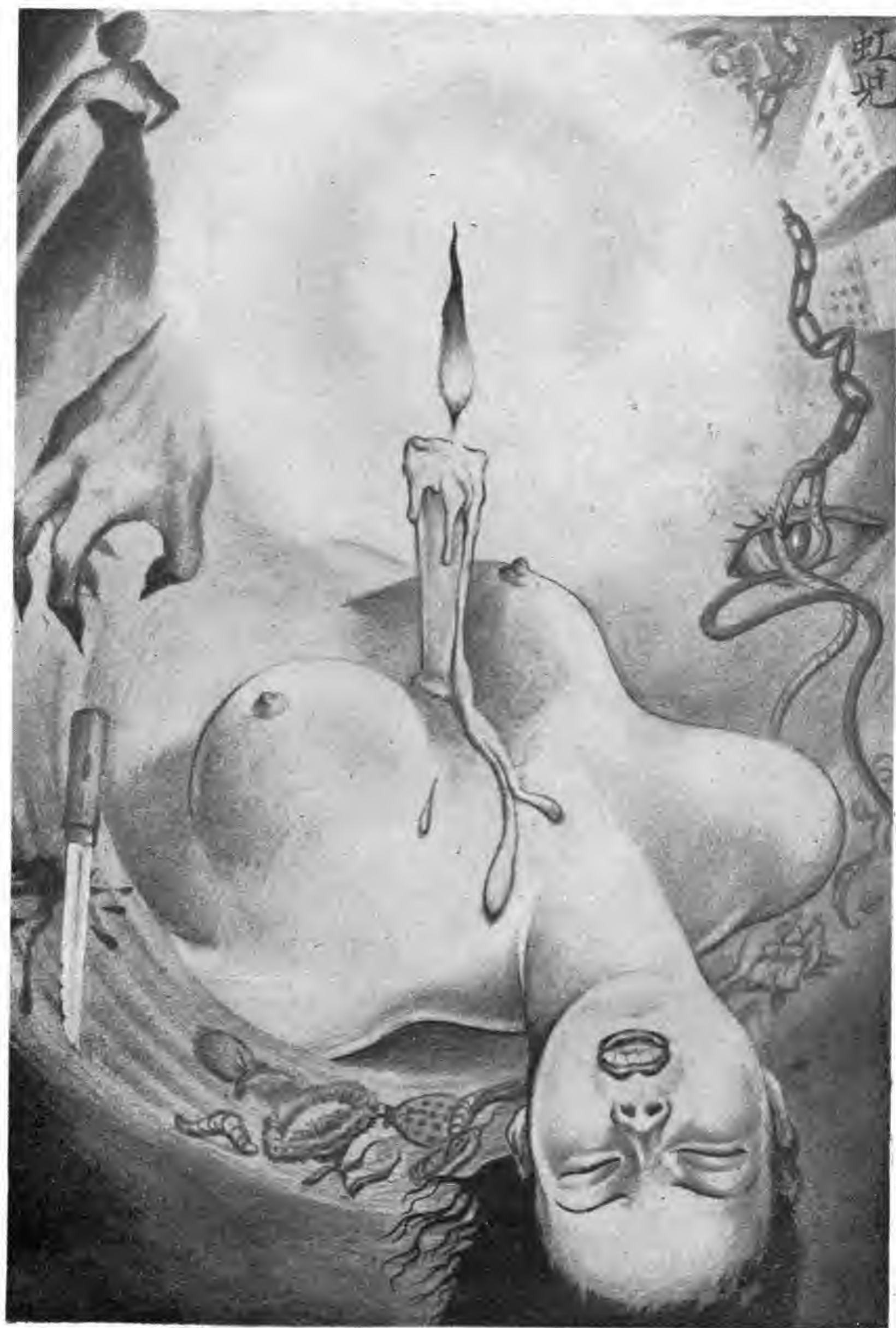
縛 絵

梯子



FANTASTIC DREAM

杉原虹児



桶 伏

— 刑事博物図録より —

揚銭を負いたるものを捕えて、古い風呂桶の中へ伏させて置く私刑。おもてに、何屋何右衛門殿、揚銭すまされぬ故、ところの法にまかせ桶伏仕ると書附け、その男の親族朋友らの揚代金を弁償に来るまで晒し、さもなくば、食事は一日一椀に生塩を振りかけて与え、大小便垂れ流しのところへ五、六日も留め置いて懲しめる。



新時代の風俗雑誌

奇 譚 ク ラ ブ

1954年 7月号

(第八卷 第七号 通刊第七十号)

ロマンチックなサデイズム

——或る気の弱いサデイズトの手記——

藤

見

郁

先日、ちょっと用があつて日比谷公会堂ま

で出掛けてその帰り、時計をみると一時間程
余裕のあるのに気づきました。いつも仕事に
追われて公園など散歩するひまのない私にと
ってよい機会だと思い、空いている芝生に腰
を下ろしました。よいお天気の日でした。五
月のはじめでしたので、若葉新緑にもえた樹
々が、いっせいに青空に向つてのびていま
す。塗りかえたような鮮やかなグリーン的美
しさでした。その下に、きつと会社を脱け出
して休息をとりに来たのでしよう、勤め人ら
しい男女が連れ立ってあちこちに腰を下ろし
ています。真白いワイシャツが陽に映え、い
ろとりどりのブラウス、ワンピースが樹々の
緑と調和して健康的なところよい眺めでし

た。

と、私は、私の隣りに（といつても四、五
メートルは離れていました）坐つて何事か
を語り合っている男女に気づきました。私の
周囲にも何組かの男女が楽し気に語らつて居
ましたが、何故その男女だけに気をとられた
かといひますと、いきなりその二人がブツと
吹き出したからです。かなり高い声で笑いま
した。私が思わずその二人の方へ振り向くと
その男女は恥しそうに一寸首をすくめて、
今度は前よりも低い声で語りはじめました。

二人共、まだ二十を過ぎたばかりと思われ
る年頃で、若さと健康に溢れた、青春そのも
のといった感じでした。

私の胸にちよつと嫉妬に似た感情が湧きま

した。

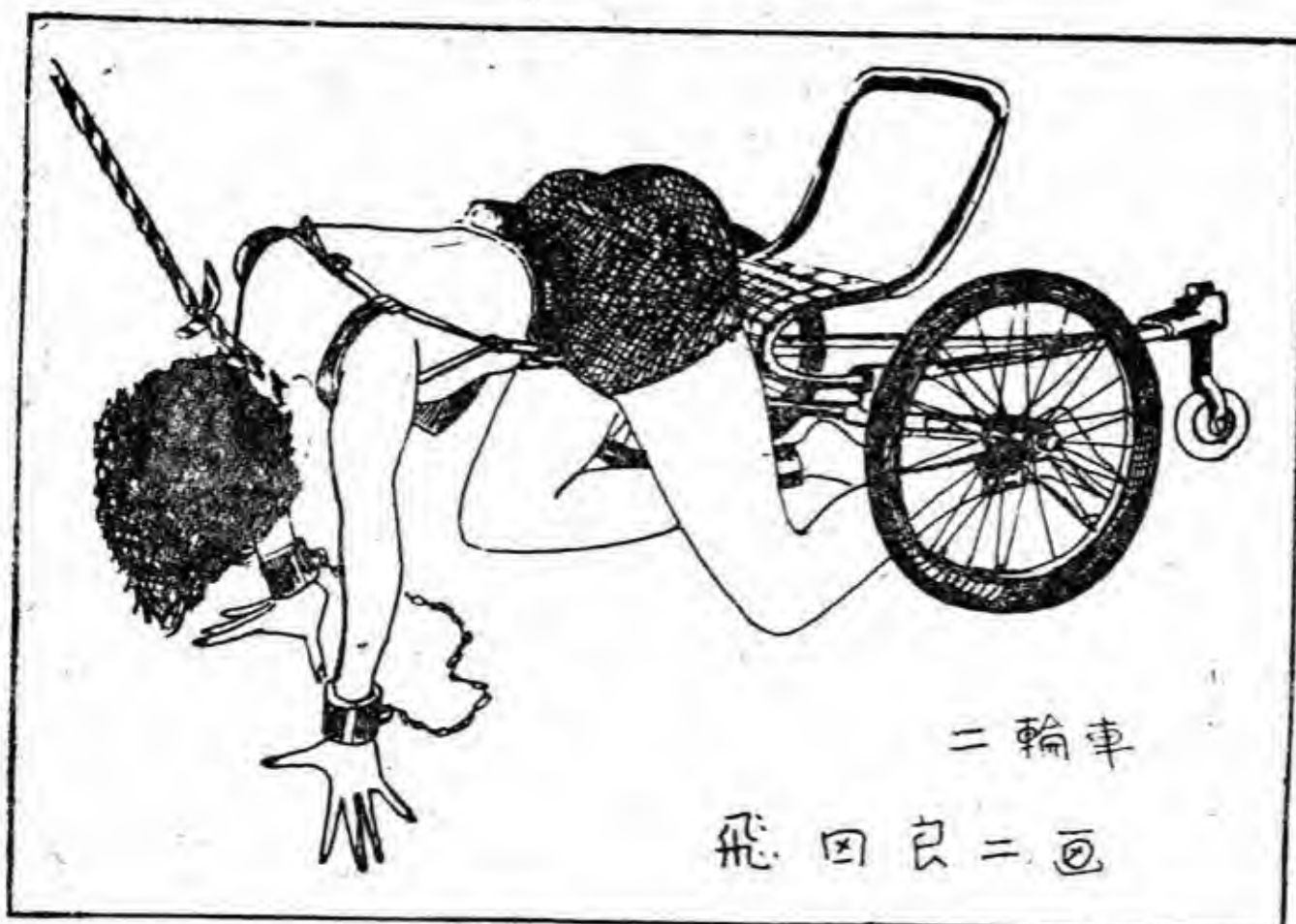
で、見ないようなフリをして、時々その青
年と娘の方を注意していました。こんな時、
私のような第三者はそ知らぬ顔をしているの
がエチケットぐらい、充分知っていたのです
が、二人があまり仲良さそうなので、やはり
嫉んでいたのです。

少したつと、その若い二人の声は又、私に
聞える程高くなりました。耳を澄ますと、
「だってそうじゃないか、ぼくだってちゃん
と知ってるんだぜ」

と、これは青年の方です。

「あらア、そんなことないわよ。それはあな
たの誤解よ」

「チエツ、うまくゴマかそうだったって駄目だ



「よ」
「ひどいわ、誰があなたをゴマカして？」
「ひ
どいわ、怒るわよ」

「怒るのはぼくの方さ。こら、いいかげんに
白状しないか」

文字で書くと喧嘩しているようですが、実

際は二人共、甘ったるい声でニコニコ笑いながらしゃべっているのです。盗み見、盗み聞きされているとは知らずに。いや、たとえ知っていても、その第三者に注意し警戒するだけのゆとりはおそらく無いでしょう。何しろ楽しい最中なのですから。

そのうちに、私の胸が、ドキリと鳴りました。

「どうしても白状しないって云うんだな」

「ええしないわよ、だって身に覚えのないことなんですもの」

「よウし、じゃこうしてくれる」

男の手が、娘の背中をまわって反対側の白くやわらかそうな手首をギュッとつかんだのです。そして背中からねじ上げたのです。

「どうだ、これでもか」

「ああ、痛い、痛い、やめて」

「フフフ……」

男はわらっています。

「バカねえ。人が見てるわよ」

「誰も見て居ないさ」

「やめて、離して」

「ソラソラ、動く痛いぞ、腕が痛いゾ……」

「意地わるウ……」

娘は腕を背中にねじあげられたまま、少し恨みのこもった艶っぽい眼で、男の顔を見上げました。二人の背後には樹が茂っているのです、この戯れは気づかれません。

娘は残された自由の手で、つかんで離さない男の手をつねり、ひっかいて、解放しようと努力しますが、やがてその手も、男のガツチリした掌の中につかまれてしまいました。

娘の両手首が背中で男の手にとらわれた様子を見ると、私の背筋にゾクリとしたものが走りました。

娘はもがくのをやめました。誰かに気づかれ見られるのを恥じてか、或いはもう抵抗しなくてもかなわないとでも思ったのでしょうか。男の太い腕に頬を寄せて、いかにも愉し気に小声で歌をうたいはじめました。あたりに人が居なかったらキスでもしたい所だったでしょう。青年も何かを白状させるつもりだったらしいのに、それも忘れて、女の両手を束縛し

たまたま、その歌に、これも小声で合わせはじめました。

やがて、二人は起ち上ると、お互いに腰や背中についた塵や草片を払い落して、今度は腕を組み合って、私の側から離れていきました。これから午後の仕事に従事するのでしよう。一刻の休みを充分に、効果的に、たのしみ尽したというような軽やかな二人の足どりでした。

私は、その後姿を見送っていました。

——あの青年はサディストなのかしら？

あの青年に、あんなに腕をねじあげられても楽し気な表情を歪めなかったあの娘は、マゾヒストなのかしら？

あの青年は自分のサディズム的行為を、どの程度自覚しているのかしら？

いやそれよりも、あの行為が果してサディズムといえるものなのかしら？

サディストである私に、たしかにあの青年の行為は興味

を覚えさせ、ゾクリとしたものを感じさせたのだから、やっぱりサディズムには違いないのだけれど——

私は、ぼんやりと考えました。軽度なサディズムと、言えば言えるのでしよう。

たかがそのような行為を、サディズムだと称したら、もっと高度な？ サディズムの方々に、私はお叱りを受けるかも知れません。

「サディストの風上にも置けない奴だ」と。しかし私は、あの恋人同志の楽し気な和やかな雰囲気包まれた語らいのさなかの、あの青年の愛撫に、意識的にしろ無意識的にしろ、サディズムが利用され、効果をあげていたことを認めないわけにはいかないのです。愛し愛される者の幸福な姿は、私に嫉妬を覚えさせる程、和やかであたたかみのあるものでした。しぜん、その男女のサディズム、マゾヒズム的行為も、明るく愉し気でロマンチックでした。ロマンチック、そうです、私に言わせれば、ロマンチックなサディズムだったのです。

私のサディズムは極く小さい頃、小学校二、三年位から芽生えだしたようです。

サディズムというものの、先天的なものか、後天的なものか、一体どうしてそういう心理が生ずるのか、私はこういう方面の文献的な勉強は全然して居りませんし、するひまもありませんでしたので、よく知りません。

飛田良二画
罪の椅子



しかし、私も多くのサディストの方々のように、縛られた女性の絵を集めたり、描いたり、女性が縛られる小説や映画、芝居等を慾望のおもむくまゝに、かなりあさりしました。成長して青年になってからは、好きな女性を幾人か縛ったこともありました。

しかし、サディズム、イコール残酷、女性虐待などというような結果には、もうやがて三十になるという今日まで遂になりませんでした。おそらく私は一生、この程度のサディズムで満足して過すでしょう。

最近、こうしたサド、マゾ、或いはホモ関係を主とした雑誌が、いろいろと街にみられるようになりました。私も買って読みます。すると、小説や告白手記の中に、すさまじい場面が展開されて、私をびっくりさせるのです。天井から逆さに吊して、一晩中そのまゝで置いた記事だの、吊してムチで叩いて遂には殺してしまう小説だの、檻の中に入れてクサリでつないでおく手記だの、あまりに強烈なサディズム、マゾヒズムに、私は快感を覚えるどころか、時に怖しくなってしまうのです。

勿論、こうした強い刺激でないとサディズムを感じない方も多く居られると思います。

が、私にはやはり距離を感じさせるようです。中には、朝から夜まで、夜から朝まで始終サディズムの中に浸っていないと気が済まないような方も居られるらしいのですけれど、私がサディズムを楽しむのは、仕事から解放された休息の時、つまり夜とか、日曜日の休日ぐらいなものです。たまに仕事が忙しくて日曜日にも休めずに付き続けている時など仕事中でも急激に、サディズムの感覚の中に浸りたいなアと思います。サディズムを、憩いの中に採取したいのです。

責め写真の場合でも、縛られた女性の肉体を、明るく美しく撮ったものでないと、欲しい気になりません。やはりそこにも、ほのかなロマンチズムのただよいがないと、私にはこころよく感じられないのです。と云っても、縛られ責められている女性の顔がニコニコ笑っていたりして、無念、口惜しさ、苦痛等の表情が無いのは、やはりつまらなく思います。そこが、サディストのサディストたるところなのでしょう。

先日買ったFという雑誌に、戸外で縛られている女性の写真が載って居りましたが、撮影技術のせい、印刷のせい、或いは編集者の意図がそこにあったのか知りませんが、

妙に陰惨に、生々しく映っていたのに、不快な気分になったことを覚えています。

「奇譚クラブ」の写真は明るく健康的で、ロマンチズムの匂いを感じられ、時にはユーモアさえ感じられます。撮影者とモデルに眼にみえない苦心がありそうです。

多くの若いサディズムの方々は、その感覚を求めて、よく映画館や劇場におもむくの私は知っています。はっきりしたサディズムの芽生えを、スクリーンにうごめく美しい女優の姿態から感じた方も、決して少なくはないでしょう。

私も又、サディズムを求めてよく映画館にもぐりこみます。殊に、女性の縛られているスチール写真をみた時など、たまらない魅力を感じます。

映画は、私のロマンチックなサディズムへの憧れを、或る程度かなえてくれるのです。美女が悪漢のために危難におち入って、観客をハラハラさせるストーリーは、やはり時代劇が一番多いようです。それから現代活劇にもよくみられます。それらの映画の大部分は質的にこれと云ってとり上げるものはありません。くだらない映画が多いのです。つまり、定まりきった事件の展開、発展、主人公

の危機、クライマックス、ハッピーエンド、となっています。観客ははじめから物語の結末を知っています。正邪の剣の戦い、適当な色気模様等、使い古された場面設定の積み重ね。あとはその過程に於ての監督の手際、主演助演男女優の魅力が、いかにその映画を面白くみせるかということです。

これらの映画はあまりにもドラマチックであり、ロマンチックです。現実離れしています。私達は余裕をもって主人公の危難を傍観していることができるのです。

黒覆面の悪漢が美女をさらって深夜の大江戸を逃走するシーンなど、私は胸をワクワクさせながらみえています。柱にグルグル巻きに縛られたヒロインが、苦しい猿ぐつわの息の下で、必死に救いを求めてもがく場面など、恍惚として眼はスクリーンに吸いついたまゝです。

映画ではヒロインは必ず助かることになっています。そして最後には、必ず恋人の胸に抱かれて幸福になります。それをチャンと知っているからこそ、クライマックスにヒロインが縛られ、責められるのを、安心して観ていられます。

客席内が適当に暗く、スクリーンに展開す

る光の影が夢想的で浮世ばなれしているからそんな余裕もあるのです。いやそれよりも、この責め場面がお芝居で、男女優の演技だということをよく知っているからこそ、楽しむ雰囲気が生れてくるのだと思います。

実際にこういう責めの場面、たとえば戦前又は戦時中の日本警察の、あの野バン極りなき拷問などをみていたら、気の弱い私などおそらく気絶して倒れてしまうでしょう。

最近、といっても二、三年前ですが、賭博か何かで検挙された若い女性が、警官にひかれていくのをみました。街中でそれも真昼間でしたが、その警官が特に荒々しい振舞をしたというわけでは無かったのに、人間が人間を捕え、手錠をかけてひいていくという雰囲気非常に非常な怖しさを覚えて、早々にその場を退散した経験があります。

映画でも「無防備都市」とか、日本の「真空地帯」とか、ああいう凄惨なものからは、とても趣味としてのサディズムは感じられません。暴力への恐怖、フアシズムへの怒りでいっぱいです。又、「縮図」のような、ああいう多くのサディストに関心をもたれた映画でさえ、私には無条件で喜べなかったのです。縛られた女優は乙羽信子でしたが、封建

制度のもたらす虐げられた女の悲しみを、彼女はよく表現していました。趣味などを超越して、非人間的な社会制度への怒りに、私は胸をふるわせて画面をみていました。こういう映画は決していたずらにロマンチックなものではなく、リアルな描写で芸術的にも非常にすぐれて居りました。

又、戦後、田村泰次郎原作の軽演劇「肉体の門」空気座公演が評判になって私もあの舞台を何度も繰り返し観て、面白くたのしく感じましたが、つい此の間東京で上演された新劇の新協劇団の「山の民」（江馬修原作、村山知義脚色）では、「肉体の門」以上の拷問、責め場があったにもかゝらず、私は遂に、ロマンチックなサディズムを感じ得ませんでした。

主題、ストーリーの現代的意義、虐げられた百姓達の一撥、その弾圧のための拷問等、あまりにもリアルな演出演技だったのです。娯楽的なサディズムの一片もなく、拷問の怖しさは眼を覆うばかりでした。

前に私は幾人かの女性を縛ったことがあると述べましたが、強制して縛ったことは一度もありません。又、水商売の女性などに、金

を与えて縛ったこともありません。金で女性の身体を束縛することなど、私のもっとも忌み嫌うところですよ。

私は過去に幾度かの恋愛を経験してきました。何故か常に、周囲に女性の居る環境に育ち、生活してきたのです。然し、不まじめな単なる享楽だけの恋愛は経験したことはありません。常にまじめに愛し、愛され、苦しみの多い恋愛でした。それらの恋が実を結ばなかったのは、いろいろな社会的な制約があったからです。純粹な愛情を遂げさせるには、今の世の中はあまりに冷たく、不合理に満ちています。しかし、これは本題ではないので避けましょう。

私達の愛情が強くなればなる程、自然の結果として、お互いの深い所にまで結びつこうと求め合うものです。道徳とか、常識とか、過去の人間が作ったそんな小うるさい制約に反抗したい時代が、私にもありました。

私が思春期に達して、はじめて愛した女性は、妙子と云いました。彼女は小柄で色白の頬のあたりにまだ少女らしいあどけなさの残っている娘でした。

二人きりの夜。

布団も敷かれ、真白いカバーのかけられた

枕が二つ。

「あたし、帰るわ」と、

妙子が云います。

「駄目、帰さないよ」と、

私は妙子の二の腕をグイと掴みます。

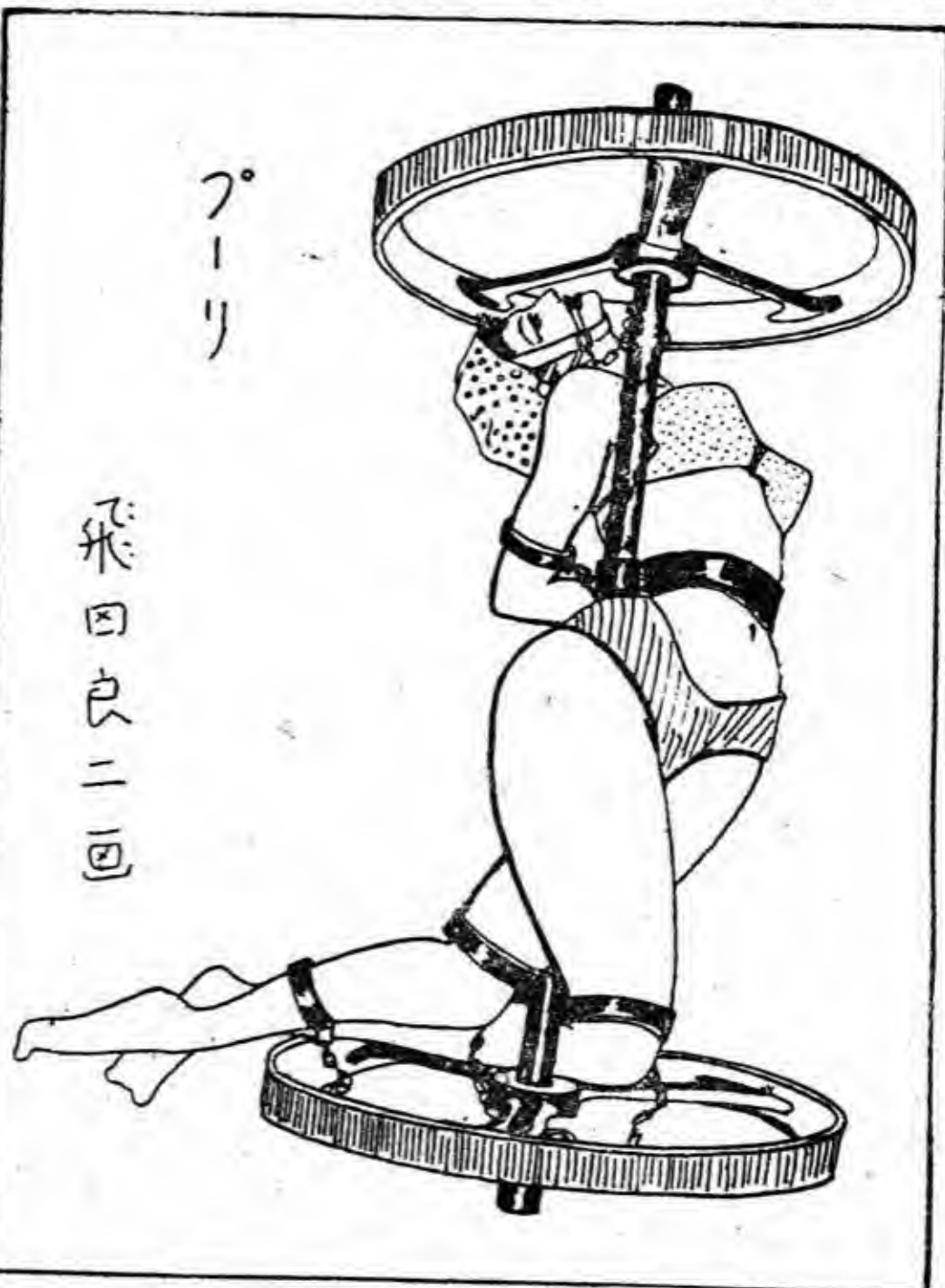
す。

「だって……あたし……なんだか悪いことをしているような気がして……」

「馬鹿！ ぼく達、こんなにも深く愛し合っているのに……」

「でも……でも……」

「結婚しよう、結婚してしまえば、どこでだ



って何時でも大っぴらに愛し合うことが出来るのだ。うるさい世間の眼にも、平気でいることができるんだ……」

これは何時も繰り返す言葉でした。こう書くとき、私の一方的な誘惑のようですが、決してそんなことはありません。女性と云うものは、表情や身体全体で言葉以上のものをしや



べることが出来ます。

ねまきに着替えた妙子の愛らしい姿。

「妙子……妙子……」

耳もとでやさしく呼ぶと、「うん？」とい
って、あどけなく私の顔をみあげるのです。

「もう帰さないよ。もう絶対に……。こんな
可愛い君を放せるもんか。帰さない……。帰
れないように、手と足を縛って置こうかな」

私はやさしくこういうと、腰紐で妙子の両
手を後ろ手に縛り、足も又、固くなくゆるく
なく縛りあげるのです。

「こうするとね、君がとても綺麗にみえて、

いつもよりももっと可愛くなるんだ」

と、さゝやくと、

「そういうもののなの？……」

妙子は何の疑惑もなく、私の腕の中に眼を
つむります。

妙子の身体を縛るのはその程度で、海老責
めだとか、柱に縛りつけるとか、そういう凝
った責めはしませんでした。しなくても私に
は満足だったのです。

今思い出してみても、妙子との愛情の交叉
に、殊更に刺激的なサディズムは無かったと
思います。あるのはロマンチックな、それだ

けに淡くせつな思
い出だけです。

妙子だけではなく
その後の女性との交
際にも、私は、私の
サディズムを充分愉
しみました。自分で
云うのもヘンですが
女性を縛るまでの、
心理的な、或いは肉
体的な誘いの技巧に
私は長じていまし
た。極く自然にスム

ースに私は恋人を縛りました。ロマンチック
な雰囲気の中で巧みに誘うと、全ての女性が
必ず強い抵抗なしに縛られます。愛情の技巧
です。勿論みせかけの、表面だけの愛情では
この愉悦は味わえませんが。

ロマンチックなサディズムの数々の甘美な
記憶が甦えり、苦しみ多い人生の、こうした
面でのたのしさを思います。

妙子はその後、私よりももっと生活力のた
くましい男のもとへ嫁に行きました。彼女は
貧しい老母と幼い弟妹を抱えていたので、金
のない私とは、どうしても結婚できなかった

◆告白と手記と体験◆

懸賞募集

賞金

優作	一篇に付き	三千円	若干篇
秀作	一篇に付き	二千円	若干篇
佳作	一篇に付き	一千円	若干篇
規定			

- 一、枚数は一篇十五枚から三十枚程度まで
- 一、必ず未発表のものであること
- 一、原稿第一頁に懸賞告白と朱記して下さい。原稿の返却は勝手ながら致しかねます。
- 一、締切は別に定めませんが、入選作は最近号に発表いたします。
- 一、匿名は御自由です。
- 一、賞金は入選作品発表と同時に送ります。

のです。彼女にさゝやかな結婚祝の品を贈った後、気の弱い男がよくやることですが、私も又、新橋裏の安酒場でしたたか酔って、妙子の名をつぶやき続けました。が、これは余談になります。妙子との愛情は、私にとってはじめての女性だっただけに印象も深く、ここにちよつと書いてみたのです。

以上、私は、私のサディズムについて、いろいろ述べてきました。私は娯楽の一部分としてのサディズムを、享楽の手段としてのサディズムを愛しているのです。日本人はまだまだ人生をエンジョイすることに、自他共に種々の抑圧を受けています。セックスを、いやらしい汚らわしいものと教えられ、蔭ではどんな卑劣なことをしても、表面はとり澄ました聖教徒のような非人間的な人間を、紳士と呼んだ常識が、まだ

私達の周囲に残っています。それどころか、再びセックスの問題を、暗闇の中に押し込めようとする風潮が、その辺に現われてはいないでしょうか。

歪められた性の観念を、もっと勇気を出して打破していく所に、健全なサディズムの解放があるような気がするのです。

この、私程度のサディストも、「奇譚クラブ」の読者の中には沢山居られるのではないのでしょうか。或いは、御自分のサディズムの限界を突きつめていったら、観念的に誇大なものは消えて、案外、私程度のサディストがその大部分を占めているのではないのでしょうか。

「奇譚クラブ」の存在も知らず、自分のサディズムにすら自覚を持たないで、こっそりこの愉悅に浸ることに、多忙な人生の安息を見出して居る人も居るでしょう。ロマンチックなサディズムは、たしかに人生に憩いを与え、単調になった性生活にも、こころよい刺激のアクションをつけてくれると、私は心から思うのですが。

(おわり)

x

x

x



股^{また}

裂^{ちぎ}

き

散^{さん}

華^げ

多 山

皓

それは徳川將軍、四代家綱公の時だった。

東海道は島田の宿場のある木賃宿に多勢の旅人がとまり合せていた。折柄梅雨の季節とて大井川はおびたゞしい水量に濁流渦をまき数日前から、川止めとなっていた。

客の中にはもう五日間も滞在している者もいて、その間には無聊を慰める遊び事や、手なぐさみも行われ、その出来ない堅気の商人や女子供は、車座になって、かわるゝ世間話やお国自慢に花を咲かせていた。

そこには偶然にもまことに数奇な運命にもて遊ばれた人が多く、随分面白い話も沢山あったが、今日はその一つを御披露しよう。

その物語は、二十前後の美しい品のある顔立ちの女巡礼によって物語られた。

方
hata

上

私が斯様に巡礼となりましたのは、別に悪事を働いたわけではありませんし、又色恋の沙汰でもありません。一つには或る人の行方を尋ねる為、又他には又或る人の菩提を弔う為でございます。こう申し上げますと、みな様方の中には、さては仇討かと思われる方もあると存じますが、決してそうではありません。成程尋ねる相手が父の仇という事になれば筋は通りますが、生憎そうではございません。実はその逆で、菩提を弔う相手は赤の他人、然も敵の片割れ、探し歩いている人は肉身というのでは、いさゝか見当が違っております。

私の父は名前ははゞからしていたゞきますが、奥州のさる大名の家老を勤めて居りました者でございます。母には早く死に別れ、家族と申せば父と兄の主税と私の三人でございますが、召使う者も多勢おり、これでも中々派手に賑やかに暮して居りました。

所が、一昨年の秋、父は私共兄妹を残して切腹をして果てたのでございます。

それと申しますのは、將軍御世継ぎ御誕生のお祝いに、家宝の千鳥の香炉を献上する事になりました。所がその香炉が献上の前日となつて突然紛失いたしましたして、行方不明にな

つてしまったのでございます。

まア、お家騒動にはつきものでございますが、父はそのため割腹して相果て、兄主税は宝物の行方詮議のため、城を後に諸国を流浪することになり、私自身は、若殿の許婚として、将来は大名の奥方との夢もうたかた、兄が宝物を発見するまでは、人質というので、昔の人質廊の、もう何年も用いなかった古い蜘蛛の巣の張った部屋へ押し込められてしまいました。あゝ、その人質廊の生活、思い出すと身の毛もよだちます。

本丸から離れたこの廊は、南と東は木立ちに囲まれ、西と北はお堀の石垣で、南向の高い所にあかり取りの窓があるとはいうものの、昼も薄暗く、夜は夜で怪鳥の叫び声や犬の遠吠えなど物凄くばかりで、こんな所に長くいたら気が狂ってしまうだろうと思われました。その上食事と申せば朝一回、やっとな手の通る位の小さな穴から、竹の皮につゝんだ冷たい麦の握り飯が与えられるだけでした。私は日ましに痩せ細って、あと幾日生きていられるかと自分ながら不安になつて参りました。所が一月も経たぬ頃から、急にあつかいがよくなつて参つたのでございます。これはいつものお殿様の性質で、一時怒りにまかせて非道

い扱いをなされても、怒りが静まると不憫に思われるのです。それで朝はそれまで通り握り飯でしたが、もう一度晩にも食事が運ばれる様になったのです。

然もその時には、朝の握り飯とは違って白い米の炊きたての温いまだ湯気の出ているような飯に、香の物や、時には魚や野菜もついているのでした。

初めてその食事にありついた時は、もう死んでもよいと思つた位でした。いや本当にこれはいよゝお仕置になるのではないかという疑念まで起つた位です。

そういう事が、何日か続いた時、私は妙な事に気がつきました。

それは、朝夕食事を運んでくれる人の手が違ふ事です。朝食も夕食も、運んでくれる人は女の人なのですが、朝の手は、少々しみのついた、四十年配の皮膚もたるみかけた年頃の手、そうして夕方の手はまだうら若い二十前とも思われる真白な手で、よく見ると手首から二寸程上の所にケシ粒程の黒子のあるのが分りました。私にはその手が、何か非常にしたわしく思われて、毎日夕刻になるのが待ち遠しくて仕方がありませんでした。

或る日私は、夕方食事を運んで来た手を捕

えて、こう尋ねてみました。

「あなたはどおじてこんなに私に親切にして下さるのですか、あなたは一体どなたです。名を聞かせて下さい。」

するとその手は答えました。

「これは殿様の思召し、妾は名もないお端下でございます。」

然し私には、それが殿様の御厚意でないという事がハッキリ分った様な気がしました。

「うそです。あなたは何かわたしに関りがあって手厚く下さりて下さるのです。」

重ねて私が申しましたが、手はそれ以上答えず、振切って行ってしまいました。

それからその白い手は恐ろしく用心深くなり、殆ど手首だけ出して逃げる様に行ってしまう様になりました。私のはしたない所為から、ついに唯一の慰めであった黒子も見る事が出来ぬ様になり、味けない数日を送っていた或る日、私は不意に廊から出されました。

何でもわけを聞けば、例の香炉は見つかったのだとの事でした。然し残念な事には、発見したのは兄ではありませんでした。

若殿様の乳人で、お睦の方という今は四十を少々越えたお局がおりました。その娘で、お佐和様という、私と殆ど同年輩の女がその発

見者でありました。然も驚いた事には、その香炉のあった所というのは、私が閉じこめられていた人質廊の直ぐ下に当る古井戸の中から発見されたのでした。お佐和様が折からのむし暑さに、涼みにその井戸の傍まで来て、つい大切な櫛を井戸の中へ落したのでした。それを拾いに入った若殿が、井戸の中から櫛と一緒に香炉の小箱を持って出て来たのでした。そこで私は廊から出され、兄も呼びもどされる事になったのです。

とはいふものの、私はも早若殿の許婚ではありません。罪を許されて、腰元にでもしていただければ有難いという所でした。そして若殿の許婚としては、香炉発見の功もありお佐和様が納まるだろうとは専らの噂でした。

所が此処に不思議なのはお殿様の御振舞でした。香炉が発見されて間もなくお睦の方親子は殿様から過分のおほめになって面目をほどこしたのですが、二人が御前を退出したかしないかという時に、お殿様はハタとひざを打たれて

「二人の者共を今一度呼べ。」

と仰せられました。近習が直ぐに二人の者を御殿へ召し返されました。

呼び返された時にお睦の方は、何故かハッ

として取り乱したそうです。それでも殿様の御前へ罷り出ると、少しも悪びれた様子もなく娘と共に平伏いたしました。

殿様は二人が伺候すると、直ぐに次の問を發せられました。

「佐和は何の為に、あんな人も行かぬ古井戸へ近づいたか。」

その間にお佐和様は、にわかにうろたえろと、ドギマギとしはじめました。その様子を見てお睦の方もいさゝかうろたえておりましたが、強いて落ちつく、娘にかわって

「佐和は夕涼みに行ったのでございます。」

と申しました。然し殿様は、夕涼みならばもっと適当な所も沢山ある筈、娘一人であんな寂しい所に行くというのは不思議な振舞、誰か男を待っていたのであろう。不義は家の法度じゃと言葉鋭く仰言いました。

これは確かに不思議な点で、今迄は、香炉の発見された嬉しさで、誰も氣附かなかった事なのですが、よくよく考えて見れば、おかしい事なのです。古井戸は何しろお庭の奥も奥、殆どお城の外れにあるのですから、そんな所へ女の身で唯一人、涼みに行くというのもおかしな話なのです。

殿様は更に問い詰められて

「相手は誰じゃ、名を申せ。」
と厳しく仰言います。

お佐和様は唯顔色を失って、返事も出来ませんので、お睦の方は

「娘に限ってそのような不義いたずらなど決して決して。」

と必死になって弁解をいたします。

すると殿様は、ハタとひざを叩かれて

「読めたぞ、其方共の悪事一切、明白になったぞ。」

と、妙な事をいわれます。悪事といわれた時にお睦の方は、又もギクリとした様子を、殿様はお見逃しにはなりませんでした。

つまり、殿様のお考えは、こうだったのです。

香炉は、はじめから紛失したのではなかった。香炉を古井戸にかくしたのはお睦の方自身で、そ



れに依って、家老である私の父を失脚させ、若殿と許婚の間柄である私を追放し、香炉を娘のお佐和が発見した態につくろって、その手柄に依って、若殿の奥方にすわる。

こういうわけだったのです。これが殿様の

いわれる悪事で、至極ありきたりのお家騒動なのです。それを聞くとお睦の方は、はじめ真青な顔をして物も得言わぬ態でしたが、やがて気を取り直すと、こう申しました。

「私共は唯一途にお家の安泰を祈っておりますのに、その忠誠をお疑

いになるとは、あまり、浅間しうございます。」

しかし殿様は、又もや例の井戸の件を持ち出して申されました。

「佐和がわけもないのに井戸の傍に参った。別に男を待っていたのではないうという。してみれば、其女の筋書きに従って、わざと井戸の中へこうがいを落しに行ったと考えるより他ないではないか。」

その日からお佐和様は私に代って憂き目を見ることになりました。それも私のように唯一人、廊の中へ閉じ込められて

いるのとは異って、毎日々々、地獄の責苦を味あわなければなりませんでした。

古井戸の傍へ行った理由を問われて

「白状しろく」

と荒くれ男共に、竹の棒を縛られた後手の間に入れられて、じわりじわりとしめつけられたり、棒で打たれたりしたのは、序の口で遂には無惨にも裸にむかれ、割竹で尻を打たれ、ぬれた荒縄でがんじがらめに縛られ、或は、水責うつゝ責等、さまざま責め苦に会ったのでした。

元来、お殿様には、いさゝか惨酷を好まれる御性格がありました。若い頃には戦場に出て、敵の首を引き抜いたの、ねじ切ったのと常々自慢しておられた程で、例の切支丹の迫害の時も、日本国中で最も非道いお処刑をお与えになった位です。

殿様の加えられる拷問の厳しさは、近国にも聞えた評判の高いものでした。

以前、私も一度その拷問を遊ばす所を拝見させられた事がありました。それは御館に火事のありました時、その火事の元となった火の不始末をしたという疑の、菊野というお腰元に対する拷問でございました。どのように問われても唯一点張りに、「私は覚えがござ

いません」という菊野様を腰巻一枚の丸裸にして、庭へ細い穴をほらせ、その中に薪をカッカとおこして上へ何本かの竹を渡し、その上を両手を取って歩かせられたのでございませう。菊野様は、物凄煙にむせ、竹に上って火の中に落ち込み、髪や腰巻へ火が燃え移って、火だるまのようになりましたのを、やっとな助け上げましたが、遂におなくなりになりました。而も真犯人は他にあったので、この時ばかりは御殿様も、流石に後悔されて、厚く菩提を弔らわされました。

私はお佐和様の拷問は直接目では見ませんでしたが、後にその場に居合わせた人から聞いたことに依りますと、やはり物凄いのものであったそうです。然もうつゝ責にあった、意識の不確かな所で、無理に白状させてしまわれたのだという事も伺いました。しかしそれはお佐和様が死なれてから後の事でした。

兄が姿をあらわしたのは、その時でした。

私はまだ体が充分に回復していなかったのに、寢所の中に居りましたが、旅姿も解かずには私の枕元へ坐ったまゝ、さめぐと泣くのでした。

兄とお佐和様が恋仲であった事は、私さえも知らぬ位で、家中誰一人知っているものは

ありませんでした。それは所謂、不義はお家の法度という事をよく弁えていたので、人知れずに逢引きをしていた為でした。私はそれで謎の解けたように思い、

「古井戸の傍で、お佐和様が待っていたのも兄さんだったのですネ。」

と問いました。しかし兄は首を振って

「残念ながら、その事は知らない。」と寂しげに申すのでした。

下

その朝は空もカラリと晴れ上って、一点の雲さえ見られぬ、気持のよい日でした。とても、恐ろしい刑罰が行われる朝とはどうして思えないような――

私はその日の無惨な行事のことを考えると食事ものを通りませんでした。

はつきり言って私にはお佐和様が、敵なのか味方なのかさっぱり分りませんでした。

兄と深く愛し合っていたあの人が、まさかその父や兄を殺してまで、殿の奥方になろうという下心があったとは思われません。

然し実際の表面に現われた結果だけを見れば、恐ろしい陰謀に加担しているとしたか考え

られないのです。

私を長いあいだ、あの寂しい人質廊に押し込め、発狂するまでの思いをさせ、父を切腹させ、兄を放浪させた敵なのですから、私としてはその敵が処刑されるのを喜ばなければならぬ筈なのです。然し私にはどうしてもその気にはなれませんでした。

私共兄妹は、勿論お仕置には立ち合う事になっておりました。然し、兄は昨日の夕方書置を残して、何れへともなく逐電をしてしまったので、私は一人お城へ参らねばなりませんでした。私自身も気が進みませんので、とかく支度に暇取っておりますうちに、お城の方から打ち鳴らされる太鼓の音が、清らかな空気を破って聞こえてまいりました。

最早猶予もありませんので、私は静かに立ち上り、激しく鼓動を打つ胸を強いて静めながら登城いたしました。

城中ではすべて用意が整い、今やお仕置がはじまるうとしておりました。

私は、先ず殿様の御前に伺候すると、兄の書置を差出しました。その時は殿様は何もおしやらず、唯黙って目を通され、私に先に仕置場へ行って待つようにお言葉を賜りました。

さてお仕置の場所は城内の桜の馬場で、四方に幕を張りめぐらし、正面の御廊下には、殿様はじめ、御家老方の御席が設けられ、多勢の家臣がそのまわりを警護して、物々しい有様は、万一牛があばれ出した時の事を考えてでしょう。

さじきの前には二本の太い杭が立てられてその傍には様々な鉄の環や、鎖が置かれてありました。

お花見と見まごう場内の風景を、暗いものにしてゐるのはその環と鎖だけでした。

私にとりましては、こんな辛い思いは初めて御座いました。私自身がああ冷い牢へ入れられていた時でさえ、これ程の苦しみは感じたことがありませんでした。額からは大粒の汗がタラ／＼と流れ、背中もいつか夕立に逢った時のように、襦袢がグツツヨリ濡れていました。

やがて、殿様が御出座になるというので、皆居ずまいを正して居りますと、長い廊下をせか／＼と、お歩きになる袴さばきの音がサワサワと激しく聞え、息遣いも荒く、ひどく興奮をしておいでのように見うけられました。その息遣いが私の前でピタリと止まりましたので、ハッといたしますと、殿様は非常

な早口でこう申されました。

「長い間其方を苦しめたナ。然し其の疑いも今は晴れ、悪人共は今日、皆処刑されることになった。めでたいな。」

私といたしましては、何と御返事申してよいやら当惑いたしました唯頭を垂れて。

「ハイ。」

と御返事申し上げますと、重ねて

「其方の兄は気の毒じや、然し私情を以て法は曲げられぬ。悪く思うな。」

と仰言いました。

私情を以て大法は曲げられぬ。成程そういうものなのかも知れませぬ。それにしても、法というのはそのように冷酷なもので御座いましょうか。お佐和様が命を召されるのは法かも知れませぬ。然し、唯の打首とは事変り牛裂などという、聞くさえ恐ろしい刑罰になる。それが法なので御座いますようか。然しこうは思っても、殿様に申し上げることはとても出来ませぬ。この度も又私は「ハア。」といって頭を垂れただけで御座いました。

再び袴ずれの音がして、殿様には設けのお席に着かれました。

殿様の御着席を合図に、棒や槍を持った役

人共に縄尻を取られて、お睦の方とお佐和様の親子は頭を垂れて力なく、荒庭の上に引き据えられました。

やがてお睦の方はおさじきの前の杭に結いつけられ、お佐和様のお仕置から始められる事になりました。

お佐和様はもう失神したように青白い顔をしておられました。情容赦もない荒くれ役人共は、先ず縄をほどくと、手早くお佐和様の御着衣を脱がせ始めました。着物と申しましたも、以前の美々しい粧とは異なり、白い獄衣を脱がされたあとは唯一枚の腰巻のみ。それも手荒くはぎとられて、あられもない姿となったお佐和様は、青い顔にはじらいの色をあらわし、その場へ蹲ってしまわれたのでございます。流石にお睦の方も我が子のこの有様を見るに堪え兼ねて、面を伏せておりまして、並居る男共は、息をはずませてお佐和様の白い裸身を見詰めておりました。

私は、始めのうちは面を伏せて居りましたが、いつか見ずにはいられぬ心が持ち上って参りました。私にとっては憎まなくてはならぬ相手なのだ。兄の恋人でさえなかったら、心から憎むことも出来たでしょう。全く兄も因果な女に恋をしたものです。

そんな事も考えて見ました。そして思い切って頭を上げて見ますと、お佐和様は、最早中央に設けられた台に、荒縄で胴を縛りつけられ、左右の手足には、見るもいふせき鉄の環がガツシリとはめられ、最後の環が白い首にはめられる所でした。

その顔――

土のような色はしておりますが、何という気高い、品のある顔立ちでしょう。キリ、とした鼻すじ、内輪に閉じた唇、死んだように閉じた眼の上には長いまつ毛が露にうるおって居りました。

然し気高く、品のよいのは顔だけではありませんでした。体全体、すき透るように白く手足もスナナリと細長く、乳房もほ



どよい肉をこんもりと盛り上げ、まだ男を知らぬ証拠には、その丘の上には桃色の花が、まだ開かぬ蕾のように、恥じらわしげにふるえておりました。

腹部は、激しい息遣いを思わせて、はげしく上下し、脇腹にはその度に小さな笑窪がほころんでおりました。

兄は正しかったのだ。

私はこの時真に覚りました。兄が恋人として此の女性を選んだ事は少しも間違いではありません。間違っているのはお裁きです。この気高い女性が、あの恐ろしい事をたくらんだり、たとえ母にもせよ加担したりする筈はありません。

私は余程そう叫んで殿様にすがりつきたい衝動にかられました。

然し、よくよく考えて見れば、そんな事を申し上げても、お取り上げになる氣遣いは万々ありません。

その上悪い事には、私でさえ疑問に思っている数々の不審もあるのでございます。第一何故人も近付かぬ古井戸へ行ったか。それは私さえ不審に思っているのです。

いやいやながら母の威光に勝てず、悪事に組したのでしょうか。

そう解釈をした私は、やはりこれは見ないのがよいのだと、顔をそむけて居りました。所が、顔をそむけては居れぬ一大事が起ったので御座います。

それは、今にもお殿様の合図で、牛の角につけられた枯柴に火がつけられようとした時でございます。疾風のように一つの黒い影が

お庭を横切ったか

と思うと、白いお佐和様の上に馬乗りになりました。

その時一人の役人は、牛の頭へ火をつけてしまいました。

「ア、一寸待て。」

殿様の激しい御言葉に、松明の係の者共はサツと身を引きました。

然し、お言葉より一瞬早く火をつけられた一頭の牛

は、猛烈な勢いで走り出しました。例の黒い影は、お佐和様の上へ重り合うようにして、しっかりとお佐和様の体を抱きしめております。

火をつけられた牛は、勢よく走り出したものの、鎖が一ぱいにび切った所で、グンと後へ引かれて立ち止まりました。然し何という力でしょう。二人の人間をのせた石の台をズル／＼引きずりながら、歩き始めました。す



ると今度は、別の牛達も鎖がのびて後へ引かれるので、立ち上ってグイ／＼歩き出しました。黒い影ははずみを喰って投げ出され、お佐和様は、両手両足を左右に大の字に開かれながら、まだ生きんとする最後の努力をするように、目を大きく見開き、下唇を噛み、腹に大きく波を打たせておられました。牛追い達は、牛を静めようとして、しきりに声をかけますが、氣負った牛達は、どうしても止ま

ろうといたしません。

牛のうなり声、牛追いの声に交って、お佐和様の、喉の奥から太い笛のような声が一声聞えました。その時例の黒い影は、再びお佐和様の体へ向って突進し、ガバと抱きつこうといたしました。然しその瞬間、そこに居合せた人々の耳をつん裂くばかりの物すごい音とも声ともつかぬ悲鳴と共に、黒い影の飛びついたあたりが、真赤なもので覆われ、牛達は一時に走り出しました。お佐和様の肉体が遂にきんこうを失って破裂したのです。そして牛達の後には、鎖と環と、それについて真赤な血のしたる肉の塊が、白い砂の上を引きずられて行きました。そして例の黒い影は千切れた肉体の間に長々とつゞく腸を首に巻きつけて、全身真赤にそまって立っておりました。

あまりの無惨さに気を失う女中達もあり、男の人も正視せず、唯牛追いだけが、牛を静めようと一心に叫んでおりました。

その時、私の目の前に、白いものがころがつて参りました。ハツとしてよく／＼見るとそれはお佐和様の右の腕でした。どうかしたはずみに環が外れて飛んで来たもののようにうでした。そして私は、その腕を見てハツとした

のでした。その腕には見覚えのある例の黒子があったのです。あの毎晩々々御馳走を運んでくれた、あの手だったのです。毎晩々々特別に私のため人質邸に食事を運んでくれたのは、お佐和様だったのです。これで一切の謎も解けたような気がしました。お佐和様が例の古井戸へ近附いた理由をどうしても言わなかったわけも、これで分りました。その上お佐和様は決して母親に加担して悪事を働いたのではないことも――

然しそれは一足遅かったのです。お佐和様はもう庭の白砂を真赤に染めて、肉体を破裂させてしまっているのです。

暫くの間、私はその片腕を抱きぼう然としておりましたが、庭に馳け降りると、白砂の上の肉片をあちらこちらと拾い歩きました。牛達はもう取りしずめられて庭内にはおりませんでした。例の黒い影も一心になって肉片を拾い集めていました。今更申し上げるまでもなく、それは兄の主税だったのです。兄は恋人の惨めな最期を見るに忍びず、一度は出奔したのですが、もう二度と再び、相見事が出来ないと思うと、再び取って返して、いまわの際に間に合ったのでした。こうして気違いのようになって千切れたお佐和様の肉片

を集めている私達兄妹の姿には、お殿様さえ落涙されたということです。

兄は人々の引く袖を振切って、その場から再び何処かへ旅立ってしまいました。

私も殿様をお願いして、巡礼姿となつてかように国々を廻っております。一つは兄の行方をたずねて、亦一つにはお佐和様の菩提を弔うために――

入選作品の掲載について

本誌創刊七周年記念懸賞入選作品につきましては、本誌五月号より漸次誌上に掲載いたし皆さまの絶讃を博しておりますが最近の世評よりしてその描写に深甚の考慮を払いますため、本号所載の「華々しき凌辱」及び「悦虐回想録」はやむを得ず編集部にて大幅の削除を行いました。尙、今後の誌上に掲載予定の「被虐願望の女の手記」(細川美也子)「赤い川」(村瀬雷三)「妖虫記」(芳野眉美)「病める花びら」(須賀織代)の四篇は公開致しかねる部分が比較的多く目下検討中ですが、作者に訂正して頂くか、掲載中止するか、追つて決定したいと思ひます。

(編集部)

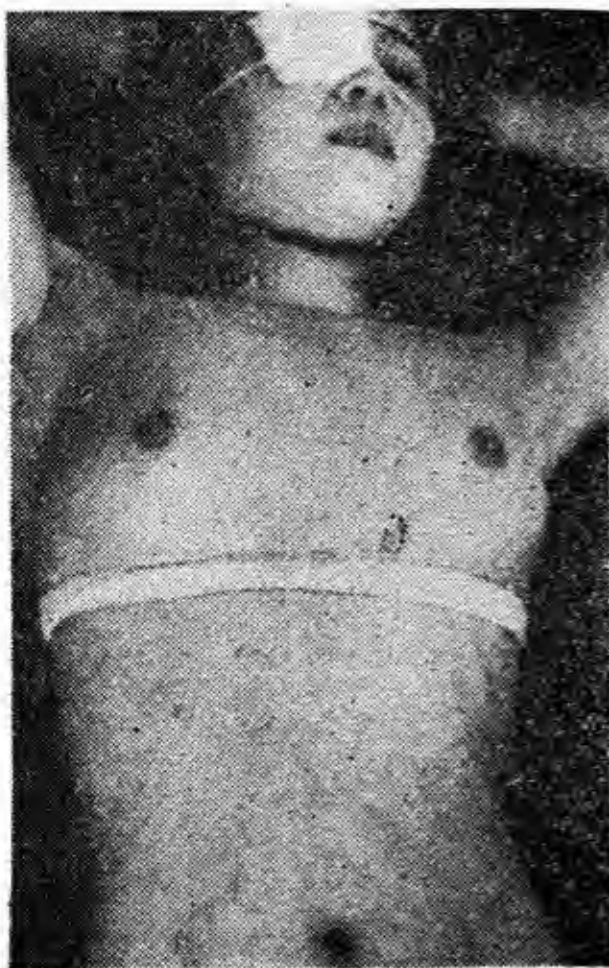
眼 帯 と マ ス ク

狩 井 麗 作

私は毎月、奇クを楽しんでいる読者ですが計らずも五月号に「眼帯に憑かれて」と云う手記が出ていましたので、私の感想及び記録を寄せたいと思います。その前に一般論として、私の所論をつけ加えさせて戴きたいと思っています。K.Kの躍進と努力には、常に敬服させられるのですが、発展にはいつの場合にも反省がなくてはならないと思います。現在その時期にあると思いますが、まだまだ反省すべき点も多い様です。アブ癖が昂じて、より強い刺激を求めるようになる、と云う前提の下に、アブ雑誌が次第に濃厚になるのか。或いは読者をより多く獲得し固定読者をより長期に購読させる為には、次々に新手を打ち出し、その為には少々きわどくなるのも止むを得ないと云う営業目的の為か（多分その両方と思うけれど）とにかく、最近各誌共行き過ぎがあったことは否定出来ないうです。KKはこの傾向を出来る限り压えた良心的雑誌ですが、それでも尚大勢にひきずられた感があるようです。

これらの反省として、吾妻新氏の「感情教育」鬼山絢策氏の「変態讀美論」等がアブの世界の実態性とその擁護をされ、又読者にも受けたと思います。実際KK読者にしても、真のアブニスト（この言葉を使用させて戴きます）の他に、普通性慾で満足している人々も、多いと考えられます。私自身、ノーマルな性慾で一応満足出来るし、別に、アブとノーマルの区別の必要性を感じてはいません。こんな読者としてしましては、残虐・惨忍・変態のあらゆる情景だけを次々に読ませられるのでは、刺激は充分ですが、読み終ってから、

(A)



心身に何か栄養になったと云う喜びや安らぎを多く感じる事が出来ないのです。別に教訓を望むのではなく、舌に強い刺激性飲料としてでなく明日の生活の為の糧となるものが欲しいのです。アブ専門の雑誌にしても、その基盤となっているのは、性探究と云う事だと思えます。それ故、アブだけに偏重した架空的読物と同時に、ノーマルの性に色々のバリエーションが加わったもの、或いは、ささかやではあるが人に知られない愛の美しい表現形式。又は、ノーマルとアブの中間的なもの等、落着いたおとなしいものがあってもいい

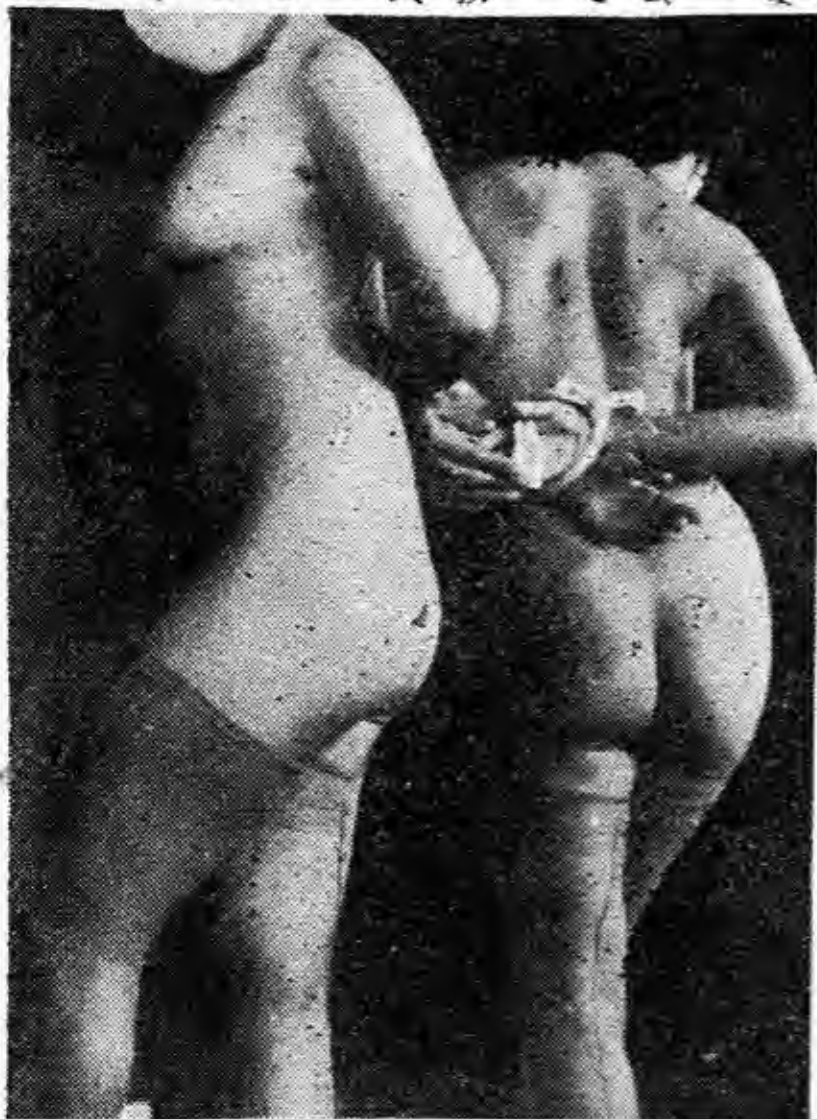


(B)

と思います。アブは量だけの問題でなく、質が大切である事は、吾妻氏、鬼山氏の説かれている所です。又、鬼山氏の論も、この事を強調し、アブニストへの偏見を啓くと共にアブ患者の救済をされています。しかし、この事は、今更説くまでもなく当然の事であり、性を探究する人は誰もが一応通りすぎる道だと思うのですが、この事を強調しなくてはならないのは、やはり読者と雑誌とに行き過ぎがあった事の逆証ではないでしょうか。

以上、私が言いたい事は、アブニストの強い要

求があるにしましても、出来るだけ性の探究と云う平凡な基本線を守って行って戴きたい事です。例えば、吾妻氏の感情教育、沼氏の手帖、鬼山氏の論、中康氏の切腹論、等は大切にしたいものです。往々にして散見する当局の意を刺戟する、きわどいエログロは出来る限り少くして、おとなし



(C)

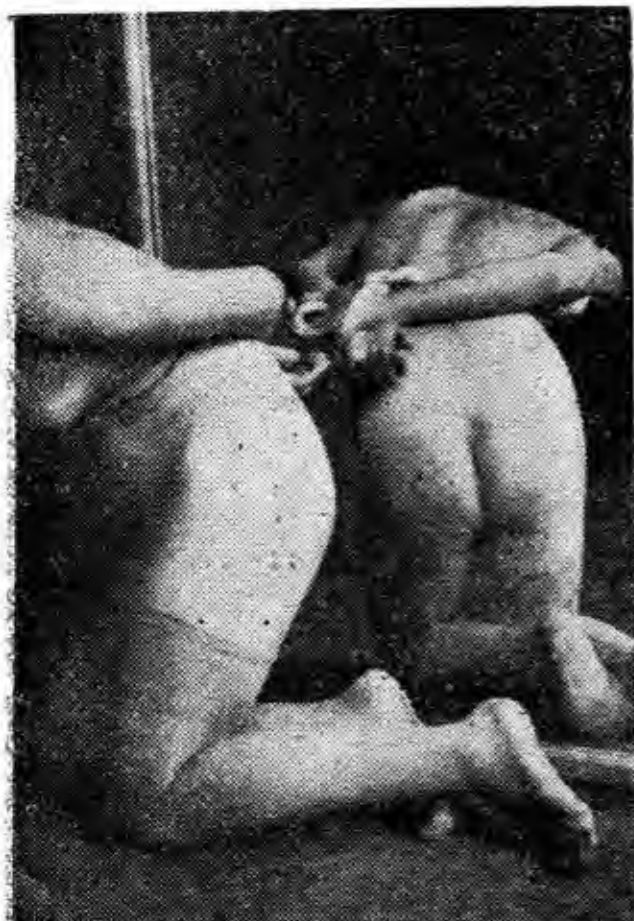
いものと一緒に取りまぜて戴きたいと思うのです。妄言はこれ位にして本題に戻りますが「眼帯に憑かれて」にしましても、内容は至極おとなしいものなのですが、表題の横に、猟奇マニヤの手記とありますが、何か、異常なマニヤのように受取られます。私のように言葉に捉われる性質では何となく気にかかるのです。編集者の御意向は如何でしょうか、このような手記は、読者のささやかな発表として、あまりあくどい題などつけずに柔らかに取扱って戴けたらと思います。このような

平凡な、美意識の集成から、香り高いアブの世界が作られて行くのではないだろうか。例えば、爪を愛したり、耳たぶや、うなじ、足裏の土ふまず等々の讃美者が出て来るでしょうし、この事は、より広く読者層を開拓する事だと思っています。

眼帯をかけた女。確にややアブ的性感を刺戟するようです。私も菅野氏と同じく、この種の女性に出会うと、胸がときめき、ふっと異様なうずきを胸の奥に感じるのです。その興奮が過ぎ去ると、はて、あの性感を刺戟した現象は何だろうと考えるのです。

眼帯。これは一種の刑具に通じるようです

(D)



正常な視力を奪うもの。丁度猿轡と同じ性質のものと考えられます。しかも緊縛の要素をも兼ねています。白いゴム紐がきっちり美しい顔面に喰い込んでいます。それも、デリケートな、女性の一番大切にする貴重な顔をきっちり締めつけているのですから、この上なく美しいものになるのです。同時に今一つの見方からすれば前述のような正常な人間の機能を外部から妨害するサチ的要素と表裏一体して、今一つの残された眼(視力)をより一層強く意識させ、強調する事に役立っています。眼帯をかけた女の美しさは、それが強調する所のおゝわれない瞳が、より一層動物的新鮮さを以て、人に迫って来る為だと思っています。何とキラキラ輝く瞳であり、ぱっちりとした濡れた眼でしょうか。白い刑具によつて生れた一つ目の人間。

これは一種の畸型です。しかもそれは何と云う美しさを示す不具者でしょうか。

私の資料とした写真(A)はこの事を物語っていると思います。マゾヒストには、この一つ目に見射られることに、無上の

愉楽を感じるだろうし、サチストには二眼で見てこそ、立体的安定感が得られる人間の一眼を人工的につぶして、不安定に悩む、顔をきっちり縛られた女性を前にして、この上ない興奮と、軽い勝利感に酔う筈だと思います。私はそのどちらをも感じるのです。

写真(B)の方は私がサチストになった場合です。両手を後手に縛られ、眼帯を無理にかけられた時、女は非常に不安感を抱くものです。手足の自由を奪われた時にも、両眼がある場合は、まだ周囲の情勢を冷静に判別出来ますが、眼帯をかけられた場合には、片方の眼が不自由乍ら見えるため、余計にうっとうしく感じ、はっきりと相手の位置をつかめない為に焦燥感を抱くのです。それが私のつけ目であり、責めとしての楽しさもそこにあると思われれます。ほんの一寸、いじめる真似をしてみると、彼女は、思わず、「いや! よして」と叫ぶでしょう。そして私の手から逃れようとするのです。それは丁度、蛇をなまごろしにして、あちこちもてあそぶように、サチストに取ってはすばらしい喜びであり、又通常の男女にとっても愛の前技として充分効果のあるものです。私は(どの写真も見て分るように)鏡を使って、あらゆる肢体

を映して見る事が大変好きなのです。これは私の視線をも満足させてくれるようです。

さて次は、写真(A)の場合の上向きの鼻腔について簡単に述べさせて戴きたいと思えます。これはわざわざ彼女を上向きにさせました。つんと、とがった鼻と二つの穴、この穴を、ゆっくり見つめている時、私は奇妙な興奮を呼びさまされるのです。何と云う、情慾的な肉体の欠陥であり、機能でしょう。暗く奥に通じた空洞。しかもその内部には、他の秘密な部分と同じ種類の毛が粗生しているのです。粘膜質の所は、あの部分と似ています。しかも顔の真中にあるもの。この奇妙な悩ましい道具に注意し、興奮する人はいないでしょうか。気をつけてごらんになってみて下さい。きつとあなたは何かを見出し、感じられるに違いありません。

マスクに移りましょう。古川裕子さんにより、マスクの効用は、皆さんもよく認識されていると思います。裕子さんのマスクは本当に素晴らしいと思います。彼女の感覚は、ボールドレルや、ランボーの詩心に通じるものがあるようです。彼女は日本のそこの詩人よりも、或いはすぐれた詩人であると私はいつも考えるのです。彼女の文章が作られるも

のでなく溢れ出る型のものである点等、興味深いものがあるようです。話がそれましたが私は白い大きいマスクが好きです。

写真(C)は如何でしょうか。大きく顔をおおうマスク、それを掛けられたボリウムのある彼女の裸体。彼女の眼がどのように妖しく濡れているか、皆さんに想像して戴きたいものです。そして彼女も鏡に自らの姿を映し出されていますこのマスクの効用についても、眼帯と同

じ意味を持つと思います。後手とマスク、私のサチ的性感は彼女のかくされた顔半分の表情を最大もらすまじく、見つめ観察するのです。彼女のすんなり延びた脚にびったりした



(E)

ストッキングは、彼女の羞恥を一層デリケートなものにします。マスクは確かに女性を二重に美しくするようです。そして一度マスクの上から接吻する事を覚えると、容易に止められなくなるようです。

何故ならばマスクからもれる鼻息は、たまたまなく刺戟的(柔らかく、又しめっている点で)であり、相手の唇を或程度噛む事が出来る為です。若妻にマスクをかけるさせて、生活するなどは、この種の同好家だけでなく、多くの

の人が実験して見られたら、ずい分家庭生活が生々と楽しいものになると思います。

写真(D)は、この女性を、ひざまづかせた所です。私はこの点ではサチ的要素をも或

程度強くもっているようです。美しい女性に白い口輪をはめ、後手に縛って、私を拝ませる事は、何と傲慢な勝利感を味あわせる事でしょうか。しかもこの写真で分るように、女性の最も魅力ある臀部をも、こよなく美しく強調しています。そして、ストッキングに包まれた、足裏までもはつきり見られます。足裏と云うのは、サデイストに取って刺戟をそそる個所でもあります。私は女の足裏の美しさや悩ましさについても、たくさん同好の

士が居られるのではないかと思っています。最後に(E)写真は、白い紐で縛った女像です。これは、写真的美しさを示すものとして撮ったものですが、女性のかくされた美が如実に示されていると思います。肩と乳房の曲線。大腿部のたくましいボリューム。上半身と脚を結ぶ白い紐。日本人ならではの黒い髪。これは、女性の持つ肉体の美と、これをしていたげる紐の構成による芸術品と思います。私はこのような肢体の美をぬき出し、創造す

ることにも、人一倍興味と探究心を持っているのです。私のカメラ行脚もこうして続けられて行くようです。以上、色々勝手なことを述べましたが、手記を寄せるのは初めてですし、こんな軽いマニヤ癖が取り上げられるかどうか疑問ですが一応私なりに綴ってみました。又いづれ、詳しい話を述べさせて戴く機会もあればと考えています。

【読者通信】(投稿歓迎)

私は「二百字讃歌」を見てやられたと思いました。実はこれを読む前に執筆にかゝっていた「魔子さま御尊像」にこの讃歌のように女王様にささげる讃辞があるので。しかもその讃辞を聞くことを最もよるこびとする魔子という女性の、美貌に対する自信に一転機を画する大きな要素をふくむもので、謂わばこの物語の女上位の位置を占める主題となっているのでもしめたと思つたわけです。尤も素材は全く趣を異にするので構わ

ないので「私」という一人称の男の始めから敬語を使つて話をすゝめる手法は、どうしてもこの「二百字讃歌」以前に私の作品を發表しておくべきだったと後悔しています。一寸つまづいた形で放つたらかしたまゝにしています。近いうちに書きついで脱稿したいと思つています。「美しい暴君」の足舐めも、「マゾヒストの会」に使われているのを知つたので困ると思つたのですが、これは私の体験だし、事実私の好みでもあるので書かなければウソになるのです。——こう書いてくると、これは

ウカウカしていられない。自慢にはならぬにしても男性マゾについては、私は充分発言の資格をもっていると考えていますので発表するものは、片っ端から発表して出来ないかと他の人に書かれてしまうような気がして、少し慌て出している始末です。といつても今迄の性理想の代用品が多いのですが、私達の主張したい性の神秘はナゾをかくして現実化するところに問題があるので、私は私なりに他人の書けない性の真実を書きたい。詭物の形式でそれは書くにしても

変態性慾の一つの貴重な資料を提供する心組みを、いかなる場合も忘れていないつもりであります。よろしく御指導の程お願いいたします。最後に沼正三、鬼山絢策、芳野眉美、真砂十四郎、近見啓氏へ。編集部は私の住所を通知してありますが、勝手なお願いですが通信下さいませんか。他にも同じ趣味を有する方の通信をお待ちしています。

(馬族保)

あるマゾ男の告白

才 昭 吾



昔、講談の豆本に、高橋お伝や鬼神のお松などの出歯庖丁を持って男を殺している場面が、口絵や挿絵によくのっていました。赤い腰巻の間から白い脛をのぞかしているその絵を見ると、私はいい知れぬ妖しい感情によくおそわれたものです。当時、私はたしか十六七才だったと思いますが、その絵を秘かに切り取って夜毎、色々な空想にふけりました。

その頃は、まだ自分がマゾヒストであるということも知りませんでした。二十才ぐらいの時、ある書店でマゾッホの「毛皮のヴィナス」という書物を買求めて始めて、自分が変態性格者である事をしり、その時ほど興奮にかられた事はございません。しかし、そうしたことが只空想の世界であって、現実には自分が体験者になる事をどれだけ憧れ希望したことでしょう。一生に一度でもよい、美しい女性に縛られたい。一夜でもいゝから美人の奴隷になってみたいと思っていました。そして若しそれが果されなければ、写真でもよいからマゾ男の縛られている場面を、見たいと願っていました。はからずも今回、書店にて自分が常々思っている雑誌を手取る事が出来た事は、どれ程私を驚喜させたことで

しよう。

ドイツやフランスでは、マゾヒズムの享樂できるクラブがあつてそこに行けば、実行に移されるという話を聞いておりますが、日本ではその様なクラブがあるということは、耳に致しません。事実日本の都会の一隅にそうした所があるかも知れませんが、草深い四国の片田舎に住んでいる私にとっては、噂さえ聞えこともございません。私はこの様な自分の性格にあつた娯樂雑誌の出たことを、この上もない喜びとしております。その大半が女性の縛られている写真ですが、男性の縛られている場面もあつて欲しいです。そして男を縛る女性の真剣味溢れる表情や、男性の縛られてゆく過程もと入れて下さい。きつとマゾヒスト達を歓喜のうずの中に落し入れる事でしょう。私も時々写真を見ながら、色々な空想にひたり自分もこうした場面に、接してみたいと思っております。

二

然しそれも、少年から青年期の夢で、現在はまだ四十を少し過ぎておりますので、中々そういう希望もいれられないと思ひますが、今尚マゾの幻想は消えず、その願望を実行に移してゆくことを一生の念願と致しております。

す。それで過去の自分の性的苦惱より、想いをペンによってお伝え致したいものと思ひます。私がマゾの芽生えと思われるものを、経験したのは六、七才の頃だつたと思ひます。

隣家の女中にM子という美しい娘がいました。笑うと糸切歯の金歯がきらりと光り、勝負気のような顔立をしていました。私はその人をおばさんと呼んでいました。それは恋心とでも申すのでしょうか、なんだか不思議な気持ちに捉られてその人の前に行くと、重苦しい感じが致しました。それはちょうどM子の白い腕や指先を見ていると、蛇に魅入られた蛙のようで、悪戯をしてその人に叱られることを無上の幸福としていました。それで私は殊更悪戯をして、M子の白い指が私の小さい手をしっかりと握って

「悪いことをすると、承知しませんよ。」

と云われると私は真赤に頬をそめて

「おばさんもうせえへんよ」

と身をもたえながら哀願するのですが、それでもM子は笑いながら私の手をはなれませんでした。ある時、私はふと

「おばさん僕の手をくくってくれない？」

とこんな事を無意識のうちに云っていました。するとM子は

「縛ってあげるよ、そのかわり、泣いたらだめよ、ね。」

と惨忍そうに笑つて、腰紐で縛ってくれたこともあります。今から思ひますと彼女が私のマゾの最初の女でした。その後M子は、町役場の助役の夫人となり、かなり日々の生活も、派手に暮して居りましたが、結核の為に早く他界致しました。

それから夢の様に月日は流れ去り、私も郷里の小学校を卒業すると、常に憧れていた都会に出ることになりました。獵奇とエキゾチックに富んだ神戸の街で、私は二人の姉に連れられて或る材木屋に使われる事になりました。その当時の阪神前は、朝から夜更け深くまで金属性の電車の走音、タクシ一の警笛、それは、にぎやかというよりむしろ騒々しい光景でした。私にとって、その様な所は始めはたまらなく恐ろしいのでした。

私の父く材木屋は、S兄弟商会といつて男ばかりの店員が十四五人寝宿していました。本宅は芦屋にあつて私達は別荘と呼んでいました。若い者の食事は十六才になったばかりの私が飯を炊き、おかずは、近くの市場で一人前五、六銭の割でそれだけの好きな物を買つてきて、お膳の上に並べて置くのが私の最

初の役目でした。勿論女中など居る訳もありません。血気にはやった若人ばかり、ひまな時には力くらべをしたり、アミダを引いては口ッポ焼、うどん等を買っては食べました。又年長者は遊廓とかカフェーの誰が好いとか悪いとか云って噂話に花を咲かしています。私はまだ子供だったので相手にされず、蔭ながら聞いていましたが、そんな話には少しの興味もなかったようです。

奉公人の殆どが阿波の出身で、番頭さんと云う人はこの家の親類に当る人で、年の頃は二十七、八才、身長は五尺五寸の色の白い美青年で、特に洋服がよく以合い、いつも黒眼鏡をかけていました。というのは左わきの鼻のつけねに一銭銅貨程のあざがあったからです。そうしてもう一つ特長をいえば、彼の目が猫のように異様な光を帯びている事で、私は時々その目を見ると、何んだか惨忍性の人のように感じて薄気味の悪い思いをいたしました。実に彼は、狂暴な性格を持っていた様です。時折、年下の奉公人をステッキで叩いたり、なんでもないことにすさまじき罵倒をあびせる事があります。そんな時、益々、彼の目は異様な光をおびて来るのです。或る夏の夜の事でした。それは――その夜

はむし暑くて、ぬぐうひまに汗が流れる程でした。私は外に出てみようと思って下駄をはこうとしている時に、この番頭さんが呼びましたので、いそいで私は番頭さんの部屋に行きました。すると彼は否応なしに私を布団の上へ押し倒しました。私は常々の手荒なことをするのを知っているので、云われる通りにしました。ところが突然彼は、私の下着を取り始めました。私は彼の不思議な行為に疑問

を抱き乍ら、軽い抵抗をしましたが狂暴な力には、とうていかないませんでした。その時の記憶は今から思えばキツネにだまされた様な淡いものとなりました。が、只彼がサディズム的な人間である事は間違いないと思います。それから、私にはもう一つ御飯を炊く他に仕事がありました。それは大丸や三越で主人や奥様を買ってこられた品物を、自転車で芦屋の別荘に運ぶのです。その品物を主人が芦



屋の別荘に帰るまでに、とどけないと女中や私が大へんに叱られるのです。それはその買物の中には、マヨネーズや夕食の野菜、魚肉等が入っているので食事の仕度を整えて置かねばならなかったのです。私は女中に混って風呂をわかしたり、お膳立の用意をします。食事がすむと、再び女中に混って汚れたお皿や、茶わんを集めて炊事一切の手伝いを致しました。又それがすむと今度は、主人や奥様、子供達の寢床をとるのが私の役目です。

私はいつも奥様の部屋に呼ばれては、肩をもまれたり足の裏を踏まされたりしましたが、私は純情でお人好しなのか当然のように腹を立てる事ありませんでした。奥様も又按摩をやっているような気持ちだったのでしよう。何んの気がねもなく、何十分でも私に足の裏を踏ますのです。夜がふけて来るとようやく私も解放されて、やっと自分の体になり、私は女中達が手紙を書くのを見たり、恋の物語をきいたりしました。時折は主人が業務多忙で、いつ帰って来るかわからないような時でも、門前のベルの鳴るまで起きていなければなりませんでした。しかしいつとはなしに眠気がおそってきて私は三疊の間で三人の女中と共に雑魚寝します。皆んなうつ

らうつらとしているうちに、一番年少者のお繁という女中のいびきがしはじめます。

このお繁という女中は、私の郷里の隣村で十八才の丸顔で色白、唇は少し厚みを帯びているようでしたがパツチリした目元に肉感的な魅力を湛えていました。私は寝た振りをして寝息をうかがいます。するとこのお繁は寝がえりをうって、私の枕元に白い弾力性のある腕を、なげ出しました。生れて始めて女性の肉体に触れる喜び、私はそっと白いその腕に指を触れてみました。軟らかでゴムマリ様なまん丸い腕。そっと頬にふれてみました。驚く気配もありません。私は恐る／＼胸の鼓動を感じながら舌を出して二つの腕の白い肌をなめてみました。甘酸っぱい味でした。そうしてこの様な腕で縛られたらどれ程幸福だろう。もう死んでも満足だと思いました。女性の白い腕あの魅力に富んだ腕……私は今も尚、あの



時の事を悩みに浮かべる事が出来ます。そのお繁は半年ほどして郷里の私の住んでいた町より一里ほど、奥に入ったKという漁師町に嫁いで一男二女を生み幸福に暮らしています。

(三)

私は別荘の女中をしているお繁と別れて淋しい思いをしました。自分も又郷里に帰らねばならなくなりました。それは二十才の春でやっと飯たきから、神戸の店に出て商品を売りに行く事を許され、私は毎日身を粉にして懸命に働きしました。それがもととなり肋膜炎にかかって郷里に帰る事になったのです。

幸い私の家は母が、酒類の小売店をしていましたので生活には困る様な事ありませんでした。一時はわれながらも、駄目だと思いました。夕方近くなると熱が上り呼吸が困難で、その上食欲もなく自然に気が弱くなって来るのでした。ところが身体が極度に弱ってくるのに反して、不思議に妖しい幻想にかりたてられ、女性の肉体の各部分を頭に描くのでした。そうした事が一層私の病を悪化させる原因となったのでしよう。家の商売を考えると私の病気が影響しないかとあせり、毎日くが苦しくて本当にペンではかきつくせませんでした。こうした私は一体どうなるのだろうと思つて泣くに泣けませんでしたが母は「そう、あわてなくとも、仕末さえすれば食べるだけは食べてゆけるから」と云つて

慰めてくれました。私はただひたすらに母の愛情に涙を流さずにはいられません。朝は早く起きて氏神様にお参り出来るようになりすっかり又前のような体になる事が出来ました。全快後は近くの製材所で働くことにしました。始めのうちは自分自身仿けるだろうかと不安な気持ちでしたが、こんな時にいつも病床の自分を想い出し、結核などで死ぬのか、といきごんだあの強い心を取りもどして、精神力で仿くのだと思ひました。日給は六十錢ぐらいで、木くずを集めては釜の前に運んで行く。こんな平凡な仕事でしたが私は一生懸命に仿きました。

郷里の製材所で仿くになつた私は、神戸の事を様々思い浮べ乍ら、どんな寒い日も暑い日も、弁当箱をさげて約半時間かかる道を通いました。肉体的に苦痛が大きければ大きい程、精神的な喜びは大きいでした。それはあの別荘当時のお繁という女中の腕に、接吻をした事を幻想に浮べ、白い丸いあの弾力性に富んだお繁を想像すると、かえって労仿の苦しみ等忘れ去り、喜びと変わるのでした。仕事から帰ると、私は江戸川乱歩の書物を愛読しました。中でも「猟奇の果て」という小説に陶酔させられました。それから国

枝完二の小説の中にも、マゾヒズム的な場面があるのを記憶しております。誰かの血風呂という小説で、男性の血潮で風呂をわかしてその中に美人の女をはめるというテーマでその湯にひたると、皮膚が美しくなり長命するという事になると書いてありました。失礼な言い方とは思いますが、小説家なんて変態的でマゾ患者が多い様に今でも思っています。それからマゾヒストは比較的、文才に恵まれているんじゃないかとも思います。

又芝居や映画などの高橋お伝や、鬼神のお松などの毒婦物が大好きでした。もうずっと前になりますが、五月信子の芝居をみてなんとも云えない気持が致しました。自分の夫を毒を飲ました上で絞殺する場面が本当に、サド的でマゾ患者を陶酔させるのに十分で、私はもう一度その様な芝居を見たいと願っています。男を殺したり、男を足で踏んだりする時の雰囲気、酔いしれる事は、マゾ患者のこの上もない喜びですから……

当時はまだ独身でしたから、色々なマゾの夢を描いては、労仿をして儲けた金で徳島の遊廓に行きました。今は空襲の為に昔の面影はありませんが、私にとって遊廓は全く別世界のようで夢心地でした。しかし当時は年も

若くその遊女達に自分の夢をうち開ける事も出来ませんでした。中にはサド的な女性もいて私に肩をもませたり、腰をもませたりする女もいましたが、私に縛ってやろうという女はいませんでした、今になって考えると、金さえ出せば私の夢も実現したと思います。同じ遊廓にくる仲間の一人に長田という私より二つ三つ年上の男がいて彼も少し変わった性癖があると、もっぱら遊女達の口になっていました。酒が好きで毎晩酔って帰るので、女房によく頬べったをパチ／＼叩かれていました。きつとこの男もマゾヒストでお酒をのんで女房に折檻されることを、楽しんでいたようにしか思えません。

(四)

二十六歳の時、私は隣村の百姓の娘を嫁にもらいました、結婚するまでには約一ヶ年の交際を致しました、恋愛結婚かという、そうでもないのです。ある仲介の口ききに依って、娘を連れて母親が私の家にやって来ました。勿論その夜は私の家に泊って帰りまして、その後は私達二人の交際が始まり、労働から帰った私は自輪車で、約二十分ぐらいかゝる道を疲れも忘れて幾度となく通いました。

初夏などは小道の両側の田圃からガヤガヤと蛙の声でにぎわい、点々とある黒い農家の模垣の間から灯が淡い光をはなれて、いい知れぬ感慨に誘われた事を思い出します。私がこの道を通るのはもうすっかり暮れて暗くなつてからの事です、お百姓さん達は、早寝早起ですからよくもう表戸が閉まっていることがありました。こんな時、私は、たとえばうのないてくれくさい気持になります。とにかく暗い夜道を引き返すことも出来ないのです、勇気を出して戸を叩いてみるのです。

「ごめんください、今晚は」

と二、三度声をかけると、誰かがおきたとみえて人の気配がします。こんな時、私は息をひそめて戸の開くのを待ちます。

「あゝ、だれかと思つたらあにさんだったのか、百姓の家は町方の人とちごうてねるのが早いぞな。まあおあがりな、あねさん、おきとんかえ……たけはんがきとる。」

あねはんというのは、私の妻の兄嫁で三十四五、丸顔の色の白い小柄な女でした。

「とも枝はんは、二階にいるから二階に上りな、百姓はのみが多いけん……」

私はいつも買ってくる生菓子の包を兄嫁に渡すと、いく分か心に落ちつきが出来てくる

のでした。

「こんなことせんともいいのに……」

「いや／＼、本当にそんな気にせんとも、少しばかりや。」

「とも枝はん、おきとるんか、あにさん来とるよ。」

よほどねむりにおちいつているとみえて、二階から下りてくる気配もしないので

「上らしてもらふよ」

「うん、上ってゆきなはれ、あの娘、本当にようねるけん。」

私は兄嫁の言葉をきくと階段を上っていきましたものの、暗がりで見当もつかずしばらくそこに足をとめると、百姓家特有の臭がむつと鼻をついてきます。

「電気がないんだね」

「マツチをすって、そこにローソクが置いてあるから」

女は汚れた寝巻を着て、垢じみたせんべい布団に寝そべっていました。枕辺の窓から心よい風が吹いていて、髪の手と、女の体臭が漂ってきて私を陶醉に誘ひこみ始めます。

私がこの女を好きになったのは、勝気な顔立と、しっかりした言葉使用でした。マゾヒズムの私にはサド的な、この女の音声と容姿

が私を引きつけたのです。

女が私の家に来てまもなく、男の子が生まれそれと同時に私は、西部三十七部隊に応召になりました。当時は日支事変で三月余りの教育を受けると、召集解除になって郷里に帰る事が出来ました。除隊後、再び私は労働者となり毎日〱懸命に働きつづけ、或る時は妻も私の為にその仕事を手伝ってくれたり、内職をしながら十何年という月日が過ぎてしまいました。

(五)

私も年をとるに従ってあの様な労働が、体にこたえるようになってきましたので、煙草の配給員になったり、町役場の小使いになったりして、現在は××署の小使を致しております。どうやら今までと違って生活の安定も定ったようで、以前の様に悲惨な生活から幾分か解放されました。月々きまった給料を得られるので精神的にもよほど楽です。子供が四人、妻はもう四十に手のとどきそうな年齢になって、昔のように皮膚に光沢はなくなっ

て来ていますが、かなりの肉付のある身体は夫婦生活の上でもその様におとろえた様子も見受られず、私として、幼き頃のマゾの幻影

は一層に色濃く燃え続け、これからその想っていた事を実現に移して見たいと思っております。

先ず妻に対してサディズム的な性格を植えつけ、知らず〱のうちにサド的な女に仕上げる事と、男性に対して束縛する事に興味と興奮を覚えさせることです。妻は先天的に勝気でありますから、この様な行為に移っていくることは必然の事であると信じています。

それがはからずも、奇譚クラブの雑誌に接して一層私の心に陶醉と慰安を与えてくれて私はこの雑誌を親しい友達だと感謝しています。それで、妻に殊更見よとは云いせんが自然手にとる様に枕辺に置いて休みます。子供がみるのは困りますが、妻にもしもサド的な性格があったら喜こんで、みてくれる事と思っています。私はこうして長年サドの女性を求めております。

現在、つとめている役所内に、サド的な女性がいいます。その女性は二十八才ぐらいで、めがねをかけた猫背の女性です。和通美という一寸変った名前で、声はあまり良い方ではありませんが、私達に好かれる声音をしています。

或る日、代帳倉庫の中で

「昭吾さん、あんたをバラ〱にして金庫の中に入れてあげようか。」

と突然こんなことをいって、私を喜ばせてくれました。その時私はふと、荒川放水路のバラバラ事件を想い浮べました。富美子という女教員に絞殺の上バラ〱にされた若い警官が、何だかとても幸福の様に思われ、手足、首と切断されて行く時の状態を、險に描くといひ知れぬ興奮を覚えさせます。白い女の手によって……私はこのちよとした言葉を、倉庫の中で和通美からもられた時、聞きずてならぬサド的な共通した女性だと思わずにはいられません。又ある時などは、入浴後の化粧も艶めかしく皮膚の細かな両の腕をみせながら、私に親しげによりそって来ることもありました。

「わたし、下着をとり替えるの、この部屋に入って来ないでね。」

と云って狭い電話交換室に入って戸を閉めるのです。こんな時必らず私は、軽い言葉をすべらすと、相手も興味を覚えて胸をおどらせます。

「はいって行くよ」

「フフ……」

と笑う声と共にエロチックな目で私を見る



のでした。それから二、三日後も資材を入れ
てある倉庫の中で、梯子から降り様としたは
ずみに、和通美は赤い鼻緒の草履を片方落す
と、ニヤリと笑いながら、
「草履ひろってこない、いや？」

女のこんな行為や言葉にも私は、胸の動悸
を感じ、それがいつの間にか喜びと変わって行
きます。二十八才だと云うのに、まだ結婚も
せず署につとめている女に、心がひかれてく
るのでした。私が求めている女——それが現

在同勤していると思えば、胸が高鳴りしてく
るのです。そうして白い肉体、声音が妻の時
と同じように私を狂的な幻想にかりたててゆ
くのでした。

(六)

私が今までに、映画を見た中で一
番感銘の深いものは、芥川龍之介の
「羅生門」と「美女と盗賊」です。
これはあくまでも私一人の感想であ
りますが、その場面に出て来る、京
マチ子の野性的肉体美にあふれてい
る点で大へんによいと思いました。
その他に谷崎潤一郎の「痴人の愛」
もマゾを取り扱った映画であり、こ
うした映画に依って私達が慰められ
ることも非常に大きいと思います。

結局、私の夢が今迄に実現された
のは、現在の妻の外に一人もなかつ
たという事です。私達二人の間には
前にも申しましたが四人の子供があ
りますが、これ以上に生んでは、悲
劇的になるばかりで経済上も苦しく
なるばかりです。それで私のマゾ的

な行為を、妻もすっかり見抜いてしまつて、私の要求に対していなむことなく実行に移してくれます。

「足を縛ってくれないか。」

妻はなにもいわずに、腰紐を取ると、ギョツと股の下部を縛ります。その縛られている間がどう云っていいのか、なんともいえない気持が致します。

「もう少しきつく——」

妻は再びしめ直します。その時の妻の表情は、いつの間にか私を縛ることに興味を覚えたのか眸は恍惚としています。妻の体重が重苦しくなつて来ますが、むしろそれを私は喜びとしています。足を縛ると、私の手を腹の上に組合せて足を縛つた片方の端で縛ります。妻がこうした行為を当然の様に行うようになったのも、先天的なサジズムが芽生え出したのだと思えません。こうしてお互に二人共楽しむ術を多少得ることが出来る様になりました。がまだ妻に叩かれたり鞭で打たれたりしたことはありませんが、縛られて悦楽を得ることを体得しました。冬のことですから長時間裸になっているのは不可能なことです。が、そのうちどの程度に進むかを、期待しいろいろと妄想しています、妻の枕元に紐の置

口絵解説

善知鳥安方（うとうやすかた）

伊藤晴雨

青森市の南端安方町に善知鳥神社がある源義家の家来の善知鳥安方を祀つたものだという。安方は義家に従つて戦場に行つている留守に近所に老熊（おいくま）という悪い医師があつて、安方の妻錦木の美しいのに惚れて口説いたが、貞節な錦木は老熊に従わないので盆の精霊紀りの夜、錦木を梯子に縛り其子供千代童と共に蚊責めとい

性被害

いてあるときは、必ず妻が………いる時で、私もそれを見ると急に嬉しくなつてきます。永い間の夢が、四十に近い妻に依つて実行に移されたことも、生きていた喜びの一つだと思つております。愛する女性の白い肉体によつて虐げられること程、私達マゾヒストのよろこびはございません。少し欲をいえば妻がもう少し若く、そして皮膚にもうちよつと光沢があれば、どれだけ私は人生を楽しく生きがいを感じる事でしょう。

××署にいる和通美という女が真実のサド的な女性だったら、必らず私の性格に合った

ぶし責めにして、錦木を責め殺してしまつた。これより先、死んで地獄に落ちた安方は鳥になつて千代童を助けて後に外ヶ浜で老熊を殺して母の仇をとつたという伝説を曲亭馬琴がこれを稗史化して「善知鳥安方忠義伝」という読本を著述している。国鉄大館駅の附近に今、錦木塚というものが残つて居て、此附近一帯に荒拷（あらたえ）という、麻を原料にした古代の織物を生産して居たが、現在ではどうなつて居るだろうか、

七月に因んで盆提灯を出して見た。

行為に出て来ることを、ねがい信じてやまないので。若し、今後そういう事が起りましたら改めて拙い筆を続けさせていただこうと思います。

長々とつまらない事を書き綴りまして、自分ながら恥しい次第です。然し、今迄書きました事柄は、皆真実の話でありまして少しも作つた話ではありません。広い世の中にはこんな変つた男もおるのだという事を知つていただければ有難いと思います。では失礼します。

ソドミヤ小説

美

少

年

の

秘

密

山口 幸一

雪夫はその名の様に色の白い、内気な、女の子の様な身体つきの美少年であった。

十四歳の少年雪夫には、誰にも云えない一つの秘密があった。

それは他の同じ年位の少年達が何とも思っていないある事に対して、非常に羞恥心を感じることであった。

去年の春、丁度雪夫が中学校に入学した頃から、はっきり自分は他の少年達と別の世界に住んでいると云う事を意識し初め、何度か自分も皆と一緒にの世界に入り込みたいと思っ

て試みたこともあったが、何時もはげしい羞しきから途中で引き返した事を知っている。

それは裸になって、褌を着ける時に感ずる

たまらない興奮と、快感に対する羞恥心である。

雪夫が小学校の上級生のとき、体操の時間に相撲を教えられることになって、厚いズツクの褌をじかに締込んでいる友人達を見て、羨望の念を禁じ得なかったことを覚えていたが、さて自分も人前で締めて見る勇気がどうしても出ず、とうとう身体の具合が悪いと云う理由で逃げ廻ってしまった。

その為、他の科目は全部甲なのに体操だけは、いつも乙であった。そのくせ人知れず日曜日に、こっそり運動具置場にしのび込んで下半身だけ裸体になり、硬い褌を肌に戻してはその感触をぞくぞくする程の興奮感を以っ

て味ったのである。

柔い猿股や、ゆるいパンツは全然魅力がなかった。したがって平常パンツや猿股をまく事は勿論何の羞恥心も起きなかった。どんな褌でもそれを締めるのが羞しかった。中でも肌に喰い込む様な六尺褌や、厚くて硬い相撲の締込は、只それをさせられると云う事を想像するだけでもたまらなく恥しかった。

若し受動的鶏姦が中学生の間でも簡単に行われている様な土地に育って居たとしたら、雪夫のこの特異な着衣に対する魅力も案外早く薄れてしまったかも知れないが、雪夫の中学にはその様な風習は殆んど無かったし、又、仮りにあったとしても、町一番の素

封家の一人息子である雪夫に対しては幾ら美少年であるからといっても、どの上級生も一寸遠慮して手を出さなかったのかも知れない。

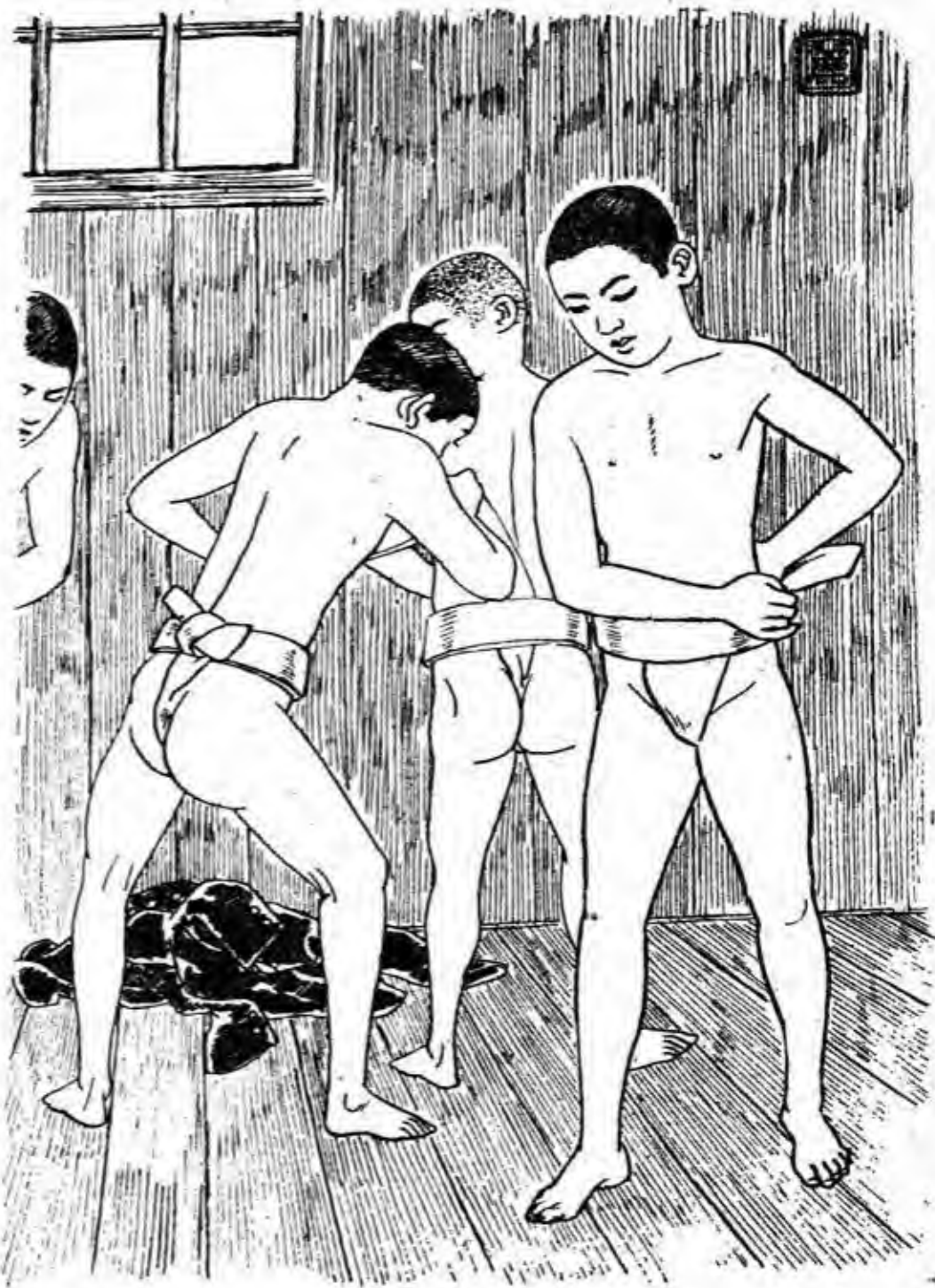
後年雪夫が中学三年の時に、ふとした機会からそういった経験をした時に、初めて過去の興奮感と羞恥心がこれと一致するものである事を知ったのであった。

雪夫が禪に対する羞恥感とは丁度娘が乳房と恥部に於ける気持と似ているものであろう。

しかし、中学校に入って、新しい金ボタンの洋服を着て白い鞆を肩にかけ、毎日学校に通う少年には外部から見て何も変わった所は見られなかった。

雪夫は以前から海水浴場や、相撲大会の時に、白や黒の禪をきりりと締めた自分と同年度の少年に対して羨望の感じを持っていた。

又運動会の徒歩競走の時も、小学校の内は



まだ、直かに白いパンツをはくだけであつたが、中学に入ってから、一年生の中でも数人は黒いメリンスの六尺禪をパンツの下にきりりと締めて、その結び目がランニングシャツの後の方にもり上って見え、その下のパンツには、薄い白のモスリンの生地を透してお尻の割自に縦に一本喰いこんだ黒い禪が、外からもありありと見えていた。

その様な服装をした少年がもし大人の様な屈強な身体つきであつたり、又顔がみにくかつたりした場合、少しも雪夫の興味をそそらなかつたけれど、もし、その少年が女の子の様に優しい顔をして、すんなりとした身体つきの伏目勝ちの美少年である様な場合は、雪夫は何時迄も其の子を凝視して、時にはその子が服を着替えて家へ帰る時になつても、後をつけて家をつきとめる様なこともあつた。

しかもその様な服装をする時には、出来るだけ強制的にさせられる事が好ましかつた。たとえ、その子は出たくないのだけれども無理に角力に出されて締込をさせられるとか、あるいはその子は猿股の上からパンツをはこうとしたのに、先生が無理に猿股を取らせて下に禪を締めさせたとかいうのでなければつまらなかつた。

本人が、それを嫌がれば嫌がる程、又恥かしがって逃げれば逃げる程、その情景は好ましいものであった。

たとえ、その子が如何に美少年でも、活発な子で自分でくると着物をぬいで、何の恥し気もなしに白い六尺褌などしめている光景をよく水泳場などでみかけるが、その様な元気の良い子に対してはあまり興味が湧かなかった。

雪夫は自分でもそんな姿をして皆と一緒に角力に出されたり、水泳を教えられたりしたかったが、褌を締めると云う事を思うと顔から火の出る位はうかしくて、とても出来なかった。

誰か、先生とか上級生とかが強制的に自分を裸体にして無理にさせられないと、自分から進んで云い出す事は出来なかった。

しかし、雪夫はいつも自分の様に美しい少年をさがし求めて少年相撲会や、海水浴場や運動会を、しょっちゅう中見に行つてひそかに自分と同じ様な偶像を求め続けた。

もしその時、理想の姿をした理想の少年が見付かると、自分がその子と立場を変えた事を想像し、自分もあゝ云う風になりたいと思つて、夜寝床の中で一人で想像を廻らすので

あったが、雪夫がその子と立場をかえてその子になり切つた時を想像すると、たまらない快感が身体中を走るのであった。

中学一年生の夏に新入生全部の水泳の講習があった。手ぬぐいと褌を一本宛持つて来ることに先生から云われたが、雪夫はこの事をどうしても母親に云い出せなかった。

その当日、雪夫は「お母さん、今日水泳の講習がありますから手ぬぐいを下さい」と云った。お母さんは「水泳するなら褌がいるでしょう、晒を切つて上げようか」と云つたけれども、その時ハイを一言云えば、未経験の世界に思い切つて一步を踏み出す事になったのに、ハイと云う言葉がどうしても口に出なかった。雪夫は耳たぶ迄紅くほてらせて、あわて、「いや水に入らないからいらないんです、いゝです」と云いすてる様にして家を飛び出したのであった。

そのくせ表に出ると、なぜあの時「ハイ」と云つて持つて来なかったのか、又お母さんもうどうして無理矢理に持たせて呉れなかったのかと、はげしく後悔した。

自分が一番求めていたあの白い真新しい晒木綿の六尺褌をきりっとしめる事が出来た絶好の機会だったのに。

こうして第一の機会は失われた。

九月に入つて校内角力大会があると云う事が掲示になった。

雪夫は、ひそかな夢を描いて、級友達と雑談して居る時に「僕も角力に出るよ」と云つた。雪夫としては本当は出たいのだが、あの締込をする時の興奮を考えると顔から火が出る程はうかしく、とても裸になつて多勢の人を見て居る中で土俵の上に上ると云う事は出来なかった、勿論出るつもりはない。たゞ自分がこうありたい、こうしたいと云う希望を級友達にも認めさせて、それによつて自分は相撲に出る事になつて居ると云う既成事実の雰囲気の中で、ひそかに自慰の感にひたりたのであった。

しかし級友達はこの十四歳の同級生の小さな頭の中のトリックに自分達が利用されて居るなどと云う事は勿論分らなかったし、又、級友達は皆無邪気で、裸体になる事も締込をしめる事も、別に取り立てゝはずかしさを感じて居る事ではなかった。級長が角力の出場申込を取る時に雪夫は丁度居なかったもので、誰か雪夫の名前を申込んで置いた。

大会の当日が来た。雪夫は自分で申込まなかったので見物するつもりで校庭に出て行つ

た。

校庭の一隅の土俵はきれいにほうきで掃き
 浄められて、昼弁当を済ませた生徒達は、そ
 の周囲に三々五々集ってきた。そう云う情景
 すら雪夫にとっては胸をおどらせるものであ
 った。

一時の鐘が鳴ると、全校生徒が校庭に整列
 した。校長先生の訓示が終ると、五年生の相
 撲部の高松という委員が紙片を持って一年生
 の整列している前にきて、出場者の名前を呼
 び上げた。角力は一年生から始められる。次
 々と名前を呼ばれた少年は「ハイ」と元氣よ
 く返事した。

何人か呼ばれた次に

「江川雪夫」

と呼ばれた時は、雪夫の心臓はドキツと波
 を打った。尚も次々と名前を呼んで行く高松
 さんに雪夫は待ち切れず、すがりついた。

「高松さん、僕、出ないんです。誰かいたず
 らに申込んだのです、名前を除けて呉れませ
 んか」

高松さんは面倒くさそうに、

「だって、ちゃんと申込んであるよ。組合せ
 はもう出来ているから、一人でも欠けると困
 るんだ、まあ出る。身体は別に悪くないんだ

ろう」

「別に身体は悪くないんですけれど」
 「そんなら出る」

と無難作にきめつけて、大
 きな声で、今呼ばれた人は直
 ちに体操場で支度しろ、とど
 なりながら急がしように委員
 控室の方に走り去ってしまった。

雪夫は一人こっそりと後の
 方からぬけ出して、裏山の松
 林の中へ逃げ込んだ。

後で高松さんに叱られるか
 も知れないと思ったが、到底
 角力は、はずかしくて出来な
 いので、とうとう一人で山の
 松の根っこで時間をつぶして
 いた。

しかし大会が終った時に、
 又出席をとるから帰らないわ
 けには行かない。恐る／＼又
 校庭にもどってきた。校舎の
 裏の内庭から時々ワーツと云
 う賑やかな声がする。
 初まっているらしい。



雨天体操場の入口迄行って中をのぞき込ん
 だ。もう一年生は全部出てしまつて金ボタン

の服が板の間の片隅にかためて脱いである。脇の方では二年生と三年生が、二、三十人がたまっているが誰も雪夫の方に注意しないで口々にしゃべりながら服をぬいだり、ズボンをとったりしている。ある生徒はパンツもぬいで真裸になり、じかに白いズツクの廻しを締め込んでいる。

その固そうな厚い廻しが、若い少年のゴム繻の様な弾力のある肉体に喰い込む様に締められ、ついで二、三回廻して最後に全部の禪下を通して、ぐっと締め上げ一端をはさんで締め終る。

締め終つた二、三人の者は板の間で四股を踏んでいる。その伸び／＼とした肢体、気持良さそうに締つた固い廻しの姿を見て雪夫は胸がわく／＼して動悸が高鳴って行つた。

その時、一人の同級生が運動場に入ってきた。やはりズツクの廻しをお尻に喰い入る様に締め込まれて、後の三ツの所が投げられたとみえて赤い粘土で汚れていた。

「君逃げてひどいじゃないか。おかげで僕ひどい目に会っちゃった」と云いながら廻しの後を叩いて土を払った。この少年は女の子みたいな美少年で、身体も柔弱なので特に雪夫と組合せになつたのだが、雪夫がさがしても

居ないので、別の生徒と組合されたのである。

雪夫はこの少年の勇ましい締込姿をまぶしそうにながめ上げて嘆息した。此の少年は勇敢で偉いと思った。それにくらべて自分は何て意気地無しだろうと、つく／＼情無くなつた。

「おい、廻しすんだらかせよ」

と三年生が向うから声を掛けたので、その子はすぐ禪を外してパンツをはくと、上級生の所へ持つて行つた。

「君どうして相撲に出なかつたの、僕もいやだと云つたんだが片田さんが無理に出ると云つて出されてしまった」とその少年に云われると、雪夫は返答に窮した。

「うん、僕は何んだか身体の具合が悪くて。」

今日は一寸気分も悪かったが、今度日曜に学校に来て廻しの締め方など僕に教えて呉れよこの次の大会には僕も出るよ」雪夫はもう相手の少年を芝居の役割の中に引き入れようとした。

彼はあまり興味なさそうに、

「あゝやつても良いね」と云つた。

雪夫は家へ帰ってから次の日曜日が待ち遠しかった。しかし廻しがないから裸体にな

って本式に角力をする事が出来ない。何とか廻しを借られないかしらと思つた。

黒のメリンスの兵児帯を持つて行つて、それをしようと思つた。

前の晩、雪夫は黒のメリンスの兵児帯を母が気づかぬ様に簞司の中からこっそり取出して、風呂敷に包んで机の抽出の中にかくしてから床についた。母が寝てしまうと、そっと音を立てないように机の抽出をあけて帯を取り出した。

サラ／＼したメリンスの帯は柔かく肌ざわりが良かった。雪夫は床の中で裸になると帯を禪にして締めて、先ず股からかけて尻に廻して腰へまきつけた。前の端は又下へ下げて尻に廻し／＼と締上げて腰のまわりにはさんだらきちんと気持よく締つた。

何とも云えぬ気持の良い圧迫感が、身体中をぞく／＼させて、何度も床の中で寝返つたり、尻を持上げたり両足を上げたりして、様々の姿勢を試みた。

雪夫は、又そつと寝巻を着て禪をしたまゝ眠つた。

(未完)



夫から妻から

久留木 栄

——縛るといふことより、それを通じてみた夫婦生活の考察——

前略 離れて暮しているという事は案外人間の真理を光らせてくれるものだね、お前の手紙を読みながら私の手がどのように感激にふるえたことか。

毎日、毎日、紳士の仮面をかぶり、夜は淫虐の限りをつくしたいとひそかに願っていた私を過らせず正しく導いて呉れたのは、お前の素晴らしい才能によることも大きい、海のように広くて、深い愛情の賜なのですね。

私はそれを知り、それを利用し、それに甘えすぎたかもしれません。それが逆に私をサジストにそだてたのでしよう。

色んな本で読んでみますとサジズム

とマソヒズムとは異体同心で、その発端は同じだとかいてあります。いわゆる昭和の動乱期に生れた、私達が異常性愛に目をひかれたのはいいとして、それを実現してみようなどとはついぞ考えてみたこともなかった。それほど生活に追いまくられた私でしたのに、そのどちらについても心ばかり満足を与えてくれたお前を、私はこの手紙でどのように感謝してもしたりないと思っています。

当地の生活もはや一ヶ月、しのぎにくだいなかにも幾分楽しみを発見するところができるようになりました。御多分にもれず、派手な生活、ダンスや麻雀や宴会に引きまわされどうして、いさ

さか酒づかれというところでしょうか泥酔してお前に介抱された時のことをしみじみと思い出します。悪酔いの酒のにおいはたまらなく厭なものを、お前はそれにもまけずよくキッスをして呉れましたね。その事を思い出すと体がしびれるようです。正体のなくなつた私をねかしつけ、腹立ちまぎれにくるぐるまきに縛っちゃった、とお前はあっさりお言いでしたが、朝二日酔からさめた私が、身動きもできぬのにどんなに驚いたことでしょう。それから小用をもらすまいと苦心惨胆して縄抜けした私を、お前は朝餉の用意をしているために全然気付かず、悪態をつきながら部屋にとってかえしたところを



いきなりだきしめ、キッスした時失望と落胆と驚きとで、咄嗟に立ち竦んだお前の姿をありありと思い出すことができます。

「長い夫婦生活の中でたまには狂った日もあっていい。ということの旅の孤独さが教えてくれます。」

こうしてもう一ヶ月もあわないでいると、今度あった時、殺してしまいはせぬかというような気持ちにもなります。お前のお腹に子供が入っているとも知らず随分いじめ抜いたので、果してどんな子供が生れるかも不安でたまりません。忘れ得ぬ人とは遠き人というなりといいますが、なるほどお互がお互の生活に反省をもつという事は、これまで夢遊病者のように押し進めてきた私達の生活に理想と秩序と理論をあたえる最もよい機会ですね。そういう意味でことさらではないが、お互の愛情の本体を分析してみるのも良いでしょうね。

この前の手紙でお前は私への愛情のしるしとして、私が中学生の昔からお前を恋しただっていた挿話をしてくれま

した。なるほど私はお前に死ぬほど恋こがれていた。だがひねくれていたのはやはりお前より私の方ではないでしょうか。学問や人間の叡智というものがいかに優れていても、私は人間の純粹さを少しも倍加はしないと考えている、私が結婚して二年間も愛情について何も喋らなかつたのは、やはりお前の家庭の中に安定した地位を作りたいという野心にすぎなかつた。私は今でもはっきりとそう思う。愛や恋がどんなに激しくともそんなことには動かされない、現実を直視してそれに対処し、平然とくらして行くのだ。ヤミを行ない戦争と動乱の時代に生れた私には、生活のために一切を無視して行く習癖がついてしまったように思える。

そういう社会人としての私が私にはたまらなく厭なのだ。お前との結婚も愛情という点は抜きにして、そういう社会への一種のマゾヒズム的な反逆だったのかもしれないね。反面、貧しいどこの馬の骨ともわからぬ私の出生の中には、人間に階級をつけた社会への復讐という意味が加わっていたと思う

それがサチズムスとなって現われたのだらう。

お前は私とその当時好んでやった責め方というのを覚えてるかね。とに角私はお前を動けぬように縛るのが目的だった。縛る意外に、誰がこんなにくたらしい階級の女を求めてやるものか！ そんな意地悪い気もあった。長さ二メートル半ぐらいの青竹にいつも両手をのばし手首から足先まで一寸一寸麻縄できっちり縛った日のことを覚えてる。

動けるなら、動いてごらん。

お嬢さん。

そういつて私は一晩中お前を抱いて寝ながら乳房一つさわろうとしなかつた。

でも明け方、私は遂に私の心に負けた。私が総てを忘れ、お前を可愛いがった時、お前は、はじめて笑ってくれた。それまでニコリともしてくれなかつたお前だが――

あれこれ反省してみると私達の周囲には、私達のアブノーマルな一面を助長するのに便利なものが沢山あった。



それにお前がはじめて炊事をしてあわてる姿や、これまでバアヤまかせだった洗濯をやらされて、こんな女中にさせれば良いと怒ったことをいまも忘れない。夏の暑い日、息せききって私がちよっと家庭に顔を出してもハイお茶と、冷水の一杯も出して呉れるお前ではなかった。それが何とかわったものだろうね。今ではチャンとサービスも行きとどくの、私の方では遂にお前を社交界に送り出そうとするのに骨を折っているとは。

お前への愛情に自信ができたわけだろうか、いやいや、

そんな事ではない持って生れた人間の才能は最高度に発揮せねば罪悪だという、私の持論が再び頭をもちあげたからだろう。

身二つになれば又、ここ二、三年間楽しい夢も見られなくなる。二人で行った映画館の興奮ももうおしまいだと思う。お前が縮図をみて、

ほら貴方、男の方って皆ふうふういってみているのね——
といった時、

私はお前の中に芽生えたマゾヒスト的な潜在意識の表現にあって驚ろかされたものでした。お前は、その夜、型どおり縛られながら、

でも貴方だけは、

平気でしたのね。

といってやけに、私を興奮させたものでした。真のサチストというのは善良な内気な人間が多く、派手好みで、万事に活動的な私の中にも善良な内攻的な性格が強くふくまれていること、そのことが結局はサチズムスへの第一であったことをお前は突然私に教えて呉れたのでした。

あんなの、あんまり暴れすぎてつまらないわ。縛られて、ぎゅっと胸迫る幸福なんて、あの映画から、にあってこないんですもの、私達の生活はこうみても案外しあわせなんです。そりゃそうとも、僕がいくら滅茶々な人間だからといっても、お前を縛るほどに愛しているのだから、お前の愛情を寒々と枯らしたり無謀に手折ったりなんかしないよ。こうして縛るのも、結局は一つの雰囲気を作りだすためでは

ないかね。

一つの雰囲気って貴方、そりゃ貴方は自由ですけど——

お前だって自由じゃないか

文句をいうと、さるぐつわだぞ。

縛るといつも禅問答のような日常生活にたいする意見をのべあう癖がついたのも、あの頃でした。幾分形どおりの縛り方になれてきていたので、縛って痛めつけるということより、縄を通じて深められた愛情が豊かにみものってくるのを待っていた時代でした。従ってその頃は赤いしごきで、軽く手前にあわせて縛り、それをかるく頭のうしろに廻して首と胸でとめ、まるで枕のようにして、下半身を自由にしたら、私は幸福に酔いしれたものでした。

そうしてみると私達のサチズムスやマゾヒズムは結論は他人のようにアブノーマルにまで発展しなかったのではないでしようか。そんな疑問も湧いてきます。

性愛の前技としてでなく、遊戯として楽しんでみないか——と何度か提案



してみたけどついぞ、そういう事にはならず、お前はいつも、そんなサチズムスだったらつまらないわ、と一挙にけなしておしまいでした。或いはこれが私をひどい責苦から救ったのかもしれない。

お前を縛る喜びと性的満足を得るということは全然ちがっているということとを自覚していながら極度の痛苦をお前にしいなかったのは結局、二人の忍耐が正常な行為のうちに満足を覚えさせたからでしょうね。

お前が縛られて興奮する時と、そうでない時とは随分、体の変化が違うということを見逃すわけにはいきませんでした。そして縛られぬ時には完全にもえつくしてしまうお前をもった事を私はどんなに感謝した事でしよう。

縛られる興奮は強烈すぎてどうしてもついていけないと口癖のようにこぼしていたお前を、縛られることの中に愛情の深さと、無抵抗主義に似た平和を見付けさせただけでも私は幸福でした。

ゆれからまだ言いたいことも沢山あ

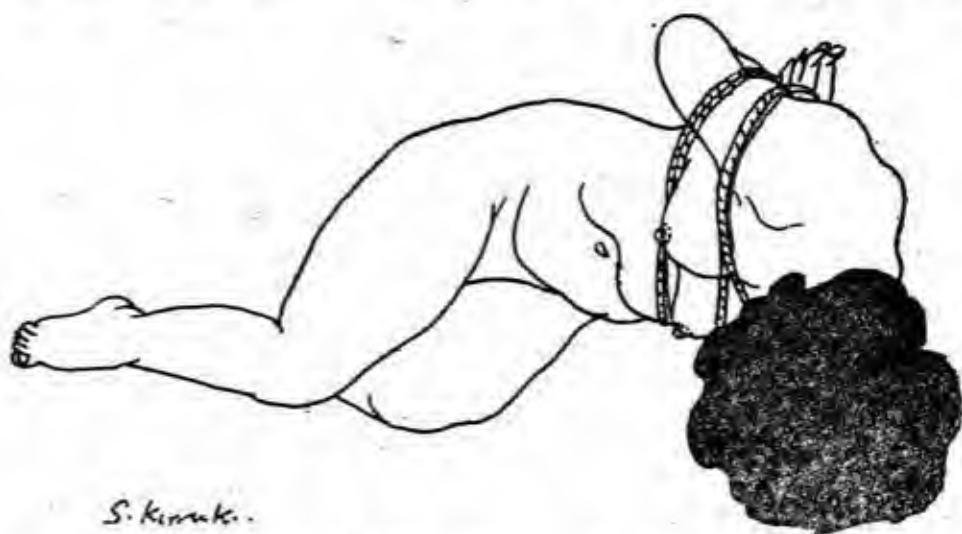
りますが今回はこれではやめましょう。つくだにやツケアミは大変おいしかった。こんぶを下宿の人にくばったら作り方を是非教えろというので、あることないことホラを吹きました。それでは御身御大事に 草々

○

いつもながら優しい貴方の私への愛情にみちた言葉と、私の幸福しか念頭にない貴方の生活態度をみていると今更ながら頭の下る思

いがします。思いあがっていた私を、叱らず、痛めず、そっと大事にいたわりながら育んでくれた貴方は、やはり私のすべてでした。

貴方が私を縛って、それで気がすむのならというような功利的な考えであった私が、縛るといふことの中に、生活にうるおいをあたえる、不思議なニ



ュアンスの含まれていることを自覚できたのは皆、貴方のお蔭でしたわね。いつだったか貴方は「私はお前を愛している。だから、縛るのだ」

とおっしゃったことがありました。貴方のお手紙をよんでいると、そう喝破して、私の額の中央にやさしくくちびるを押付けて下さった貴方の水晶のようなすきとおった瞳を思い出さずにはられません。

貴方は自分の事をいつもつまらない人のように遠慮してつつしみ深く話していらっしやいますけど、私の理想の貴方、そんなにひねくれていらっしやるのでしたら私は死んでしまいます。それなのに私を力一杯だいてくれる貴方の腕の中にとらわれると、私は反抗で胸ふさがれる思いがするのです。



貴方の優しいお気持ちにたいする私の愚かな反抗を貴方はおわかりでしょうかしら。

貴方はそういう私をみると怒りっぽい女といって、縛る手もやめてしまわれることが、屢々ですね。そういう貴方をみていると無性に怒りがこみあげて体がふるえてくるのですけど、私をじっと見詰めている貴方の思いつめたひとみにあうと思わず、声を出して甘えてしまう私です。

縛ることに和をみつけることに専念していらした貴方が、不調の調和があるということをお悟りになったのはひとつは私のそうだった、やはり時たま常軌を逸した行為にあったようですね。

貴方は時には、美代子、今日俺はお前をしやりむり泣かすのだといって、みるのもこわいくらいの太い麻縄を買ってこられて、ドスンと私の胸になげつけられる事もありましたね。そんな時でも貴方は私の体を傷つけないようにと手首に縄をかける時は骨にくいこまぬように、また肌をいためぬように

腕に靴下をはかして縛ったりしたものでしたね、貴方はそういう人でした。

この前の手紙の、縄によって愛情を深める問題や、性愛と一緒に無限の人生を有限に味わいたいという願望をあらわすといった、貴方の思想、どれほどの感激でよんだことでしょうか、貴方は別に口も味わいたいとおっしゃるけど、女には一つのように思われるのは、やはり男女の感覚の相違でしょうかしら、こういう旦那様に縛られるのだったら、毎日縛られどおしても女は幸福でしょう。

可愛い、血をわけた子供が生れるともう貴方は勢一杯、私を縛ってはいくれないでしょう。部分的な痛みは調和をこわすといって、きっちり後手に縛ってもらった瞬間の幸福を不安やスリルのまじった生きた人間の喜びを、私にどんなに身もだえして再起してみようと思っても、六ヶ月たって貴方のもとに出かけた時でなければ味えないのですね。いや、いやもうその時には皮膚の感覚も、胸のときめきも、形も、そして子供という以上に尊い存在によっ

て随分とかわっていることではよね。貴方、

私はそれが不安なようでもあり、苦しいようでも、嬉しいようでもあります。身一つ時代の被縛は、自分だけの幸福が静かに内にもえるもの、

身二つになった場合は――

貴方、私が貴方に泣いて甘えてももう貴方はこれまでのように私を愛してはくれないでしょうね。

貴方、もう身うちのなかで、大きくなった子供が、しきりと母親を足蹴にしています。二人の愛の結晶ができるという幸福と、ひたすら貴方しか求めなかった私に、第二の人生が開けるということの不安――

一体私はどうしたらいいのでしょうか、貴方、

貴方はこういう夜はことのほか強く私を縛って下さいました。

私の心の中に貴方の映像が、貴方が、私を縛ることに専念して、ひとみを輝かし、顔をほてらし、息を整えている姿が、次第に大きくなって行きます。



母親の幸福、
貴方、私は今この幸福をつかもうと
しています。

遠い、遠いところから、

しっかり私を縛って置いて下さい。

私はどんな縄目でも甘んじて受けま
すから。かしこ

美代

○
美代子お前の手紙が私をどんなに興
奮させたことか。

しかし美代子。

お前が母親になる喜びは、私が父親
になる喜びでもあるのだよ。

私が生を享受しようと思つて、たっ
た一本の縄を、いやそれは多分にサジ
ステイックな私の性格のせいで、縄を
駆使したのは、結局はそういった人生
の極致を、より豊富にするためではな
かったのかね。

紅いシゴキの味かしらない女より
絹紐を知った女、絹紐より、麻紐、綿
ロープ、ビニール、棕櫚縄、ラミー、
ビニール、皮紐、針金、と数多く知っ
た女の方がたとえその責苦が大きかっ

たにしろ、豊かな経験をもつとって
よからう。

そのように数多くの経験は人生を豊
富にするために味わされるのだが、な
かなかその経験をお前のように本当に
そしやくし、身につけることはできな
いものだよ。

お前の不安は、

そういう身についた幸福の仮像にし
かすぎないのだよ。私がお前の傍にい
たら、もうエビ責めはむつかしかろ
うから昔のように棒しぼりでもしてや
るのだが、足の先から頭のとっぺんま
で昔の軍隊の不動の姿勢そっくりに、
紐で固定してやったのだが。

そういうお前の盛りあがった腹に耳
をつけて、二世の元気よい鼓動を聞く
ことができたなら、責めだけでなく、父
親になる幸福に気もくるわんばかりの
感動をうけるだろう。

それから生まれる直前になってお前
が苦しみのたうつ時を選んで大の字に
縛りつけるのだな、それからのことは
言う必要もあるまい。

だが、そのような父親の幸福も実は

遠い存在となつてしまったね。

この前お前の手紙をもらつてから、
旧友の田所君に誘われて宮崎市の青島
に遊びに行ったが、ビロー樹しげる異
国の島影に、心地よい愁いの瞬間をも
つた時、

突然、私はお前をここにつれてきて
真紅のボレロをまわらせて縛ったらと
考え、思わず美代子と呼ぶところであ
つた。

聞くとところによると青島は飢肥のお
狩場みたいなどころであつた由。それ
はとかくとして、映画「きけわだつみ
の声」のロケも此処であつたのだよ。
お前が身二つになつて私のいる町に出
てきた時は、本当に再び此処を訪れ
ようね。その時はもう縛つたりなんか
しないよ。縛るのはやはり夜にかぎる
ね。宮崎名物といわれるつき入れ餅や
ビローウチワ、ハニワ人形などをおみ
やげに買ったので別便でお送りしてお
きました。せいぜい御鑑賞下さい。
では又、さようなら

(終り)



私のマゾ傾向は既に幼年時代から、かなり明確に内在していました。

小学校の低学年の頃、女の子に対するお小姓的奉仕を妄想したり、家の中で灯りを全部消してのカクレンボ遊びの時など、鬼になった女の子の足許へベッタリうつ伏して鼻先に足の匂いをかいだりして喜んだものでした。

稍長じて中学校二年生の頃、海水浴に同行した近所の女の子のソックスを盗み出し、足の裏の脂で黒く汚れたソックスの底を吸った

記憶も、忘れられないものでした。

やがてニキビ華やかになった時分は、いよいよ女の足に憧がれる様になって来ましたが生来の内面的性格は、この異常な慾望を他人に知られる事を極度に恐れ、益々、この傾向が内向して来ました。その頃から谷崎潤一郎氏の初期の小説のマゾヒスチックなものに夢中になり、「富美子の足」「赤い屋根」等に見られる女の足に対する悩ましい狂崇、「饒太郎」「痴人の愛」等の美しい女性への屈従と奉仕

「少年」「悪魔」等のウロラグニア的描写等に、日頃自分だけのものとして夢想した数々の事柄が、文豪の作品の中のテーマとして堂々と書れている文字にふれた時は、実に言い知れぬ喜びに興奮の頬をホテらせ読みふけたものでした。

空想のみの世界に生き、未だ性の何たるかを解さない少年の胸を最初に燃え立たせたのは、近所に住む十位年上のちよっと淫奔そうな夫人でした。所謂亭主を尻に敷くといっけ

|| 告

白 ||

若い女の足に狂う

佐 津 真 帆

タイプの嬌慢な姿を、それこそ女神の様に仰いでひそかなる慕情を捧げていたのですが、勿論夫人の方ではこんな子供がそんな事を考えて居ようなどは夢には考え及ばなかったてありましよう。表面は何気なく過ぎ去って行きました、或る時は夫人の捨てた鼻紙を拾って、かすかに塩辛い粘液を嚙り、又或る時の如きは夫人が用便中の汲取口にうづくまて手を差し伸べた事もありました。

又、夫人のはき古したストッキングや、足袋を盗み出し、足の脂に黒ずんだ部分を口の中に噛みしめながら、けしからん振舞に及んだ事も一再ではありませんでした。

かくして、マゾッホの「毛皮を着たヴィナス」に胸を躍らせハバロック・エリスの「性の心理」にコブラグニアの多くの実例を知り、美しい女身の前に拝跪する甘美なるマゾの境地を夢見乍ら成長して参りました。

平凡な見合結婚の後、僅かに妻の足に接吻する事と、クニリングスに慰めを求めて居りますが、強烈な官能満足を味あう事は出来ず、美しい女性を神と崇め、その足許にひれ伏す事は、常に空想の世界を出る事は出来ませんでした。

結婚後一年程経った四月の或る夜の事でし

た。二人の友人と一緒にT新地の入口に車を捨て、かなりの酔いに快よい夜氣を楽しみ乍ら、上樓するでも無くしなくても無く、軒を並べる喫茶店の入口に立って客を呼ぶ女達の叫声を聞き流し乍ら、とある曲角にさしかゝりその家の内部を瞥見した時、腰をおろして何気なく表の方へ向って坐つていた一人の女と、がっちり視線が会ったのです。

こんな商売をする女には珍らしい、理知的に引き締った顔に、思わず胸を打たれましたが、友人の手前その儘に通過ぎたものの、どうもその女が氣にかゝってならず、結局二人の友人をうまくまいて、又その家迄引き返えして、とにかく、約一時間の後には彼女の四帖半の部屋に二人丈で相對する事が出来ました。

職業婦人に対しては、始めてマゾ的感情を覚えるに足る人に逢う事が出来て、嬉しくてたまりませんでした。然しそういきなり最初からマゾ的言動を実行出来るものでは無く、やがて金銭のやりとりが済むと、二人で小さな風呂に入りました。若干の酔いの眼にも、彼女の白く逞ましい肉体の美しさは、少しも娼婦に通有の濁り弛んだ暗い感じは無く、実に素晴らしい迄の線とボリュウムでした。

何とか彼女の足を洗う様にしたいものだと努めて見ましたが、

「女の足にさわると、出世の妨げに成りますよ」

と、云い乍ら、足に触れさせ様ともしないばかりか、逆に私の背を流して呉れるのでしたが、私に取ってはチットも有難い事ではありませんでした。傲然として私に足を洗わせて呉れたら、どんな嬉しいだろうと考えるばかりでどうする事も出来ません。

小ジソマリした部屋に落着き、ママゴトの様な家具調度の中で、彼女の美しさを再び仰ぎ見乍ら、彼女の望むまゝにビールを注文しましたが、彼女の体を通ったビールこそ飲みたくて堪りませんが、どうした事が普段好きなビールもあまり飲み度く思いません。

彼女が痰を紙に取って屑籠に捨てたまゝ小用に立った隙に、その末だ生温かい彼女の痰をなめつくす事によって、僅に慰められた程度で、女の足を好む話やマゾヒズムの話等、ボツ／＼話して見ましたが、何分今迄に、何ら経験の無い事であり、金で体売る女とは云え、マゾヒストに取ってはひれ伏して祈りたい様な相手なのに拘らず、中々うまくは参りません。

勇を振って彼女の目の前で、彼女の脱ぎ捨てた白足袋の中にうや／＼しく顔を埋めて見せたりして、漸く足に接吻する事は許して貰いましたが、平素夢見る様に彼女に一段高い所へ坐って貰い、その前に跪いて臣従の誓いをその足に捧げると云うような訳には行きません。何んとも齒がゆい限りですが、まあ最初はこれ位で我慢する外はあるまいと考えて、足に対する接吻を彼女はくすぐったがって、余り喜びはしませんが、何度かくりかえしました。

思えば昨日迄、否数時間前迄、どこの誰に買われたかも知らない娼婦の身体に対して、この様な事をしてもしも悔いがないのですから、マゾヒストとは、たしかに正常人から見れば随分おかしいものでありましょう。

不眠の一夜は明け、霞んだ様な頭を押えて辞し去りましたが、それでも玄関迄送って来て呉れた彼女の顔を車のガラス越しに見ながら、心中ひそかに再会を約して別れました。

女への手紙

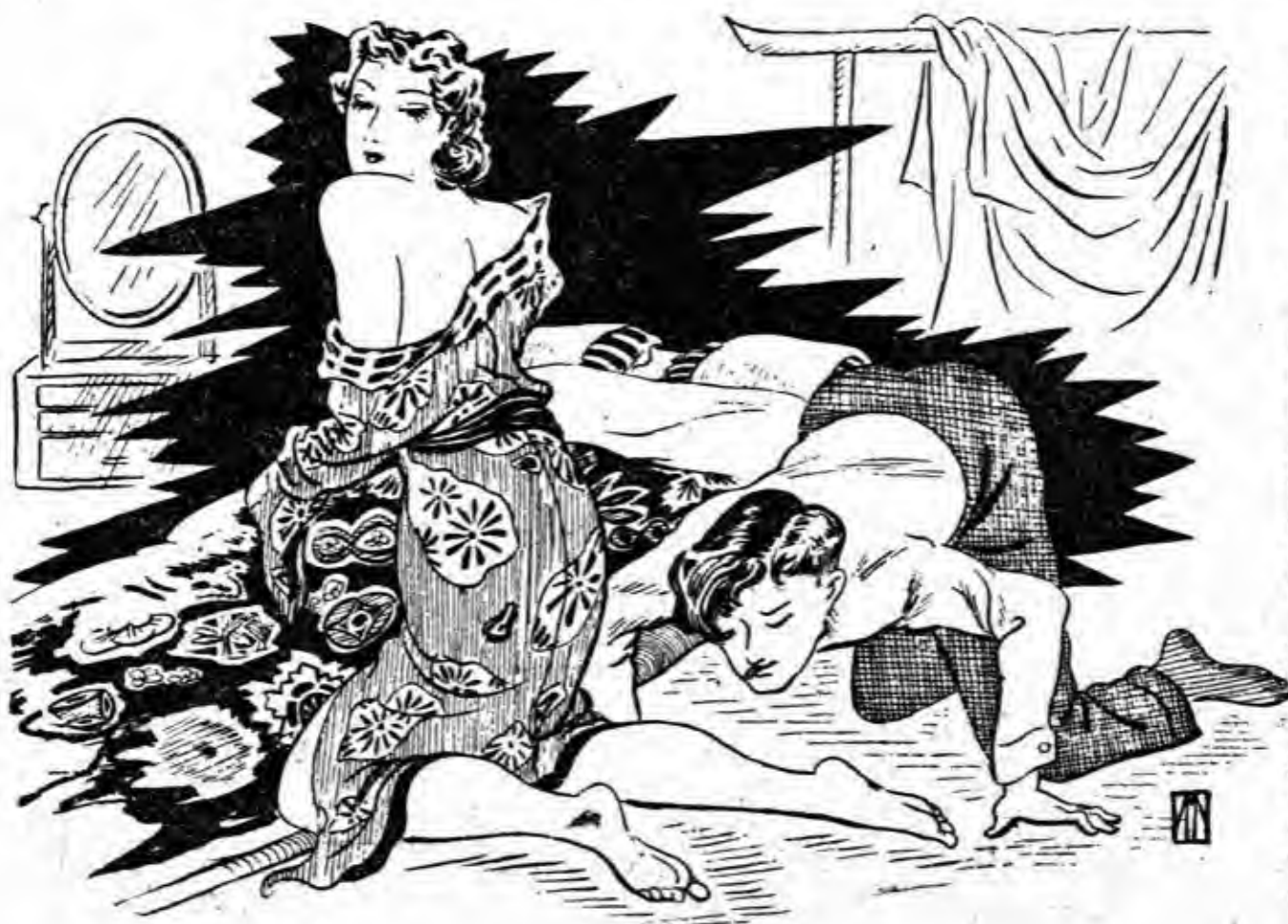
突然の手紙に驚かれる事と思いますが、去る五月の初めあなたと一夜を過した者で、あなたの足に接吻をしたがった男と申し上げれば、或は想い出して頂けるかと存じます。

女の足に異常な魅力を感じ、接吻はおろか足で顔を踏みつけて貰いたいと熱望する男が大変おかしく思われるでしょうが、こういう性癖の持主は決して少なくは無く、多くの実例があるのです。

この前は中々足に接吻させて頂けなかったのですが、近くお伺いする時は是非、心ゆく迄あなたの足をおみ足を味わせて頂けないものでしょうか。あなたの足許にひれ伏している男の前に、あなたは女王様になって、足の指や足の裏を犬の様に嘗めさせその顔を踏みにじってやる事はあなたにとって面白い事では無いでしょうか、まして、そうして貰う事を男は気が狂う程に願っているのですから。

その夜は、あなたは女王様に成られた御気持で、あらゆる奉仕をさせる事が出来るのです。私には如何なる命令にも、唯絶対の服従があるのみなのです。例えば、痰をお吐きになりたい時は、私に命じて口を開けさせ

れば良いのです。そうして夜半にわざわざ便所迄お行きになる必要もございません。何時でも私の口を便器に使う事が出来るのです。



卑しい仕事を命ぜられる程、私は歓喜に燃えてあなたへの奉仕に努めるのです。あなたが好きなビールを召し上って、私の口の中へ何度も何度も放尿して呉れるならば、これにまさる喜びは無いのです。

この様な事を望む人間をマゾヒストと云います。それは美しい女性の前に拝跪し、その女性を神と崇める事にのみ生の喜びを知る男なのです。マゾヒストに対する時、あなたはその男に女神として君臨する事が出来るのです。如何でしょうか、この様な事に若干の興味をお持ちになれますならば、近くお伺いした時、何にも仰言らずにあなたのお部屋に通して下さい。若しこの様な事が全然お嫌いでしたら、私をそのまゝ帰して下さい。

御健康をお祈りすると共に、楽しい一夜を夢見て居ります。

合掌

待ちに待った日は遂に来了。

急いで市中の所用をかたづけ、引き留められる宴席も早目に切り上げ、彼女の住むT新地に向ったのは、それでも九時を廻っていました。

同じ様な家が軒を並べる中を、かすかな記憶を頼りに探し求め乍らも、まだその家に彼

女が居るかどうか、居たとしても果して丁度会えるかどうか、不安と期待に胸を締めつけられる様な気持でしたが、漸く、その家の青い螢光燈の照明の中に、この前と同じ様にボンヤリ椅子に坐っている彼女の、白く冴えた顔を見つけた時の嬉しさ。

「今晚は、しばらくでした」

「まあ」

「手紙読んでいたよけましたか」

「……………」

ちょっと、ためらう様子でしたが、それでもすぐ立上って。

「どうぞ」

と招き入れて呉れました。

長い間空想にのみに許された世界が、いよいよ今夜は実現出来るのだ、と思うと、心臓の鼓動がにわかに高なるのを覚えました。

やり手婆の立ち去るのもどかし、イキナリ彼女の素足の脚に喰いつく様な勢で接吻し様とした時。

「チョット、待って」

「どうして、ですか？」

「そんなに慌てる事はないでしょう。今晚はあなたの好きな様にして上げますから。先ずお風呂に行きましょう」

こんなにうまく行くとは、案ずるより生むが易しとか、この時の嬉しさはちょっと筆にも口にもつくしがたいものがありました。浴室の薄暗い灯りの中に、クッキリと浮き上る女体の輝き！

「私、今日少し酔っぱらってるのよ」

あゝ、なんと云う幸運、彼女の体をまるで宝物の様にいたわり乍ら、石鹸の泡で包み込み、特に念入りに足と……………を洗い終って、楽しい臣従の儀式を行いました。

上る前に思い切って云いました。

「おしっこ、出たくありませんか」

今日は、黙って私のするがまゝになって呉れている彼女は、案外元気な弾んだ声で。

「ようし、飲まして上げるワ」

板の間に仰向けに寝た、彼女がポーズをとった時、早鐘の様な私の胸の高鳴りは、しばらく彼女にも感じられたに違いありません。

あゝ、始めて味あうネクタールのかぐわしさ、思う存分口に受けた尿流の暖かさ、半分程は外にこぼしましたが、それでも相当な量は口から喉を通して胃に納ったのです。この喜びだけでも充分満足に価するものでした。湯上りのビールをあけ乍ら。

「今晚の僕の嬉しさは、到底あなたの御想像以上です、もっとく喜ばせて下さい」

それから、全く犬の様な三十分間。

湯上りの女の足のうまさ、柔らかさがこれ程のものとは知りませんでした。唾も口の中に吐いてくれました。彼女がビールのため尿意を催した時には、一緒にコップを持って便所迄ついて行き、誰も通らないのを見定めてから、素早くコップの中の液体を呑み干した

私は、今、東京に住んで居ります。実は一昨年まで〇市の街はずれの方に居たのですが、少々変な事が起つたので思い切って東京へ出てしまいましたの、お話ししましょう。その事件というのは或る夏の夜のことでした。私と夫とは例によって刃引きの短刀を持ち出して遊ぶことになつたのでしたが

私の切腹遊戯

川合伊都子



りました。一度は、トイレットペーパーの代りを舌がする事にも成功しました。

彼女もこの前と違って。

「ホントにおかしな人ネ」と云い乍らも、あんまり嫌がりもしませんので酔も手伝ってか充分堪能する事が出来たのは幸せでした。

両脚を胸に抱き、二つの足の裏を顔に押し当て……これ以後の事は余り書く興味もないので略しますが、足と尿に明けた一夜の感

激は、何物にも換え難い貴重な体験でありました。娼婦にその奴隷として、その犬として仕える事に喜びを覚える自分！然し乍ら尚もこの中に美を見出し、いつの日が身心共に汚れなき理想の女性への奉仕の可能性に向けて、全努力を続ける事でしよう。

最後に、御誌に載ったものゝ幾つかの切抜が、彼女の決断を助ける事に甚だ重要であつた事をつけ加えてこの小稿を終わります。(終)

この晩のプランは私が夫に惨殺される趣向だつたのです。殺されるときでも決して縛つたり縛られたりはしません。着物も着たまゝ段々に剥ぎ取られたり脱げたりするようにしています。夫はいきなり私の胸倉を取つて「情死の死にそこない女、殺してやる」と、短刀で私の胸を刺そうとします。

私は夫を突きとばして部屋中逃げ廻るのを彼は逃がさじと迫って来るのです。伊達巻はひきほぐされ、素肌に着た単衣の長襦袢の前は乱れてしまいました。とうとう座敷の片隅で私は後抱きに抱きしめられてしまったのです。短刀は着衣の上から左の脇腹へ突き刺さりました。

「アッ」と私は悲鳴を上げながら彼の手から逃れようと身をもがきます。彼が再び切り付けて来た時、危く身をかわし刃を振ぎ取ろうと争いました。そのうちに

「わっ」という夫の叫声、見ると短刀はいつか夫の脇腹へ、しかも私の手で突刺してしまつたのです。——勿論本当に突刺したのではなくお芝居ですが、それにしても最初二人で決めた筋書はこうではなかつたのですけれど、はずみでこんなことになつてしまつたのです。

夫は私の脚を腕でからみ締めつけて離しません。私の裾はすっかりはだかつて太股まで露わになつてしまいました。

「あなたばかり死なせない。私も一緒に行くのよ」と言いながら床の間の処までずり下って床柱を背にしました。

私の体位は立ち腹を切るのに最も適わしくなっています。夫は仰向けになつて私の左のふくら脛へ左腕を捲き、腕を曲げてぎゅっと挟み、右手を伸ばしてその掌を太股へ廻します。私が上から彼の顔を見下すと、嬉しそうな面持ちで左股にやつた手に力を入れて来ます。私は自由になる右足で夫の肩をぐっと踏んまえました、そして刃を逆手に今こそ夫殺しの毒婦の最期なんだと思ひ込んで、充分に下腹まで露わにして左手で臍の下を撫で廻しまさに突立てようとしたとき、ガチャンと硝子戸がはずれた音がして途端に

「おっと」と、奥さん何するんだ、危ねえ」といきなり飛び込んで来て、はっと思つた私の手から短刀を奪ひ取つた男があるのです。

お隣りの大工の豊さんという男でした。

まあ何て迂闊だつたのでしよう、隣家との間の高窓の硝子戸に引いてあるカーテンが少しずれていて、上の方が素通し硝子のため、

一段高い隣りの庭から丁度、私の家の床柱の辺が見えるようなことになつていたので。

どこかで一ぱい引っかけて時間が遅くなつた豊さんが、私の家から灯が洩れていたのを見るともなしに見るとこの仕末、驚いて四ツ目

垣を乗り越え、手早く硝子戸を錠のかゝたまゝ二枚一緒にはずして、飛び込んだというわけなのです。

私達夫婦は顔から火の出るような恥かしい処を見られてしまつたのです。処が当の豊さんは全く夫婦喧嘩の末、私がヒステリ―を起して自殺を図つたのだと思ひ込んで居たので、これ幸いと我々もそういう事に話の辻褄を合わせました。

かなり酔つていた豊さんは、ちっとも気がつかずにそう信じ切つていたらしいのですが、その為には私は無理に豊さんの家へ連れて行かれ、お神さんと二人で淳々と説得されてしまいました。

これが原因で何となく気持ちが悪くて、いっそ東京へ出た方がという事になつて、手筈を求めて東京へ勤め口を見つけて、早々に上京してしまつたわけです。

(おわり)

(梅田淳二画)

〇アブニストの記〇

痴迷

(ちめい)

鬼山 絢策
方金 三・画

「痴迷」を完結するに当たってもう一度くり返しておく。
これは小説ではなく、一痴人の告白記として、その事実
を忠実に記したものであることを。

他人の寝室を覗けば、この様な事柄はザラに転がって
居るかも知れないが、人はどう言うものかかくして話さ
ない。

私は破廉恥漢なのだろうか。

いや、蔭では何でもやって居るくせに、口を拭いて君
子振ってる世間の奴等に対するレジスタンスなのだ。

二十九 第二のプラン

人間は一つの目標である慾望が達せられると、次の目標に

慾望が飛躍する。この目標は、次から次へと続いて居て、最
初のうちは本人の目に見えるものでも、ずっと先の目標は、
本人自身でさえ眼に見えぬ所にあり、とんでもない所に到達
することもあるものだ。

私の第一の目標は完全に達せられた。四十を過ぎた分別盛
りの男を痴情の迷路に踏み込ませる事に成功した。

三木自身にも目標があったに違いない。私達夫婦はその目
標を餌にして、彼を迷路の中で堂々巡りをさせてやって居る
のだった。

彼の目標は、彼から見れば達せられそうに見えたのかも知
れない。彼の目標はつい目と鼻の先にあるのだ。手を伸ばせ
ば掴める位置にある様な気がするのだ。だがそれは虚像であ
って、実像は絶対に掴めない遠い高い所にあるのを、彼は氣



がつかない。そしていつかは掴めると思って、苦しい堂々巡りを繰り返して居る。

私の最初の目的は、只彼を堂々巡りさせて見たい事だけであつた。

謎々の答が解って居て、解けない者にあれやこれやと、無益なヒントを与えて徒らに苦しめる、その姿が見たいだけのものだった。

が、その慾望が達せられると、今度は三木自身に、彼の堂々巡りが宿命的なものである事を、観念づけたいと云う様な形に変化した。

彼自身に、その目標に達せられない事を自覚させる。然も猶かつ、彼は益々苦しい堂々巡りを繰返さねばならない宿命があると云う事を、彼に思わせる事であつた。

その事は妻のきよ美にも話した。私の意思は総てきよ美を通じて、彼に伝えられるのだったから。

だが、私のこの様なプランは罪悪であろうか？、私は、ふと良心の苛責に似たものを感じて冷静に考えて見た。

先ず三木が極めて清純な愛情のみで、きよ美を想って居た場合、その愛に応える如く見せかけて妻を使嬖し、三木を操る事は、三木の人格を潰すものであり、道徳的に見て確かに罪悪である。

それなら三木の方はどうなのだ。人妻に恋しその恋を清純な愛情のみで交際して行くなら許せるが、肉体に迄愛情の刻印をつけたい慾望をもって愛するのは、果して道徳的に許せるだろうか。

三木は確かに熱烈にきよ美を愛している。だがその究極の目的は、決してプラトニックなものではないのだ。きよ美に再三最後のものを求めて居る事は、私自身がこの耳で聞いて居る。

これを罪悪と考えていゝだろうか。戦前では完全に法に抵触する罪悪であつた。この性道徳は古い時代程厳格を極めて居た。

昔は、「間男は重ねておいて四つ」と、姦夫姦婦を斬殺しても罪にはならなかったし、寧ろそれが社会の定法となつて居た。その頃の妻は夫に所有権があつた。従つて夫のものを無断で奪うのであるから「盗む」とも云われて居る。

完全な犯罪だ。

然しそれとても、一般の「盗み」と性質を異にして居る点は、夫がそれを許さなかった場合にのみ罪が成立する事で、夫自身が妻の行為を許せば、犯罪は成立しないのだ。

品物は盗めば、盗んだ証拠があれば、いくら盗まれた人が「これは本人に与えたのだ」と主張しても、「盗み」の罪が成立する。そこに姦通と云うものゝ特殊性がある。

これが戦前の法律だった。

現代ではどうか。

先頃私はアメリカのG・Iと話し合ったとき、「アメリカにも姦通罪と云うものがあるか」と、聞いたところその米兵は「自分はよく分らないが有ると思う。少なくとも社会的にはこれを罪悪視して、道徳的に非難するのは当然の話だ」と云つて居た。個人の自由を尊重し、恋愛の自由をも認めて居





るアメリカの風潮が戦後の日本に流れ込んで、法律迄変って来て居る現代では、どうもこれが罪悪かどうか、私によく分らないのである。

人妻と他の男のこうした事件にも二つの型がある。その一は二人共浮気心で、只何となく肉体的関係を結んで居た場合、その二は真剣な恋愛で、妻は夫と分れてその男と結婚する意思を持ち、夫と分れてから結び合うなら正当なのであるが、その事前に肉体的関係を結んでしまった場合である。

行為においては両者共に姦通である。だが社会の眼は、この二つをかなり大きな差をつけて見て居るのではあるまいか。三木の場合はその後者の方であろう。とすれば社会はある程度同情の眼を以って見るだろうか。

いやいや社会等はどうでもいいのだ。私自身の判断に委せばよいのだ。とすると一応罪悪として考へたい所である。だが立場を変えて、私が他人の人妻に真剣に恋をした時はどうだろうか。その時は「恋愛は自由だ」と逃げるのか？ どうもそう思いたい気がする。とすれば三木の心情も買ってやらねばならない。で一応私は彼の行動を罪悪視せぬ事にしよう。私は妻に対しては表面「報復」と云う名目を用いて居る。だが私の肚には三木に対して、憎悪はなにもない



たゞ私の異常な心理が妻の魅力テストだとか、復讐だとか
自己の良心に言訳して秘かな優越感を味あう為に第一のブラ
ンをたてた。そして今、第二のブランをたてるに当って、再
び罪悪感を感じて、何とか自己の良心に弁明する道はないか
考えて居るのである。

そうして、私はどうにか結論を得た。

それは、三木がもしノーマルな心情できよ美を慕ってくる
のに対して、私がきよ美を操ってこのブランを実行に移した
ら、それは三木の真心を弄ぶものとして、道徳的に罪悪視を
される。

だが、三木の性格の中にアブノーマルなものがあって、私
の条件（つまり彼を奴隷化すること）に対して、彼がそれを
喜んで応ずるならば、彼を騙した事にもならないし、人はど
う思おうと、社会はどう思おうと、私自身の良心には何等容
める処がないと思った。

第一この事は、社会に出る可能性はないし、二人だけ、或
は三人だけの私事であるのだから、社会通念や社会の批判を
恐れる必要はないのだ。

問題は三木の性向に、その分子があるかないかを先ず確め
る事が先決問題だ。

第一のプランで、私は彼にその分子がある様に見える節が
見当たった。だがまだ確定的なものではない、先ずそのテスト
から始めるのが順序だと考えた。

三十 痴 夢

その夜、私は奇妙な夢を見た。

私ときよ美とが裸体で、エデンの花園の様な楽園で遊び戯
れて居る。

小高い岡の木々には、白や桃色や、真紅の、或は暗紫色の
桃が一杯成って居る。その間に、大きなバナナが枝もたわ
にぶら下って居る。私達はその桃やバナナを食べ乍ら、何か
楽し気に語り合い、お伽噺の王子様の乗る様な美しい馬車に
二人で乗って、その座席は狭く、二人はピッタリと身体を抱
き合って乗った。

馬に一鞭くれると馬車は勢よく走り出した。

その車をひいて居る馬を見ると、それは馬でなくて人間で
あった。それが三木だった。

私達は桃を食べたり、バナナを頬張ったりして、もっと早
く馬車を走らせるべく、三木の背中へ鞭をあてた。

三木は四ツん這いになって、馬の様に早く駆けだした。だが彼
も相当疲れて居る事は、その顔中一面に玉の汗が流れて居る
事で分った。

だがきよ美は、もっともっと早く馬車を走らせるべく、容
赦のない鞭をビシビシと三木に加えた。それでもスピードは
段々鈍って行った。

やがて車が止り、汗だらけの三木の顔がこちらを向いて、
「もう疲れて走れないから勘弁してくれ」と眼で言った。

また「腹が減って一歩も歩けない」とも言った。



私達は馬車から手をのばして、赤いのや白い桃を手当り次第に木からもぎって食べて居たが、この哀れな「馬」にも餌をくれてやろうと思った。

私は、手にした食べかけの桃を投げてやろうとした。するときよ美は「それは美味しい桃だからあんたが食べなさい。三木にはこれでたくさんよ」と傍の木から暗紫色の桃を千切って投げ与えた。きよ美は「フ、フ、」と首をすくめて笑い乍ら「あの桃は腐って居るのよ。臭くて私達にはとても食べられやしないわ」と云って、気持よさそうに笑い続けた。

三木はその桃を拾って、それが腐った桃だと知ると、悲しそうにそれを手に取って眺めて居た。

「それだって食べられるんだよ。お前はそれを食べるんだよ」ときよ美が、私の首に手を廻し乍ら命令した。三木は仕方なくその桃を食べ始めた。

私はあの腐った桃を、どうして食べるかと思って居たが、三木はひと度口をつけると、余程腹が空いて居たのかガツガツと食べてしまった。そして「もう一つ投げてくれ」ときよ美に要求した。きよ美は又一つ暗紫色の桃を取って投げた。

今度は三木はそれを拾うなり、躊躇なく美味しそうにかぶりついた。

「あんなのよく食べるね」と私がきよ美に話しかけると「食べられるのよあれだって、三木に相当した食物だわ。ホラ、もっと食わしてやるわよ」と桃をいくつも千切って、三木の頬へ力一ぱい叩きつけた。

三木は犬の様な悲鳴をあげた。

私達は馬車を下りて小高い丘の上に立った。四辺には、すみれや、たんぽぽや、名の知れぬ可愛い花が一杯咲き乱れて居た。

私達は三木を腰かけにしてその上に腰をおろした。

明るく晴れ渡った蒼い空を眺めて胸を膨らませながら、私は将来の抱負を妻に語った。「未来は総理大臣の大将の大文豪になって見せる」と気焰をあげた。

そのとき蒼空の一角に、蜃気楼の様にエジプト風の宮殿が浮び上って見えた。「あの位の大きな宮殿に住んで見たいなあ」と云うと、腰かけになって居た三木が、「私が今にあの宮殿の主人になるですよ」と上を向いて言った。

「なにをバカな。お前みたいなバカになれるもんか」と私は彼の頭を足で踏みつけ、地面へ顔をこすりつけた。「でも本当になるかも知れないわよ」ときよ美は真顔で言った。私はきよ美が軽蔑して居る三木に対して、心の何処かで三木を尊敬して居るところもあるのではないかと思い、それが愛情に変化するのではないかと嫉妬した。

きよ美は三木に向かって「サ、妾達はこの宮殿に住むのだよ。お前は天馬になって妾達をあの宮殿迄乗せて飛んでお行き」と命令した。三木は悲し気に「私には羽根がありませんからそれは出来ません」と断った。その時逞しい真白な天馬が天空から駆け下りて来て、私達の眼の前にとまった。

「まあ綺麗なお馬、サア、もうこんな駄馬は打っ捨てて、この馬に乗ってあの宮殿へ行きましょうよ」ときよ美は子供の様に躁いで自分から先に馬の背に跨ろうとした。私は「あ



へ行こう。だがその前にこの駄馬の始末をして行かなくてはならない」と言うときよ美は「此処へ永久に眠る様にしてやるわ」と、三木の頭や首や背中や尻を足で踏みつけて、地面の中へ埋めてしまった。そして私達は天馬に乗り、天馬は大きく羽搏いて大空に舞上った。私達は希望に燃えて飛立ったが、ふとも居た丘に眼をやると、埋められた哀れな三木が地面の中から首だけ出して、きよ美の方をジッと見つめて居た。いつまでもいつまでも……。

そんな他愛もない夢だった。

三十一 山寺のねこ

三木は六日程家に泊って行った。

その間私はいつも早く帰って寝てしまった。三木は十時頃になって帰って来て、飯を食った。それからきよ美とかなり長い間話をして居た。

話が二人の問題に触れると、声が低くなって聞き取れなくなった。ときどききよ美が、

「大丈夫よ。うちの人はもう寝ちやってるわよ。」

と云って、きよ美は殊更に普通の声で喋った。三木もいつしか釣り込まれて地声になった。

「奥さんの脚は綺麗だなあ。」

「ふふ、みんなにそう云われるわ。」

「え？　じやいろ／＼な人に脚を見せるんですか。」

「男の人なんかには見せないわよ、お風呂で女の人にそう云

われるのよ。男の人はお父ちゃんとおんただけ。」

ベタッ！　と肉体のぶっかる音がした、私は寢床から起き出して覗いて見た。

きよ美は三木の顔の上にふくら脛をのせて居た。三木はそれを両手で大切そうに抱えて居た。

きよ美はタオルの寝巻の裾を翻して、膝小僧を立て、足の裏を三木の顔の上に乘せた。

三木は眼をつぶっておとなしく瞼を顔の上に乘せて居る。

きよ美は横に寝転んだまゝ、足の親指を三木の唇の中へ押し込んだ。三木は咄をしゃぶる様に口をモグ／＼させた。きよ美の足に力が加わった。

「痛い？」

三木は首をかすかに横に振った。

「これでは？……今度はどう？」

三木は足の圧迫を我慢して居る様だった。

「どうして妾がこんな事をすると思う？」

きよ美は足を退けて、三木の返答を待った。

「奥さんは聞ってるんでしょう。自分の心と。」

「ええ？　それどう云う意味？」

「奥さんは自分自身を責めるのに代えて、僕を責めてるんでしょう。」

「フ、そうかも知れないわ。でもそうだったらあんたこそいゝ迷惑ね。それとも妾にこんな風にされてもいい？」

「いゝですよ」

「こうされるのが好き？」



「サア……」

「嫌い？……辛い？」

「辛くはありません、奥さんがそうして楽しいのなら、僕はどんな事でも辛抱しますよ。」

「辛いけど妾の為に辛抱するの？ それとも妾を愛して居るから辛くないの？ どっちなの。」

「サアどっちだかなあ……」

「そこを覚えておきたいのよ、だって妾だん／＼あんたにもっと酷い事をするかも知れないわよ。」

「僕の愛情のテストですか。いつか云った様に」

「そればかりじゃないわ。妾、男の人を責めるのが好きなのよ、あんたが我慢すればする程、我慢の出来なくなる様に仕向けるかも知れないわよ。」

「どんな事でも我慢しますよ。」



「でも厭なのを無理に我慢するのなら手加減するわよ。」

「手加減なんかしなくてもいいですよ。」

「じゃ妾に虐められるのが好きなのね。」

「好きと云う訳じゃないけど、あなたが喜ぶのなら仕方ない。」

「その答え気に入らないわ。」

「じゃ何て云ったらいいんです？」

「好きだとおっしゃいよ。」

「……」

「好きになる様にしてやるわ。好きだと云わしてやる。」

きよ美は、三木の胸に跨がり、右手で三木のモジャ／＼の髪の毛を驚掴みにした。

「妾が自分自身の心を責める責任があるならあんたもその半分を分け合う責任がある事よそうでしょう。」

「それはそうです。」

「だからあんたが苦しむのは一種の贖罪よ。」



妾あんたを縛ってやる。」

きよ美は扱帯を持って来て、三木の手を腹の上で縛り、仰向けにしてさまざまな屈辱を加えた。その方法は大体私がきよ美に言いつけておいた事を、実際に実行に移して居るのだった。だがきよ美の行動を見て居ると、私の為ばかりして居るのだとは言いきれない処があった。彼女自身相当興味を覚えて来て居る様だった。

その執拗な「なぶり」が、きよ美の満足する迄三木は大して悲鳴もあげず、時には苦痛に顔を歪める事はあってもチツと堪えて居た。

最後にきよ美は傍のブローズをとって、三木の頭からかぶせた。

「朝までそうして居るのよ。朝になったら妾がとってあげるわ。手も解いてあげる。それ迄そうやって眠るのよ。」

「あゝ、そりや困る。笹岡さんに見られたら、困るからこれだけはとって下さい。」

「ダメ。妾の命令した事はなんでもハイハイときくのよ。」

きよ美はパツを裾をひらめかして、三木の身体から飛びのいた。

「あゝ奥さん……奥さん」

三木は半身を起して呼んだが、その声を聞き流してきよ美は、私の部屋に入って来てしまった。



「奥さん……」

小声でもう一度呼びかけたが駄目だと知ると諦めて身体を倒し、蒲団を深くかぶって潜り込んでしまった。

襖から眼を離すと、きよ美も三木の方を覗いて居た。

三十二 主役は 誰?

「確かに三木の奴、妾に虐められるのが好きなのよ。」

「どうだか、昨夜の具合ではまだ決定的じゃないな。」

「あら、あれだけ酷いめに合わせてやったのに我慢してるんですもの、好きでなけりや我慢出来ないわよ。」

「イヤ、三木はお前が愛情のテストをしているのだと思って辛いのを我慢してるのかも知れないよ。」

「それだったら、猶面白いじゃないの。」

「イヤ、それじゃ困るんだ。最後には三木はお前が言う事をきくと思ってる。それを諦めさせてやるんだから、現在の状態を三木が最後の目的の為に辛抱しているんなら、三木が可哀想だよ。」

「構やしないわよあんな奴。妾うんと思わせ振りをして、そ



の方でも苦しめてやるわ。」

「そりゃいけない。僕の良心が許さない。」

「だってそれが報復の手段じゃないの。」

「報復はもう済んで居る。現在ではその程度を超えて居る」

「妾は三木を虐めれば虐める程、三木が憎くなって来たわ。まだまだ虐め足りないのよ。」

「それは三木が憎くて虐めてるんじゃない。虐める事にお前が興味を持って来たからなんだ。」

「そうかも知れないわ、でもこんな風にして仕舞ったの誰なのさ。あなたのためじゃないの。」

そう言われると私は一言もなかった。だがこの分ではきよ美は今に、私の言う事には従わなくなるかも知れない。

私は、そろそろきよ美の指導権を失いかけて来て居る事を悟った。それだけならまだいいが、他日三木が離れた場合、きよ美の性向が、私に対して向きを変えて来るのではないかと心配した。

三木の泊って居た六日の間にその程度はかなり進行した。最後にきよ美が私の部屋に引上げてくる時には、いつも三木を縛った儘で、ズロースを顔にかぶせて来た。三木は何度もこれだけは勘弁してくれと哀願したが、哀願すればする程きよ美は、猶一層面白がって毎晩やった。時にはズロースが、メンスバンドのマスクに変る事もあったが、そのいずれかの枷を加えて来た。

六日間のブレーは、いろいろあったが、それ等は本誌の読者がさほど目新しく感ずるものではなく、奇譚クラブにこれ

迄幾度か、掲載された様な事柄ばかりだった。

只きよ美は、血を見る事は好まぬらしく、又鞭を加える様な事もしなかった。

私はいつか、二人のそのブレーを知って居ることを、三木に悟らせてやろうと考えた。それは極めて自然に円滑に、三木を驚かせない様な方法で、知らせてやろうと思って居たので、六日の間に遂々その機会がなく、三木は又鉦山へ帰って行った。

その後私は東京に職を得て、一家を挙げて移住した。

それが急だった為に、三木に会う機会もなく、その儘家族全部が引越して来てしまった。

当然三木と私達の間もそれっきりになり、この詰らない私の体験談も終る訳であるが、さて今しみじみと振り返って見るに、私は三木と云う四十男を、情痴の迷路に踊らせたと思って居たが、踊りを踊ったのは案外自分自身ではないかと思っている。

三木ときよ美の情痴は、確かにアブの世界のものだと思いが、然し、この二人が最初からアブニストではなかったかも知れない。本当のアブニストは私一人なので、きよ美は私の為に動き、三木はきよ美の意を迎える為に、心ならずも従って居るうちに、一方はサチストとしての、一方マゾ的な境地に快感を感じる様になったのではないのだろうか。

アブニストである私自身は、スコプトフィリイと云うアブ行為はあったが、その程度を越した實際行動はない。一体誰



が一番アブなのだろうか。

仮に今度の事件を道徳的に罪惡と視た場合、罪は総て私にあるのかも知れないが、法律的解釈を以てすれば、私は現行犯ではなく、教唆の部類に入るから、二人の方が重く見られるのではなからうか。

アブの行為を自分が主役となって実施するのは厭だが、第三者の立場からこれを眺めた云う心理、これは輕微なもの

読者通信 (投稿歓迎)

本誌五月号、真砂十四郎さんの「二百字讃歌」における主人公の場合は、私のようなマゾヒストにとつて垂涎の生活です。かづ子という女性の型も常に私のイメージの中に住む、理想の女性ということができます。私は、かつて本誌に投稿した手記「自虐鬼の独白」の中で私の求める女性の姿を書いたのですが、私を支配し教育する女性はいらぬ面、私より劣つた環境にある人たることを要求したいのです。マゾヒストは一般に貴婦人型の、美しい聡明な女性を描き出しますが、そういう優れた女性ならば、たとえ男を支配することがあつても、

さしたる倒錯性を私は感じない。秀でた女性のもとに奉仕する者のあるのは当然のことです。従つて私の求める屈辱の快感は味わうべき余地が、まことに稀薄であります。たとえば大家の主人がその家の小間使いに、学校の先生がその教え子に、年長の男が少女のために反対に教育を受けねばならず、その稚拙な判断の結果を強制されるとしたら、私の凌辱感には充分に満足させられるでしょう。二百字讃歌の主人公と、かづ子の立場がそういう関係において次第に逆転し、発展して行く経緯が、私のマゾヒズムを堪らなく刺戟するのです。(河真田)

六月号御送り下さいまして

なら常人にもあるのかも知れないが、私の様に妻の貞操の危険を冒して迄、良心に色々と弁解して迄ひきずり出し度い心理は、やはり自分ながら異常なものではないかと思う。一度高橋鉄氏にでも診断して貰いたいと思つて居る。其の後私も一度三木と会い、妻は二回彼と会つて居るが、その時の事は他日に譲るとして、此処で一先ず区切りをつけて、ペンを置く事にしよう。(終)

ありがとうございます。毎月外国の資料を楽しく拝見して居ります。本号のモデル萩千枝子嬢、本当に素晴らしい方だと思ひます。顔の表情が生き々として居る点が今迄になく感心致しました。是非今後裸体の写真で、外国風の責めのポーズのものをお願い致します。吾妻新氏の服装の利用も大変面白く十三インチの女の写真は特に楽しきものです。小生も拙文を送りました。毎号御編集の方々の努力に感激して居りますが益々の御隆盛を祈ります。(竹谷十三)

○ 充実した六月号を手にして嬉しさの余りお便りします。昨年十一月号よりの愛読者に

○ 早く私の手元には八冊の雑誌が揃いました。豪華な口絵には堪能させられました。本文では辻村隆氏の豊富な経験をもととした発表が大変参考になりました。特集告白はそれぞれに皆面白く御誌ならでは企て得られない貴重な読者の真実の告白で嬉しく思ひました。(栃木M・N生)

○ 女性切腹シリーズ女性切腹第二集、非常な興奮を覚えず、拝見しました。モデル嬢の顔、豊満なる姿態、実にヨキです。写真では無理かと存じますが、一文字に掻き切つたパツクリと口をあけた傷口そこから流れ出る血等、実感のこもつた物をお願い致します。(東京、C、M生)





義母への追想

KK通信の『真昼の幻想』を読み

告白

山岡紫郎

KK通信第十二号で、「真昼の幻想」真曾

生の一文は誠にあっけない程の短文で残念でしたが、しかし私の希望、嗜好、願望にピッタリと叶った近來にない嬉しい文章でした。

何遍繰返して読んだ事でしょう。一句一句がことごとく尊い金玉の文字の様に思え、一口一口と心の奥迄しみ通る様な思いで読みました。そして又、その一句一句に次から次へと幻想の伸展を付加えて誠に楽しい幻想に耽って居ります。

さて、私は少年時代の事を思い出しては、いつか一度その追憶を書いて御指導や御批判

をお願いだと思つて居りましたが、私を熱愛してくれた純愛の義母の靈に申訳ない様な気がしてためらつて居りましたのです。しかし

私は、飽迄義母の真実の純愛を深く感謝して居りますし、決して義母を恥しめる積りではないのです。心からこの事を義母の靈に申し上げ、むしろ真実の感謝の記録として記述する事に決心し、筆を執りました。

これも真曾生の彼の一文が、同氏が幻想をもとにしても、それに啓蒙され、共感、共鳴の上に、私は義母の純真な私への愛情の追憶の記録です。こゝには一点の偽りも、空想も作意ありません。只私の拙い文章の為に、

その真実がどれだけ伝えられるだろうかと心配です。

私が少年時代を過したのは、岡山県の或る山奥の一寒村で、その頃まだ汽車も通じて居りませんでした。

早く両親に死別した私は叔母の家にて七才迄育てられ、七才の春、人里から十丁余りも離れた山奥の寺に預けられました。大きな古い建築の寺に六十余りの老僧を師とし、四十才位でしたか、年増盛りの元氣なその妻なる人を義母として、私と只三人切りの淋しい生活でした。私はこの老師と義母とに大変可愛いがって育て貰いました。殊に義母のこま

やかな慈愛は、今以って忘れる事が出来ません。くどくどしい経歴や、本誌の記事としてふさわしくない様な事は一切省きまして、今日、私の性癖を育て、くれた事実を記述する事に致します。

老師は大分年を取って居られたので、殆んど毎晩一人で寝られた様で、私はいつも義母に添寝をして貰って居ました。時折夜中に眼がさめると、義母は老師の床の方へ行って居る事もありました。私が眼をさますとすぐに私の方へかえって、又寝かせつけてくれました。

所が、便所が大分遠く離れていて、廊下を伝ってその突き当りです。夜は子供一人ではとても行けません。いつも義母は自分の行く時、必ず私を起しては連れて行ってくれました。先に私が用を足してから私を外に待せて、自分が中に這入って用を足すのです。

それが或る寒い晩でした。いつもの通り私が外で待って居りますと、「坊や、お母



様は大便をするから待ってないで先におかえり、風邪を引くといけないからネ」と云われましたが、私は一人で帰るのが怖いので、「いゝよ、待ってるよ」と云って待って居ました。所がこの時、突然廊下の天井裏でガサ／＼と大きな音がしました。それは鼠の走る音でしたが、子供の私には実に大変な恐怖でした。

思わず「怖いよーオ」と泣き叫んで、御不浄の中へ飛び込み義母にしがみついたのです。

「何んだい男のくせに、あれは鼠じゃないか、さゝ、外に出て待っておいで、こんな臭い所に来るんじゃないよ」

とやさしく云われましたが、「いゝよ、臭くても、外は怖いよ、お母ちゃんと一緒にいゝよ」としがみついて離れませんでした。

「仕様のない子だね、それではお目々をつぶってるんですよ」

と云われましたが、その時は何の事も目にも止らず、只怖い／＼との一念でふるえながらしがみついて居るばかりでした。

この義母は御不浄と御入浴の時間の長いので評判でした。寒さと怖さにふるえて居る私を、その夜はしっかりと抱き上げてくれて長い廊下を連れて帰り、床の中に入れて柔い肌にピッタリと抱いて寝かせてくれました。

それから後は、何時も御不浄に行く度に二人一緒に這入って用を足す様になりました。それから又、入浴の時は勿論私は義母に入

れて貰いました。初めは只一方的に私は洗って貰う丈でしたが、先に申しました様に母は大変長湯のくせがあったので、私も何時の間にか母の入浴中何時迄も一緒に浴って居る様になりました。そして小さい手で母の巾の広いよく肥った背をゴシ／＼とこすられました。

それがその頃、私が母にして上げる事で、母の悦んでくれる唯一の仕事でした。私はこの母から悦んで貰える事程嬉しい事はなかったのですから、一生懸命にこすりました。私のこする間、義母は自分で前の方や腋の下、足の指等を洗って居りますが、一通りすむと立ち上って、少ししゃがんで湯槽の湯を汲んでかゝり湯をします。その時大きな真白なお尻が、恰度私の顔の上に突き出した様になります。

その内に母は元から肥えた方でしたが、老師の年を取られるのと反比例してますます肥え太り、大きなお腹、お尻と共にますます大きくなりました。立居にも苦しい様でした。

所で、夜のお便所には何時も私と一緒に行く習慣は改めませんが、余り肥え太った為用を足した後の仕末するのに、母は非常に苦し

む様になりました。

「お母ちゃん、私が拭いて上げようか」と申しますと、

「でも汚いわよ、坊やに出来るか知ら」

「出来るよ、私のを拭いて貰ったんだから母ちゃんのも拭いて上げるよ」

「そう悪いね、じゃあ、やって見て頂戴」

苦しい時には恥も外聞もないものなんですよ、殊に今迄仕末は人一倍いいねいにして居たんですから、それが太って出来なくなつてどんなに気持ち悪かった事でしょう。私の無邪気な申出をそのまゝに受けて、すべてを私にまかせる様になりました。

冬になると母は毎日薬湯を立て、日に三四度も入浴します。私にも特に寝る前に暖まる様にと一緒に浴れてくれますが、この時は洗うのが目的でなく、只暖る丈が目的です。から出たり浸ったり何遍も何遍もしているものですから、母の身体を拭いたり着物を着るのを手伝ったりするのが私の役目になってしまいました。

二人一緒に寢床に入ってから、勿論何時もよりしっかりと固く抱きしめて貰った事は申す迄ありません。巾の広い柔かな胸の大

きな乳房と乳房の間に顔を埋める様にして眠りに入つたのですが、目をつぶっても私の脳裡には、義母のあの大きなお尻の美しい形態がやけつく様に残って描き出されます。

私は母の胸に顔を埋めながら、そのお尻の事ばかりを目の中に、頭の中に描いて居る中に何時しか深い眠りに入りました。

私が中学三年生の夏、脳溢血で倒れた義母は、実に安らかに逝去されましたので、私はこの二人の秘密をそのまゝに私の胸に秘して母を送りました。母の位牌に対し墓の前に拝跪していついつ迄も追憶にふけるばかりです。

まだいろ／＼な思出もありますが省略します。只現在の私の性癖が極めて熱烈なるマゾヒストでありながら、本誌に記載されてある様な、縛られたり、叩かれたりする事は不思議に好みません。そして、只、奴隷としてあらゆる奉仕に痛くない奉仕に従事したい事、特に豊満なお尻の下に押しつけられて思う存分になめさせられたい事、と云う様な妙な性格になりましたのも、皆このなつかしい、そして少年時代を熱愛して来れた義母への思い出のためであります。

拙い文章ですが何卒御判読下さいませ。

コルセツト・マニア

——(告 白)——

一 柳 眞 砂 子



私と母は十三しか年が違わないのです。それはつまり、私は母が十三の時の子であるわけです。一柳家に小間使見習いとして上つていた母は、二男様の子供を十三の時に生んだのですが、それが私だつたのです。新潟の別邸を頂いて、母と私と婆やとで越して来たのが、私のまだ二才の頃だつたそうです。この戦争で東京のお邸は焼け、応召中の二男様は行方知れずです。自分の父を二男様と呼ぶことは、何と云う淋しいことでしょう。私は今女子高校の二年生ですが、父の姿を只の一度も見たことがないのです。けれどその分だけ

母が身に余る程可愛がつてくれました。所がつい一ヶ月前から急に変わり始めた母の様子に人知れず苦しんでいた私でしたが、今日、母の寝室から貴誌が出てきましたので貴誌に、投稿して私の一文をのせて頂いたらその記事を読んで母は見覚めて呉れるかも知れません。母は今二十九才です。誰も十六才の私と比べて母子だと、思うものではありません。姉妹にしか見えないのです。でも母はよく私を可愛がって呉れたのです。ようやく物の解りかけた私には、肉体的な母の悩みはよく分りますが、今迄に只一度でも、そんな素振りの見えなかつた母なのです。ところが一ヶ月前の或る午後でした。

「只今ア」

私が元気に学校から、オヤツの待っている家に、もどると茶の間に母の姿が見えませんでした。おやと思っていると、人のうめき声をするのです。どうやら湯殿の方です。私は恐ろしい事が起きたように、身体がすくんでしまいました。それからこわごわ湯殿の裏へ廻つて窓の隙間から、そっと中をのぞき込みました。そして思わず「アツ」と驚きました。そこに私は何を見たでしょう。

パンティとブラジエアだけの姿で母は、夕

イルの上に腹ばいになって居り、その胴に何か皮のようなものを穿き下男のを爺やに、それを締めさせているのです。皮についている紐を爺やが気がねをし乍らそろ／＼締めると、母はうなり声を上げるのです。私は恐ろしくてそこを逃出しました。

その夜、私は母の留守を見すまして母の寝室へ入って見ました。果していしように棚の隅から箱が出てきました。開けてみると、それは丁度海水着のようなもので、胸から腰に着れる大きさに白い薄い皮で出来ていました。お乳とお尻の当る所は、その形にくぼんで内側にスポンジが張ってありました。背中はず／＼と縦

に割れていて丁度、あみあげの靴のように穴があいて紐が通してあります。コルセットなのです。紐をせいいっぱい締めるとコルセットの空間は、子供がやっと一人入れる大きさしかないのです。私は背が五尺二寸、体重は十四貫ありますが、母は背は私と同じ位なのに体重はもう一貫目程、多い筈です。こんな小さなもので、体をしめ付けたら苦しい筈です。何だ、ってそんなことをするのでしよう



か。

記者先生、私には母にも紹介した大学生の恋人があるのです。それを——私は一体どうしたらいいのか——こうなんです。それから二、三日して私は又も湯殿で、母のうめき声を聞きました。そっと見ると、今度はのけ反る程驚きました。私の愛している岡田さんが例のコルセットを母に着せて、タイルに腹ばいにさせ、まるで荷物でも括るように片足を

母の背中に掛けて、紐をしめつけているのです。見る／＼コルセットの背に割れ目は、母の白い胴をかくして、一息ごとに母の胴は細くしめつけられて行きます。苦しそうな母のうめき声が、次第に高くなつて行きます。しかし半分以上迄来た時、それ以上はどうしても締らない様子でした。岡田さんは、そこで止めようとしましたが母が承知しません。とう／＼岡田さんは、母の背の中に勢を付けて両足で飛乗ると、その勢でしめ上げてしまいました。

母はゲツと叫んで、口から何やら吐き出しました。今朝喰べたものです。母は青ざめた顔で立上りました。しかし何と云う素晴らしい身体でしょう。胸は丸く、両方のお乳は盛り上り、コルセットのスポンジで一層大きくなり、腰も太く、そして豊かな胸と腰をつなぐ胴の線が何と細いことか、まるで一握りです。蟻か蜂を見ているようなくびれた母の姿でした。私は驚きが大きくなるばかりで逃げようとしたとたんに、物音をたててしまいました。その音を聞いた母と岡田さんは、すぐに私だと気が

付き、むりやりに私をその中に引き込んだのです。

昨年あたりから、大きくなり始めた乳房を大切に包んでいたブラジエアも、ズロースも岡田さんの手によって、はぎとられてしまいました。そうしていつの間にか用意していた別のコルセットが、私の身体に着せられました。ヒヤリとする冷たさでした。スポンチが乳房とお尻に、にぶく触れます。二人は私をうつ伏せにすると、背の紐をしめ始めました。私は観念をして目をつぶりしました。しかしその目は再び開かねばなりませんでした。しめつけられる苦痛のために。じり／＼と乳房が圧されて来ます。乳首の先がつぶされて泣いています。腰は肉が引きしまるよう押しちぢめられます。そして胸はキリキリとしめ付けられて、呼吸もしいに小刻みになって、やがてそれがうめきと変ります。私の肩からねぼった唾液が糸を引いて、こぼれ落ちます。

「駄目よ、こんなんじや、まだしまるわ」
母の声です。

「でもこれ以上は無理ですよ、母さんのよりこのコルセットは小さいんだから。」

岡田さんの声です。彼にも少しは愛人に対

する思いやりが、残っていたのでしょうか。

「さあ、もう一息」

母の声と同時に、母の体は私の背に飛びのつていました。

やがて、うつ伏せからあおむけにされました。私は何の考えもなくフラフラと立ちあがり、大きな鏡に自分がうつりました。実物以上に豊に盛上った胸、ふくらと丸みを増した腰、そしてあゝ細くもくびれた私の胴体――。

母はその後益々、コルセットにこつていきます。知人の靴屋を一人呼び込んで、様々のものを作らせています。先日母の寝室に行くと、小学生の女の子でも入るかと思われるような小さなものや、金属のパネの入ったものや、内側に毛皮を一面にはつたものや、内側

一面にゴムのイボ／＼を無数につけたもの、

腕や脚の部分迄付けた全身用の大きなものまでありました。母は岡田に命じて、毎日これをつけ、遊びに出かけます。しかも二十九才という若い母は、セーラー服を着て外出したりします。私も母の命令で一日中、コルセットを脱ぐことを許されません。私はコルセットの上からすぐ、ブラウスとスカートを着て学校に通っています。

母は今日も、ナイロンで作られた全く透明な全身のコルセットを穿いて、岡田と出かけました。その上へオーバーをきたただけで――。

こうして書いていても、コルセットがじりじりと私をさいなみます。乳房が締め付けられてチク／＼痛みます。

以上

責めのアイデアを募る

本誌に発表する口絵の責め写真や縛り絵、或は代理部の分譲写真について、こういった構図やポーズ、或はこういった趣向で作成してほしいといった御希望がございましたら、何卒御遠慮なく編集部宛御申出下さい。万難を排して御希望のものを作成の上、御送付申し上げる外、貴方の考案されたア

アイデアによって誌上を飾りたいと思います。採用分並に優秀なる企画に對しましては、写真或は画稿を差し上げます。詳細なる説明の外に必ず略画、若しくは説明図を添えて下さるよう御願ひ致します。機会を見て責めのアイデア・コンクールを催したい考えです。奮て御応募下さるようお願い致します。

非小説

性液

(六)

伊藤晴雨

地方巡業の第一歩を踏み出した上野原のやまと座の興行成績は、初日が満員だったが、二日は「六分」の入りで「天切れ」といって一座が乗り込みの費用やら宣伝費やらを控除した後の総額を座方が四分、俳優六分に分配すると、細野一座が座方から受取った金は二日間十二円三十銭、当時の物価としては相当な収入であった。

此一座の興行のコースは上野原を振り出しに大月、勝沼、伊那から飯田を通って篠の井から長野、越後の長岡から栃尾、秋田へ出て北海道迄行く予定である。

女を責めて責め抜いて被虐の感觸を充分に味う事の出来るのは、俳優のみが持つ特別な世界であると、やまと座を打ち上げて次の興

行地、甲府の大月座に乗り込んだ一行は、こうした一座の恒例として先乗りの案内で座に隣った座主の処へ挨拶に行った。

田舎の芝居小屋には絵看板が無い。或は掲げる必要が無いのかも知れない。小屋の入口には其小屋が（こけらおとし）の時の記念として、当時の俳優の顔付けを額に仕立て、掲げて置くのが吉例で、此座では沢村宗十郎が来て政岡を出して居る。

芝居の太夫元の部屋は何処も同じで、欄間には絵入の額に隣つて新聞附録の天皇、皇后両陛下のお写真が金縁の額面になって飾られ縁喜棚には豊付稲荷の提灯やら、成田山のお札の剣先やらが雑居して居る。床の間には中央に神農様の掛軸が掛けて居るのは、前身が

テキヤでいもあつたらうと思われる。其他には三尺大の招き猫の置き物と其上の壁には大入袋がズラリと並んで、拙い勘亭流で太夫元様と一枚宛書いてあるのが埃をかぶつて居る。大入額の隣りには宝船の極彩色の彫刻の額面が掛け、浪花節のピラやら芝居の番附やらが次から次へと重ねて壁に掛けて、座主の定紋のついた函提灯が五、六個神棚の隣の長押に掛けて居る光景は手もなく骨董屋の様だ。

上方風の厚い猫板の上へ恐ろしく大きな湯呑みを置いて、勿体らしく熊の皮の上へ郡内縞のドテラを引掛けた座主の加藤という男は細野と友江と豊吉と頭取の松田を前に演し物の註文をつけて居る。

「女の責場を売り物にして行くのもいいでしようが、こゝは何しろ見物が低級なんでね、東京の新派をオナマにやられては初日から危険ですよ、どうしても三尺物をやつて買わなけりやあいけねえんで、どうでしょう、此次の駅は有名な猿橋（えんきよう）でさあ、どうです、急稽古で国定忠治を出してくれませんか、国定忠治がその捕手に追われて猿橋の上から七十五丈の桂川へ飛び込むツてえ処をまだ一度もやった役者が無いんだ。大道具、大仕掛

という宣伝でね」

「成程そりやあ面白いでしょう、併し台本が」

「皆迄云いなさんな、茲に出来ているんだ、どうせ素人の書いた本だ、演り難いだろうが一つデツチて見ておくんせえ」

上野原の太夫元と違つて自作の台本を旅廻りの一座に上演させ様というのだからお世辞がいゝ、田舎の手料理に酒さえ添えて出された。

一番目国定忠治、二番目無残の孝女、という看板が座の表に掲げられたのは、それから三十分とは経たない内で広くもない大月の町廻りも済んで序幕の開いたのは午後六時三十分。

猿橋の料理屋かにやの二階で土地の女侠客火の車お万と忠治のタテ引の件、忠治は豊吉の役でおまんは新加入の友江で、三枚目の役を一人でするにして、其乾分の名前を幸四郎という事にした。おまんさん、幸四郎さんといつて居る内は何ともなかつたが、おまん〃〃幸四郎〃〃おまん〃〃幸四郎〃と早口に呼んで居るとこれがツボにはまって、やんやと大受けて肝腎の忠治のセリフなどフツ飛んでしまつた。それも其筈で聞き様によつて

は「おまんこうしろろ」妙なアクセントでやつたんだから悪いシヤレである。

大詰の猿橋の大道具、九尺高の猿橋の上から飛び降りろという註文を臨時にどうするのだろ。と東京の大道具斗り見て居た豊吉は心配して居たが、田舎の大道具は天才で思い切つた奇抜な道具を拵らえた。

先ず初めは屋体の二重を二枚(普通六尺に四尺)竪に積み重ねて、此上に梯子を二本並べて上手から下手へ渡して、其上へ平台(所作舞台)を並べ、総て鍔留めにした。それから近所から借り物の麻蚊帳を持って来て、衣裳つゞらやらビール函やらを出鱈目に積み重ねて此上に麻蚊帳をかぶせて、これも亦鍔で留め裏手の神社の境内から切つて来た杉の枝を所々差したので、深山幽谷が立ち所に出来上つた。後ろの背景は山又山の旧式な張り物で立切つたが、こんな奇抜な道具は豊吉は初めて出つくわした。幕が開いて捕手に追われて



谷底へ飛び込む処は割れる様な大喝采であつた。

二番目の賣場の娘は約束通り今日は友江に役を振り替えたので、友江は念入りに顔を洗つて念入りに豊吉の継母に責められ様とワク／＼して居るのは、此座は楽屋が全部大部屋になつて居るので細野は嫌な顔をして居るのを豊吉は感じないでは居られなかった。

友江の註文で思い切つて残酷に責めてくれというので、今度は庭先の松の木へ吊し責にする事にした。大道具に松の丸物があつたのを幸い少し下手寄りに之を建て、三本の心木で嚴重に止めた。

賣場の女を吊し責にするのには普通連雀（レンジヤク）を用いる、連雀という名は何から出たかといへば、地方の「木こり」などが柴を背負つて行く時に使用するものを一層簡略にしたもので、これを責められる女形の胴体に背負わせて、其連雀に吊し責の細引を通して人体を吊し上げる仕掛けになつて居るから、縛られる縄と吊される縄とは関

係がないので長い時間吊されて居る事が出来るので、此連雀は宙乗りにも使用されて相当高価なものであるが、これの無い場合は布連雀というものを使って責めの女を吊し上げる場合がある。

布連雀というものは白の晒布を一反胴へ巻いて、其一端に細引を通して、其細引の蛇口（へびくち）の部分に金属製の環を通して此環を縛られた手の上の処へ出しておく、環は縛られた両手の中に隠されて居て、イザ吊されるという場合に女の体を吊し上げる繩の一端にも亦、鉄の環を結びつけておき、此の環と環とを引つけて、女を吊し上げるので

ある。環のない場合は、縄を蛇口の様に結んで吊す縄を結ぶという方法をとる場合もある。

こういう方法で今夜は友江の娘を松の木に吊し上げた豊吉も勝次とは又違った味が出て来たので、舞台という事は忘れて××のにじみ出るのを自然の如くに感じて小道具の棒の先から火の出る程打ちつけた。真ツ白く塗った友江の内股と燃える様な緋色の腰巻、乱れる黒髪、見物はあまり同じ責方に幾分か倦怠を感じたらしい。「もうやめろ」「いゝ加減によせ」「なんて声が掛るが豊吉は興奮し切つて居るのでそんな事は耳にも入らず打ちつけて居ると松の木は突然打つ倒れて友江は縛られた儘、舞台へ転がってしまった。

此儘幕を引く訳にも行かないので女を松から引離して物置へ投げ込む体にして急いで楽屋へ担ぎ込んでしまったが、縄を解いて介抱すると倒れた時強く左の脇を打つて居るのでウン／＼云つて呻つて居る。

次の幕で打ち出してどうや



ら無事に済んだが医師を呼んで来て見せると全治迄には三週間位かかるだろうという診断である。

一日代りを幸いに二日目から細野が代つた。大道具に謝られても出来た事で喧嘩にもならない。二日目打揚げて次の興行地の勝沼座へ立たなければならぬが、二日間の上りでは友江の治療費が支払えそうもない。豊吉は友江の治療代を勝次に請求したく無かった、友江と自分の関係をもしや勝次の感附いて居るのではなからうか、もしそうだとしたらそんな事を云い出せた義理では無いのだ。下廻りの自分を副座長にしてヒキ

の女から金を引出して一座を組織させて旅へ出た恩儀のある細野に内緒で友江と関係をした事は自分が悪いので、考え様によっては松の木倒れたのは細野が女形特有の嫉妬から大道具に頼んでワザと心木を軽く打ち込ましたのでは無からうか、併しそれ迄深く考える



のも如何いうものか、若しそれが自分の思い過してあったらどういう結果になるだろう、無論此芝居は解散で自分は着のみ着の儘で東京へ帰らなければならぬ、無理な役を取つて田舎廻りにならなければよかった、と豊吉は泣きたい様な気持ちになって考え込んだ。

打ち上げの翌日の朝めしを早く済ませて上諏訪行きの汽車へ荷物を積み込んで、又の興行を約束して無事に一行と共に立つ筈の豊吉は、独り楽屋へ残った友江を捨てて行く事が出来ない気持ちになった。こうなれば先立つものは生憎と自分は勝次の男妾の様な立場で一円の金さえ持つて居ないのだ、困ったとぐらうとして倒れ相になつた。武田勝頼の最期を遂げたという天目山や目の前に聳え立つ岩殿山の形さえ癪に触つて来た。

窮すれば通ずと豊吉は心の中で叫んだ。それは親の代からの友達で、今は代が替つてはいるが富士の山麓の東桂村に天野六之助という友人のある事を思い出した。此天野というのは家柄がよく郡内の富豪で、安政時代に幕府が品川湾に砲台を築く時に金策に窮して其建造を此天野家に請負わせ、伊豆の住人、台場の久八(現在)に命じて其監督に当らせ

という位の名家で、当主の六之助は責場に趣味を持ってゐるし、ヨニとリンガの蒐集家として日本に屈指の著名な人物である。これなり／＼と急に思い附いて富士身延鉄道に乗って東桂村を訪ねる事にした。

甲州特有の二階の出窓が飛び出して居る建築の流石に昔をしのばせる堂々たる邸宅は荒れては居るが、立派なもので「天野金」という事もうなずかれる。「天野金」というのは足利時代の徳政と同じく「借りて返さぬ金」という意味で、先祖の天野某という人が人に金を貸しても決して催促をしなかつたので甲斐の国では人に金を借りて返さない事を天野金（あまのきん）と云つたという位の大富豪で当主の六之助氏には初めてとあるが事情を訴えたら何とかしてくれるだろうと心細くも此家を訪れたのであつた。

「お話しはよく判りましたが、其女優さんを東京へ帰す丈けでよろしかつたら御用立ていたしましょう」

六之助は鷹揚にそういつて金一封を豊吉の前に古風な三宝に奉書に包んだ紙幣を水引を掛けて呉れた。

「折角東京から来て頂いたんだから」
と御自慢の所蔵品を見せられてうんざりし

た。ヨニとリンガに関する珍品づくめである。太古時代の石器から明治時代のもの迄無慮数十点、よくも集めたものだと思つた。

見物している内に、六之助氏御自慢の西洋料理が食卓に運ばれた。

豊吉は菜屋の粗食にへト／＼になつた腹を久し振りに癒して稍人心地がして、礼もそこ／＼に屋敷を出て金包を開けて見たら寸志とある中に十円紙幣が一枚入つて居た。

大月座へ戻つて友江に其儘十円渡して東京へ帰る様にした。友江は泣いて喜んだ。而して妾が他日いゝ女優になつたら必ずあなたと

一座を作つて賣の芝居をやつて見たいと云つて仮細帯をした腕を振つて豊吉の発車を見送つて居た。豊吉の眼からは止めども無く涙が流れた。

友江の姿が見えなくなると「性液を注ぎ込んだ女形がいゝか、性液を注ぎ掛けられた友江の方がいゝか」と豊吉は考えに沈んで、名物の月の霞（ぶどうの実へ砂糖をかけた菓子）を買う金も持たない自分の将来を考えて、甲府の駅も過ぎて、悲しい思いで「勝沼々々」と呼ぶ声にハツとなつて、牛の様に遅い列車からブラツトホームに降りた。

【読者通信】

毎月非常な興味を持って読ませて頂いております。先ず第一に毎月これだけの豊富な内容を盛り上げ乍らマンネリズムに陥らずにがっちりとその巧みな編集ぶりには敏腕家の担当者が見え、おられる事と意を強くします。

六月号で目次裏をバックナンバで埋めたのは賛成伊藤氏の口絵は毎月ながらの力作、あとで揃えるといふコレクションになります。昨亭氏の戯画、「纏について」は卑近な運動具を使用して全くほゞえまじいアイディアです。同じく滝氏の「椅子を用いた縛り」はいくら眺めても見飽きない画です。可憐で明るく実に好感の持てる縛りです。両者共不健康さのいささかも見られないのは嬉しい。「白衣の女」は白衣のデテールが出ていないのが惜しい。印刷の加減と思うが、このモデルの表情で演出すればいゝのが出来ると思ひます。外国の写真絵、何れも素晴

しいし文獻的にも価値のある得難いものばかりですが日本のものでも私達を魅了しやすく実写写真の外、絵も時代物と現代物とを適当にとり混ぜて、本心に豪華という外はなく、これだけでも定価の百円は全く安いものです。題名だけは違つてもどれもこれもにたりよつたりの内容の読切雑誌には私達のように本の好きな者でもいさゝか、うんざりさせられます。貴誌の編集ぶりを讀み隆昌を祈ります（姫路 森 采幸）

あるマゾヒストの手帖から

沼

正

三

第五十七 「デュボン博士とその妻」

侏儒と道化の主題については、まだまだ書きたいことが多いが、また後で取上げることとして、本項では、前々項を訳しながら思い出した一作品を紹介しよう。題して「デュボン博士とその妻」。作者は大正時代の進歩的評論家長谷川如是閑。

× × ×

ある大学教授の思い出ばなしである。学生時代、神田のある陋巷に暮すフランス人にフランス語の個人教授を受けていた。そのフランス人というのは、ひどい畸形である。背は中位だが肥っている。その円い身体が捻じれて、左の肩が前に突き出しつつ頭の方へ押しあげられ、しかも首は左に烈しく傾いているので、左の耳が肩に

押しつけられている。一方腰の辺は後へ捻じ曲った様に突き出ている。赤ん坊の頭と足を両手にもって手拭を絞るような工合に捻るとこんな風になるかというひどい体格。その顔が又ひどい。右の眼は飛び出して眉毛を中断し、眼瞼が赤くむけその眼と反射角をなして右下へ傾いて引き延ばされている唇との間に南北アメリカの形の連続した二つの引ツつりがあり、右の頬を擱んでその肉をちぎって捨てた見たいに顔の筋肉全部が右に引張られている。しかも比較的無事な左平面は肩に押つけられて見え、惨憺たる右の平面が差出されている。更に身体の機能障害で、少し動くのにも泳ぎの稽古見たいに身体をもがいてからでないとできない、笑い方も息を吸い込むような風になり、苦しそうで、急にその苦しいもがき笑いが止まらなくなったりする。とにかく滅茶滅茶にこわされた「人間の残骸」

なのである。

このデュボン博士には美人の奥さんがいる、肌は薄墨を塗った様だが、目鼻立ちはお伽噺の女王のよう、しかも艶っぽく、黄昏の空に輝く二つの星のような眼を持っていて、青年はクレオパトラを思い出し、見つめられると血が湧いてグラグラしてくる位。彼女は博士とは別な所に住んで何か仕事をしている。博士にはこの青年一人しか生徒がないのでその月謝丈では暮せないから、恐らく彼女に養われているのだろう。ある時青年は博士がひとりで食事してる所にゆき、まるで犬小屋の前に食い足りた犬ならふり向きもされずに棄てられてあるようなひどいものを食っているのを見て、こんな捻じパン見たいな身体を保存するために、こんなものを食ってまで生きていたいものと浅ましく感じる。

二十数年後、青年は大学教授としてパリーに遊学中、偶然の機会にデュボン夫妻の息子に逢う。聞



いてみるとデュボン博士はアルジェリーの首府アルジェーの女学校の校長をしていた人、夫人は土着のベルベル族の豪族の娘でその学

校の卒業生、結婚後、息子をアルジェリーに遣したまふ日本に行つて消息不明になっていたが、その後二人とも横浜で死んだと分つたところが、この小デュボンは自分の父の畸形を全く知らず、アルジェー時代の壮健な写真の通りだったと信じている。そして教授から、日本にいた頃の父の様子を聞いて顔色を変える。

おそろしい真相があったのである。日本にいた母は、生前自分の住所は秘したまふ、息子のデュボンのもとへ度々手紙を寄せた。それはきまつてフランスに対する、アルジェリー人の徹底的復讐心を表白したものだったが、彼にはその内容の中で、どうも腑に落ちない点があった。それが、教授から父の身体のことをきいてすべてが分つたのだ。

彼女は書いて来ていた。「……暴虐なフランスに対して私のよう

な弱い女がどうして仇がうてよう。だから私は私自身の持物であるこのフランス人に復讐する。……私は一人のフランス人を、私の国の新しい奴隷にするために、私自身の武器を用いたのだ。彼は頑丈な、美しい男だ。それは女の持物になる奴隷には適わしい条件だ。けれども彼の女主人は、彼の頑丈さと美しさを玩具にするのみでは満足しないのだ。我々を虐げたフランスがどんなにならなければならぬかを、私は私のフランス人によって表現させなければならぬ。見ておいで！今に私は「フランスよ、こんなになれ！」と「私のフランス人」をフランスの目の前に投げつけてやるだろう。……」

又、彼女は書いていた。「……私のフランス人は、フランスのため私をフランス人に作りかえるためには、私の彼に与えるいかなる苦しみにも耐えようと決心している。というような顔をしているがしかし私はそれを笑っている。彼はただ私に征服されているのだ。彼は、どんな風に自分が私に征服されているかを証拠だてるために馬鹿か気狂いか獣かがするような真似を私に見せることさえ珍らしくない。私は知っている、彼はフランスに忠実なのではない、私に忠実なのだ……。ここにいる一人のフランス人こそフランスそのもののなのだ。私は彼を罰することによってフランスを罰するのだ。彼は私のために火の中に投げこまれても、それに耐えることがそれがために死ぬことが、フランスの神の命令だと思っている。実はそれは彼自身の情慾の命令なのだ。……」

こういう母の手紙の内容から、小デュボン、父の身体に加えられた母の呪いを看破する。それはベルベル族に伝わる毒物を用いたのかも知れないし、もっと露骨な方法で、危害を加えたのかも知れない。後の手紙は彼女が彼に大火傷を与えたのではないかと推測さ

せる……

以上は必要部分だけ摘記したに過ぎないが、本項の目的には充分であろう。前々項のようにフランス人に本能的隷属を覚えるアルジエリ人の生れる反面、このような民族的憎悪も存するのは当然である。

『如是閑の意図は愛国心を諷刺するにあるが、私はこの小説からサディスティンとマゾヒストを読みとる。何という夫婦であろう。夫を畸形化し嘲笑することに生き甲斐を感じている妻、その妻の魅力に溺れ切って、自分の肉体を材料としてなされるあらゆる加虐に甘んじ、夫の国の料理を食べてまでも生にしがみついた夫、……何という夫婦だろう。そこには男女間の交渉に、たといサド・マゾヒズムの関係であつても、通常は伴うところの「戯れ」の要素が微塵もないのだ。クレオパトラのような Madame Dupont のためになら、敢て Monsieur Dupont をまたすとも「馬鹿か気狂か獣か」がするような真似を喜んでする男がある。不肖私もその一人である。然し私達のそれは「遊び」である。Monsieur Dupont とはそこが異なる。だが考えてみれば、遊びのあとが倦怠を覚える私達の悩みも彼は知らなかっただろう。それこそ本当に毎日毎日を血みどろにマゾヒズムを生きること、それがこの生きながら「人間の残骸」と化した男の運命であり、生き甲斐でもあったのだ。こゝにも「奇」な人生があった。

第五十八 日の丸ブローズ

大日本帝国の植民地支配は西欧諸国のそれに比較すれば、その圧

制の程度はずっと微温的だったようである。然し、植民地である限り、そこにフランスとアルジェリアのような関係があったことも確かである。朝鮮人台湾人は決して日本人に心服していなかった。それを如実に物語る事例を一つ紹介しよう。私自身の体験ではないが、親しくしている友人から聞いたので、出処は確かな話である。

彼は終戦当時陸軍少尉として台湾にいた。日本降伏によって中国軍に武装解除され、翌年春復員する迄俘虜部隊であったが、給料は全く貰えず、各部隊はそれぞれ自活するように命ぜられ、特殊技能のある工兵隊等と異り、歩兵部隊などは随分苦勞したそうである。防空壕の穴埋めなどニコソンの仕事を請負っては金を貰う。昨日まで威張っていた軍人も、今日は子供達から「やーい、日本の犬、帰れ」と罵られても何もできない。喧嘩しては金にならない。口惜しい思いだったという。第一台湾人がこちらを見る眼付きが全く変ってしまったそうである。昔の阮籍に「青眼白眼」という故事があるが、先ずそんな所で、ことに終戦後暫らくは、今迄の反動からか、極端な侮日行為が横行した。日本地図の大版のを道に敷いて、通行人に踏ませたり（日本でも米英の国旗を道に敷いて敵愾心を煽ったことがあるが、戦時中のことだから、恕すべきだ。）、戦前から各台湾人家庭に強制的に皇太神宮と両陛下の御真影の軸を奉戴させたりしいのだが、この御真影を切抜いて、虎子おまろの底に敷いたり、随分ひどい「罰あたり」なことをしたらしい。丁度西洋で「瀆神」が非常におそろしいこととされ、それだけにスリリングな満足を与えるのと同じように、大日本帝国の属領として、常に天皇からの圧制を精神的に感ぜざるを得なかった彼等が、「不敬」行為に快感を見出したとしても無理はないだろう。そんな雰囲気の中で、次のことが

起つた。

給料が貰えず、部隊自活も全員の炊事を間に合せるのがやっとという状態だから、兵隊達は次々に私物を売り始めた。時計を売り、万年筆を売って、食い物を補充した。売れるものがなくなると、官給品の毛布まで売り兼ねなかった。そこへ、ある兵隊が耳よりな話を聞きこんで来た。「日の丸（の旗）が売れる」というのだ。駐屯していた市の国民学校の女の先生がそういった、戦争中の記念になるからといって沢山集めている人がいるんだから、いくつ持って来ても皆買ってあげるといったという。買値は忘れたが、とにかくその場の皆の心を動かすほどの値段だった。

忽ち評判になった。日の丸は殆んど皆がもっていた。そして千人針と一緒に大切にしていた。贈ってくれた人の名を書いた日の丸は皆一番大切な記念として、今迄誰も身から離さなかったのだ。しかし、それは、日の丸を買う人がいなかったからではなかったのか。売れるだけ私物を売ったあとに残った日の丸、それは売らなかつたのではなくて、売れなかつたに過ぎないのではないか。

それが証拠に、「俺も俺も……」と希望者は続出した。小隊長をしていた僕の友人も、やはりその一人だった。「敗戦という現象は無意識的に俺達の日の丸に対する盲目的愛着を薄れさせていたんだいくら金に困っていたからって、皆が皆希望したということは、そうでなければ解釈できない。しかし、又、もしその日の丸の真の用途を知っていたら、誰一人売る奴はなかったと俺は思いたいよ。」友人は後に私にそう語っている。

日の丸はその友人の部隊丈でなく、随分手広く集められたらしい一体どうするのか、そんなに沢山を記念に集める必要があるのだろ



うか。やがて真相が伝わって来た。それらが全部ある所でズロースに作られているというのである。旗一枚から丁度ズロース一着が取れるのだそうで、しかも、赤い日の丸の部分が丁度股に当ってひどく汚れるような具合に仕立てられているというのだ。台湾人の各家庭に備付の日の丸も勿論手に入れるだけ集め、それでも足りずに高い金を出して兵隊のまで集めることになったもので、そうして作

り出した「日の丸ズロース」を安い値で密かに販売しており、仲々良く売れる、兵隊から集めたのは、白地に日本人の名が入っているので却って評判が良い、こんな噂であった。

これをきいて、全員動揺したが、武装解除された俘虜の身分で軽挙妄動できない。憤懣は内攻して、「日の丸が売れるぞ」のニュースを持ち込んだ兵隊に向けられ、彼れ自身も自責に堪えかねたか、神経衰弱気味になって、とうとう復員の日を待たずに自殺してしまつたそうである。

以上が友人の話である。私は台湾から復員した他の人にこの「日の丸ズロース」のことをきいて見たが、三人の中一人はその噂をきいており二人は知らなかった。読者中台湾に戦後居られてこれについて何か御存じの方があつたら附け加えて欲しい。私はこの話にマゾヒスティックな興奮を覚える。読者の中にもきつとそういう人がいると思う。それは一体何故だろう。ここには男に対する虐待はない。相手が白人種というのでもない侮日行為だからか？ しかし道路で日本地図が踏まれた話は別に私を興奮させない。

興奮のもととは結局日の丸と女の股倉との結合という点にある。私達が小さい時から「白地に赤く」と歌って来た日の丸、日本精神の象徴、それは「天皇陛下万歳」といって死ななければならなかった世代にとっては、いやでも応でも日本国家との心中を強いられた世代にとっては、端的に言って、自分のもつ一番神聖なものを代表していたのだ。それが、異民族の女達の股倉で汚されるということは、自分自身がそこで汚されるのと等しい。この同一化心理が作用するところにマゾヒスティックな

効果が生ずるのだ。

それにしても喜んでこれを買求め、日の丸を股に当てて快とした台湾女性が沢山いたということを思うと、恐ろしい。民族的敵愾心の激しさに、そのポテンシャルなエネルギーに慄然とするためには、必ずしもデュポン博士の妻をまつ必要はないのだ。

第五十九 肉 台 盤

テーマ
主題はちがうが、今度は私自身の軍隊時代の一経験を書く。私は初年兵を満洲でやったのだが、満洲の兵舎は内地のと違って、内務班の寝台を置く床が二段になっているのである。中ではベーチカという暖房を焚く。室内では暖

い空気が上方に昇るので、上段の方が暖い。古参兵がここに坐る。隣りに戦友がつく。

兵営生活をした人は誰でも知ってるだろうが、古参兵の戦友というのは、実は奴隷と思えば間違いない。衣食住一切の世話をさせて戴く男の女中なのである。

私の兵営のマゾヒズムの本質は人格的隷属にあると信じる。映画「真空地帯」などは暴力によるザディズムを前面に押し出しているようだが、私



は、暴力が権力と化してこの人格的隷属体制を維持したという面を強調するだけでも充分と思う。といって勿論肉体への暴力の意義を過少評価するつもりはない。しかし私自身随分肉体的にもひどい暴力を受けたのだが、人格的・心理的な迫害の方がずっと辛く深い傷を残した。直接肉体に何も手を加えられなくても、兵営内ではサド・マゾヒズムに事缺かないのである。レマルクの「西部戦線異状なし」では、下士官ヒンメルシュトスはコチコチになった長靴をグニャグニャになるまで二十時間磨かせ続けることで、シヨペンハウエル全集を愛する初年兵に、軍隊における作業の意味をわからせ、兵隊とは曲馬団の馬見たいになることだと理解させるのである。「きけ

わだつみの声」という映画では、将校が兵隊を相伴にして猫に出かけ、運搬犬の代りにして、射ち落した鳥をくわえたまゝ這わせる場面があった。なぐるより、けるより、こういうのが一番本当の「訓練」としての効果がある。

さて私のことに戻る。私の戦友になったのは五年兵であった。彼は便所にゆく時以外は二階（上段）から降りなかった。食事はどうしたか。膳盆に彼の食器を載せると、私はそれを両手で持ち上げて二階の戦友「神様」が、二階の床の最前端にあぐらをかいて鎮座まします前に捧げるのである。下の床に立った私が、ぐっと両手で差し上げると、丁度肉食の膳部程の高さになるのである。「神様」はそこでゆっくり食事する。その間私はずっとその膳盆を支える姿勢を続けるのである。つまり食卓の代りである、「人間食卓」なのである。

勿論私だけではない。他の古参兵も戦友にこれをさせていたが、これに一番屈辱と反感を覚えたのは入隊早々で当時マゾヒズムの気もなかった私であり、他の百姓出の初年兵が案外この奴隷的作業に平気であることが、初年兵同志話して見るとよく分り、私には意外だった。尤も、その私が、今ではあの時の屈辱感を楽しく反芻するマゾヒストなのだから皮肉なものだ。

この「人間食卓」には支那で「肉台盤」という呼称ができています。生きたちやぶ台」の意だ。

南唐孫晟。官至三司空。每食不設几案。使下衆妓各執一器。環立而侍。号二肉台盤。時人多效之。

（事類全書）

これによると一人に碗、一人に皿というように一人に一つ宛もた

せて、ぐるっととりまかせたというのだから、これが本当の「人間テーブル」かも知れない。尚楊貴妃のいところで馬鬼で殺された楊国忠にも肉台盤の故事がある。これらはいずれも女が男に仕えているのであるが、玄宗の時代から少し遡ると則天武后というお面喰いの女傑がいるから、美少年を選抜して肉台盤サービスさせたと思像して少しも不自然でない。又楊貴妃の三人の姉の驕奢も一代に絶したのだから、楊国忠のやったことを女を男に代えて真似したとも充分想像できるのである。前記の引用文にも、「時の人が沢山その真似をした」といっているではないか。

尚いわゆるマゾヒズム小説中には、女主人に対する肉台盤サービスの場面の描かれているのが少くない（手近な例では「毛皮を着たヴェヌス」の中にもある）。私はそんな場面を読む度に、昔の血の逆流するような屈辱感を思い出して、もう一度血の逆流するような昂奮を覚えるのである、今はマゾヒストとして。

【手帖】既刊目次

廿九年二月号（一五四頁）

（四一）「犬の愛奏曲」

（四二）詩人ハイネの妻

（四三）マゾッホと犬と猫

（番外）二つの「赤御殿」

廿九年三月号（五七頁）

（四四）マゾッホの伝記書

（四五）手紙（その三）

（四六）額縁

（四七）かさぶたを食う

（四八）「揮発した踊子」

（四九）「仇討三鞭風呂」

廿九年四月号（九七頁）

（五〇）美姫の水浴

（五一）ボツヘアのミルク風呂で

廿九年五月号（六六頁）

（五二）「罪の椅子」の元祖

（五三）矮民王義

（五四）侏儒と道化

廿九年六月号（一六八頁）

（五五）手紙（その四）

（五六）人間は動物である

（四〇）以前は新年号にあり

刑 罰 秘 話

實 說 白木屋お駒

川 野 京 輔

【一】

浄瑠璃「恋娘昔八丈」で知られた白木屋お駒と髪結才三の情艶は、世に謂う大岡裁きの一つの事件であるが、その真相は、浄瑠璃とは多少異った物である。

お駒の本名は、おくまと言ひ、白木屋ではなく、白子屋と言う屋号であつた。

ともあれ浄瑠璃は、事件を面白く趣を添えるために脚色したものであるから、事実との相違を云々する積りはないが、本稿のテーマたる、当事者の処刑を語る前に、一応、お駒事件の真相をお知らせしておこうと思う。

【二】

江戸新材木町にある材木問屋白子屋は、江戸名物の火事の度に、巨利を得た資産家であつた。

主人の庄三郎は、入聲で六十近く、家付きの妻おつねに頭が上らなかつた。

おつねは、四十の中ばを越した大年増だったが、未だ色香の失せぬ魅力を持っていたので、愚直な庄三郎を外に、髪結の清三郎と、密かに通じてよこしまの快楽に耽っていた。

一人娘のおくまは、母にも勝る美貌と才智に恵まれ我儘一杯に育てられたが、早くより

手代の忠八と情を交す仲であつた。

中年の女中、ひさが、若い二人の仲を取持ったとされている。

忠八は次第に主人を差置いて勝手に店を動かす様になり、少なからぬ借財を負い込んで仕舞つた。

偶々、事情を知らない外より、おくまの縁談が持込まれ、又四郎と言う男が、五百兩の持参金を持って白子屋に養子となつて来る事になった。

忠八と関係のある、おくまは、又四郎と結婚する意志など毛頭無かつたが、持参金に目がくらんで、渋々承諾した。

それで式だけは挙げたが、病氣だと詐つて又四郎と同食しなかつた。

利巧な又四郎は、暫く同居する内に、家内の乱脈と淫蕩さに気が付いたが、事を荒立てるのを恐れて、じつと我慢していた。

おつね等は、又四郎から金を取上げると、急に邪慳にしだし、まるで邪魔者扱いにして祿に口もきかなくなつた。

だが又四郎は、商売専一で仲々出て行かないので、彼等は、遂に、又四郎を毒殺しようとしたが、失敗した。



おつねは、少し足りない下女のきくに言い
含めて、又四郎と無理心中をする様に仕かけ
た。

きくは、命じられたまゝ、ある夜、剃刀を

だまされたので無理に心中する気だった」と
言われた通りに答えた。

驚いた又四郎は、根も葉も無い事だと弁解
したが、おつね達は、「こんな不義者を簪に

持って又四郎の寢室に忍び込み、切りつけたが、反対に取って押えられた。

この時、兼ねて隣室で様子をうかがっていた、おつね

おかね、忠八は、頃合

を見て飛び出し、おきくに、どう

した訳かと尋ねた。

きくは

「若旦那に

する訳にはいかぬ。町奉行所に訴えてやる」と身の程も知らずに、訴えて出たのである。当時の奉行は大岡忠相であったが、彼一流の裁判の結果、白子屋の内情が明るみに出されそれぞれ判決が言い渡された。

享保十二年十二月と分かっているが日は明らかでない。

「幕府時代届申渡抄録」に、此の白子屋事件の裁判が記載されているが、判決は、それぞれ、次の通りであった。

新材木町庄三郎養子又四郎妻

くま(二十三才)

其方儀手代忠八と致密通候段、不届至極に付町中引廻の上死罪。

右庄三郎召使

ひさ

其方儀主人簪養子又四郎へ疵付候様、傍輩きくへ申勧め、其の上又四郎妻くまへ手代忠八密通の取持致候段不届に付町中引廻しの上死罪。

右庄三郎手代

忠八(三十八才)

其方儀主人庄三郎簪養子又四郎妻くまと密通致し候段、不届至極に付町中引廻しの上、於浅草獄門。

右庄三郎召使

きく(十七才)

其方儀主人庄三郎妻つね何分に申付候とも主人の事に候得ば致方も可有之処、又四郎に疵付候段、不届至極に付死罪。

× × ×

以上が「申渡抄録」に記載されたものであるが、此の記載にもれている、つね(四十九才)は遠島、庄三郎(六十才)は、家内の監督不充分的責任を問われて追放となつてゐると、「大岡仁政録」は報じてゐる。

その他、髪結の清三郎は引廻の上獄門にされたと言われる。

なお、「仁政録」は「申渡抄録」と異り、手代忠八の年齢を二十八才と記してゐる。

【三】

おくまは、引廻しの日、白無垢の衣を着てその上に黄八丈を羽織つてゐた。

襟には水晶の数珠をかけ、口に念仏を唱えながら、美しい顔を引締め、深くうなだれて菰をかけた馬に縛られたまゝ乗って、町中を引廻された。

おくまの柔らかな肌に喰ひ込んだ荒縄の両端を、馬の左右にいる非人が、持っていた。罪状を記した紙の幟と捨札を非人が担いで

先頭を歩き、その後から手代りの者など二十許りが警固しながら、行列は、黒塗朱の陣笠をかぶり、黒の背割羽織、野袴で馬に跨った与力に卒いられて行進する。

牢屋の裏門を出た、おくまは、小伝馬町より江戸橋を渡り、海賊橋、八丁堀、松尾橋、京橋、芝車町に至り、それより引返し、三田飯倉、赤坂、田町、四谷、牛込、小石川、壺岐坂、本郷、上野山下、下谷浅草今戸に出て更に引返し、御蔵前、浅草、馬喰町、を経て牢屋裏門に帰ってくるのである。

美人の誉高いおくまの凄艶な引廻しを見んものと、沿道は物見高い群集で一杯だった。

馬の背に、後手に縛られた、おくまが不安定に揺れ、ぐらりと身体が傾れる度に、非人は容謝なく、左右の縄を引っばる。

真白な脛が、その度に、露出し、形の良い素足の指が、びく／＼と握攣するのを、人々の好奇の眼が、焼けつく様に集中する。

慌てゝ、おくまが身悶えれば身悶える程、囚衣の裾が割れて、太腿の白さが、痛ましい。

群集の獵奇の眼を逃れて、牢屋に帰ると、今度は、浅右衛門の手に渡るのである。

おくまが科せられた死罪と言うのは、町人

にのみ科せられる処刑で、小塚原迄、連れて行かず、牛屋敷内で首を斬るのである。

非人が三人、おくまを首斬所へ連れて行く半紙を目に当て、藁縄でく／＼して目隠をすると、首をぐ／＼と首斬穴の前に差出させる。浅右衛門が依頼された試し切りの新刀をたずさえて現われる。

検視人の与力が、横に控える。

浅右衛門は、黙っておくまの後に立った。ほっそりした頸から、身体の線が、妙に艶めかしく腰まで、なだらかな凹凸を見せていた。

む／＼した尻の下で、可愛らしい二つの足が、きちんと組み合せられてあるのが、余計、臀部を肉感的にしていた。

浅右衛門は、此の美しい肉体から一瞬にして魂が宙に失せるのを考えて、いつになく、感傷的になった。

「さあ。」

興力に声を掛けられて、ハツと我にかえった浅右衛門は、さっと白刃をひらめかせた。ポトンと音がして、おくまの首が穴の中に落ちた。

浅右衛門は、刀に手ごたえを感じた時、おくまの両足が飛び上り、それ自体が別の生き

物であるかの様に、斜め横に拡がったのをちらりと確に見たと思った。

柄になく、顔を赤くした浅右衛門は、穴の底から、美女の生首を引っ張り出すと、不気嫌に、与力の前に差出した。

「ほう。凄まじいものじやな。」

与力は、凄惨なおくまの死顔を見て低くうなった。

浅右衛門は、かっと見開かれた、死人の目を閉じさせると、美女を切った生々しい充奮に、口中の渴きを意識しながら、非人に、後で死人の肝を取って届ける様に命じて与力と共に引上げて行った。

後に残った非人共は横倒しになった首の無い肢体を丸裸にして、衣類を持って帰るのであるが、未だピク／＼と微かに反応のある白い肉体を見ては、そのまゝでは済まない。

てんでにいやしい獣慾を満たすのであるがそれが終ると、おくまの屍体は、そのまま小塚原に運ばれて、縁者の手に渡された。

こうして一世を騒がせた、白子屋おくまは悲惨な最期をとげたが、その噂は、いつ迄も残り、彼女が引廻しの時に着た黄八丈は、当時江戸の流行であったが、暫くは、着る者がなくなったと伝えられている。

【四】

浅右衛門は、おくまに次いで、召使のひさ（年令不詳）ときく（十七才）の首を打ち落した。

きくは、泣き叫び、浅右衛門にすがって助命を乞ったが、元より、彼には何の権限もなく、容謝なく、此の体ばかり發達して、智能の遅れた下女の、あどけない首を、首斬穴の中へ切つて落した。

ひさはおくまと同じ様に町中を引廻された後、処刑されたが、きくは直ちに死罪となっている。

こゝで注目すべきは、先のおくまの引廻しの際、見物人の取締りに難渋したので、その後の女の引廻しを、どうするかと言う問題が生じた事である。

女が囚衣で、後手に縛られ、馬に跨がるという事自



体が、かなり、猥奇的である上、その囚人が若い美人でもあれば、いたずらに群集の、低い興味を刺戟する事になる。

おくまの引廻しに際して、見物の男達が、雪崩を打って近づき、傾城の美女の肌一寸でも触れようとして大混乱を生じたのである。う事は想像に難くない。

そのせいか、大岡忠相は、石河土佐守、水野対馬の守と語って、寛保二年十一月に至って、女の死刑者の引廻しを廃止するに至った。

それであるから、此の白子屋事件の二人の女囚が、有名なものの中では最後の引廻しとなった模様である。

おくまと通じた手代の忠八は、引廻しの上獄門となっている。

おくまの場合と違って忠八は、見物の罵倒と侮蔑の渦に巻込まれ、屈辱に満ちた引廻しを受けて、牢屋に帰って来た。

浅右衛門が、彼本来の無表情な顔で現れ、一撃の下に、首を切って落した。

検視が済むと、非人が、忠八の首を奇麗に洗う。

おくまを迷わせた、天下の色男も、首だけになって仕舞えば、唯、不気味な一箇の物体

に過ぎない。

非人も、男の首では興味もなく、乱暴に、俵につめて、抛り出す。

これを、町方の与力と同心が獄門に運んで行くのである。

髪をおどろにふり乱した忠八の生首が、浅草の獄門台の上にのせられた。

罪状を書いた捨札が側に立てられ、非人が番をする為の小屋が隣合せてあった。

町中の野次馬が、こわごわ覗きに来た。

さすがに、浮名を流した男の獄門だけに、年頃の娘達が、おず／＼と、そのくせ、可成りの興味を持って見に来たりした。

夜になると、非人は、空樽を、生首にかぶせる。

縁者とか、ある種の物好きが、生首を盗まれない様、非人は夜通り、張番をしている。

こうして忠八の首は、三日二晩、晒された後、地にうずめられた。

おくまとの関係を書きつけた捨札だけが、獄門台の横で、ポツンと立っていた。

【五】

髪結清三郎も忠八と同じに処刑された。

母親のつねは遠島に処せられ、主人の庄三郎は追放になっている。

追放には、重追放、中追放、軽追放、江戸十里四方追放、江戸払、所払の区別があるが庄三郎の場合、そのいづれであったかは詳かではない。

それぞれに処刑が決して、白子屋事件も、目出度く、決着するのであるが、此の事件があれ程、世を騒がせ、後世に迄喧伝されるに至ったのは女主人公の抜群の美貌もともかく名奉行大岡越前守の御捌で、真相の判明した為であったろう。

髪結清三郎を好男子の才三と改め、これとおくま（お駒）とかみ合せて一代の情話に仕上げたのが、浄瑠璃「恋娘昔八丈」であり、世話狂言「色盛八丈鏡」「梅雨小袖昔八丈」であるのは、御存知の通りである。（完）

□伝言板□

- 中康弘通氏の御病氣は其の後も快方に向かわせられない為「切腹研究」は本月号には残念ながら間に合いませんでした。
- 林弓志雄氏の「私のシルエット」は誌面の都合で翌月号廻しとなりました。
- 羽村京子さんのアイデアになる都築峯子画「人形料理」の口絵は書き直しのため、本月号には掲載不能になりました。
- 長谷川洋氏へ「新聞の切抜き」有難う。貴方の御意見は面白いです。きつと沼氏も賛成されるでしょう。

【切 腹 通 信】

中 康 先 生 へ

川 合 伊 都 子

奇ク誌上の先生の御文を拝見しまして、理論立ったことは申せません私ですが、自分の氣持を卒直に申上げたら或は多少とも御研究の御参考になるかと存じ本誌を通じて御便り申し上げます。

「一度自殺し損じた者は決して二度とやらない」という事を聞きもし読みもしましたが、私の場合は、あのナイフを下腹部へ突立てたときの快感がいつまでも忘れられずむしろ、ちよつとした動機があればそれをいふことにして、今度こそ仕損じなく割腹してしまひはせぬかと常に危ぶんでいる程なのです。それ程下腹に刃を加えたときの刃の冷たさ、次いで突立てた時の激痛、それがやがて疼く痛さになり、終に痒みさえも覚えてきてそれこそ傷口に手を突込んで腸を掴んだら、どんなに「氣持だろ」と思う念が強くて死ということを超えてしまうのです。しかも私の場合いゝ対手があるので

近頃では何か筋書を作ってから露骨に言えば前戯としての切腹遊びなのです。

女人切腹の敘述を見ますと「女ながらも」と「女だてらに」と二つの形容がされて居りますが、私はこれを交互にやっています。勇婦烈女といった扮装の時はすべて「女ながらも」という氣組みで最後まで美事に仕終わせるので、俠女賊婦などに扮したときは「女だてらに」という心がまえであられもなく惨らしい最期を演出いたします。

よく演りますのは吉村烈女の切腹で、烈女は氣儘な切腹なのでから腹を劈いた最初の血潮を許婚の男に飲ませたり、切り終えた断末魔に許婚と二人きりになって思ひのまゝに最後の別れをするという筋に改めました。又、清少納言の撫養の振に於ける最後の場もよくやりますが、何れにしても其の場の思いつきでいろいろに変わった演出をしています。とに角私も夫もお互に近頃では刃物を用いないと全然満足しないのです。そして最近では糊紅も時折使用して居ります。

七月号には水内さんの「切腹願望」に「女の割腹自殺という標題

を見つけると胸がドキ／＼する」とありましたが、私は女性の癖に「川合某妻伊都子(三六)は×日×時頃自宅六畳の間で刃渡り七寸位の匕首で下腹部を真一文字に掻切り大腸露出云々」なんて新聞に出たらと考えただけでもそれこそ胸が躍るのです。

こんな変態な生活を少しも倦きもせず、いゝえ倦きる所か段々に演出も上手になって益々興味を深めていつて居ります。女性として変な自分であると思いますが、こんな女もあるという事で、何かの御参考になれば幸いです。

私は、ドサ廻りの剣劇女優でございます。狂言作者と云うと大袈裟ですが、次回興行の狂言を定めたり、新しく書き卸したりする男が、その参考資料として色々な雑誌を楽屋へ持ち込みます中に、奇譚クラブがありました。

普段、雑誌等縁に見た事もない私ですが、カブってから見るともなしに、ふと目にとまったのが、昨年九月号の「燃ゆる緋罌粟」でした。

川合様、何てお幸せな方でしょう。

実は私も、貴方の様にお腹に傷があるのです。或る田舎町で芸者に出で居りました頃、ふとした事から深間になった男と情死を企てた時のかたみなのです。

その頃、折角世話をして下さる方があつても、そのお腹の傷のため愛想をつかされてしまった末が、とう／＼旅役者の群の中に入ってしまったのでした。

御誌二月号、中康先生の記事を興味深く拝見しましたが、私も女長兵衛湯殿の場を演った事があります。又弁天小僧も度々演りましたし、東北の或る町で「女丸橋」を演った時など、井戸側に片足をかけて釣瓶の水を捕方にぶっかけて自分も半身ずぶ濡れになってしまった時、縛られて幕になる筈だったのに急に氣が変り、釣瓶を投げると刀を逆手に腹へ突立て、一文字に引廻してしまつていゝ氣持になりましたが、後で大カスを喰つた事がありました。

それ程切腹に憧れを持っている女なのでございます。

川合様の野薔や、草木瓜にもう少し筋を足してイタにかけて見たいと思つて居ります。職業柄、芸名も本名もお許し願います。梓由美子として置いて下さいませ。

本誌創刊七周年記念

懸賞入選作品 (四席)

悦 虐 回 想 録

魔 園 吉 年

——一男性マゾヒストの告白——

両親や弟妹に対してすら、ひた隠しに隠して居る醜態怪奇な性的倒錯者の秘密を、この様な形で赤裸々に告白すると云う事は、余りにも大きな勇気が必要とし、と云って之を終生の秘密として一生を孤独の中に懊悩しつゝ過す事は、之又余りにも堪え難き苦痛であると云うのが、私共異状性慾者に共通の偽らざる心境でありましょう幸に「奇譚クラブ」の如き異色ある雑誌が公刊され、私共にも容易に購読出来るようになったと云う事は、其れだけでも、私共にとつて何れ程の喜びであり、又慰めとなつて居るか、大方の想像を絶するものであると申すより他ありません。

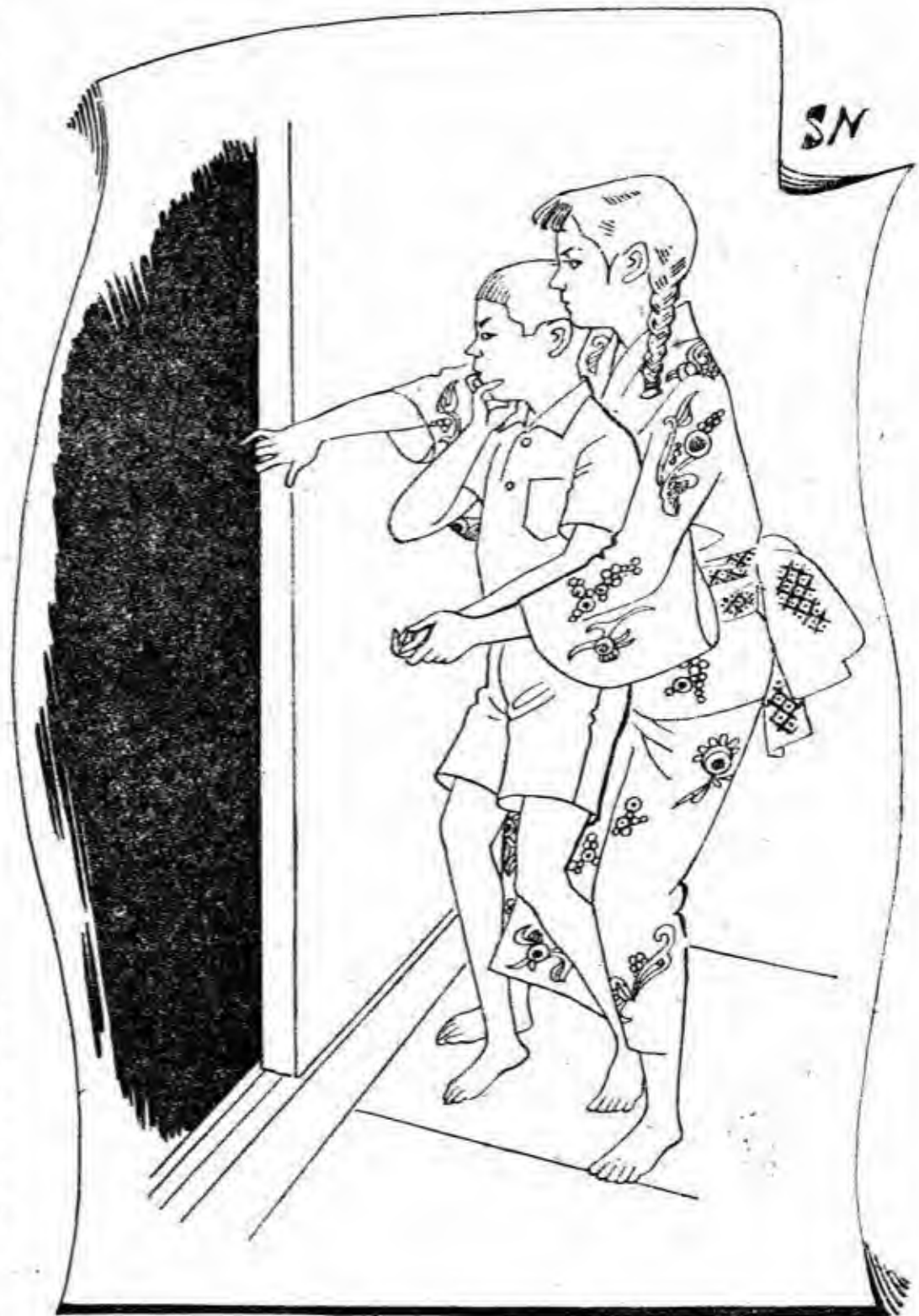
私が此処に拙文をも省みず、正に渾身の勇気を振り、敢て自己の浅間しき性慾に就いて告白をして見る氣になったのも、全く本誌の記事に励まされての結果に他ならず、更には之を一つの奇縁として

万が一にでも私の如きマゾヒストと御交際願える様なサド的女性が居られたならばと云う、淡い希望からに他ならないのです。

私は一九二〇年、東京の所謂中産階級としては稍々裕福な、併し可成り厳格な家庭に生まれました。私が臆てはマゾヒストとなる可き最初の原因は、此の両親に依る極めて厳しい躾にあったのではないかと思うのです。幼稚園から小学校に進んだ頃迄の事は、余り良くは憶えても居りませんが、大分悪戯したものを見て、屢々打たれたり、手足を縛られた儘暗い押入に入れられて泣いて居たりした事だけは、奇妙に思い出となつて今も残つて居るのです。フロイドなどを読んだりする様になつてからは、之にも一種の性慾的なものがあったのだらうと思う様にはなりましたが、當時は只恐ろしいだ

けの事だった様に記憶します。

私が多少なりとも性慾的なもののある事を感じる様になったのは、小学校も五六年になった頃からでした。即ち、誰でもが経験のある事ではないかと思うのですが、当時私達の間で流行して居た数多い「遊び」の中に「泥坊ごっこ」とか「狐ごっこ」とかがあったのです。そして此の様な「遊び」で何時もなり手のない泥坊や狐の役を、自ら進んで買って出たのが私でした。泥坊になれば結局は捕っ



女の子の小水を飲まされたりした事もありますが、私にとっては顔から火の出る様な羞しさにも増して忘れる事の出来ない楽しい思い出となって居ります。

私が早くも此の頃からアクティブであるよりはパッシブであり、苛められる方を切望する様になって居た事は間違いありません。尤も此の頃は未だ対象―加虐者―が必ずしも女性である必要はなく、寧ろ何れかと云えば気の合った男の子である場合の方が多かった位

て縛り上げられ、白状しろと云っては拷問を受け、最後には牢屋に入れられて御仕置を受けると云うのがその筋書だったのですが、此の様な遊びも、当時の如き思想・言論・出版等に対する狂暴且惨虐な弾圧が行われて居る世相下にあつては、さして不思議とも思われませんでしたし、私にとっては之が一種名状す可からざる快楽でさえあったのでした。

「狐ごっこ」とても又同様で、結局は、随分ひどい御仕置を受けるのですが、それが酷ければ酷い程、私の楽しみも又大きかったのです。或時など、私が例に依つて狐となり、近所の女の子が扮する御姫様を化かしたと云うので、本当の狐よろしく手足を一つに束ねて縛られ、細い竹の鞭で裸のお尻をピシ／＼と殴られた上、挙句の果には皆の見て居る前で其の

でした。

私の家では、毎年夏になると一家揃って海へ避暑に行くのを慣例として居りましたが、私が頂度小学校六年生の時にも学校が夏休みに入ると早々に、千葉県の或る小さな漁師町に出掛け、Sと云う網元の処に手頃な離れ家を一軒借り受けて、此処に一夏を過したのですが。此のSと云う網元に百合子と云う頂度町の女学校に上ったばかりの一人娘が居りました。都会の子供とばかり遊んで居た私は、初めて遇った時から、彼女の稍々大人びた見るからに健康そうな美しい姿態や、キビ／＼した動作、何物にも怯む事のない物言い、等にひどく心を惹かれ、強い思慕の情を抱いたのですが、一方彼女の方は生来の気性が人一倍勝気であつた上に、頗る我儘な一人娘として育つた所為か、私共の生活態度がS家の其れに比して非常に違つて居たと云う事や、殊に私が未だ小学生であつたにも拘らず一寸した英語や代数等をも知つて居たと云う事などが、痛くそのプライドを傷けたと見えて、彼女の方では最初から強い反感に満ちた態度で私に当り、何かにつけては意地悪をして私を苛めるのでした。勿論、例の癖で私は苛められれば苛められる程、マゾヒズムの原則とでも申しましょうか、却つて益々彼女を思慕する様になるのを何うする事も出来なかつたのです。

其れも初めの間は、精々泳げもしない私を無理やり海の深い所迄連れて行き、しこたま潮水を飲ませて面白がったり、砂に埋めて置いて抓ったり擽ったり、或いは蟹に頬べたや鼻の頭を挟ませて見たり、と云つた程度に過ぎなかつたのですが、その内に之が段々とひどくなり、とう／＼、私にとっては生涯忘れる事の出来ない様な出来事が、彼女との間に起つてしまいました。

其れは頂度夏祭りの始つた日の事でしたが、昼食を終つた午後、退屈さも手伝つて、私は子供らしい悪戯を思い付き、有り合せの出荷用荷札に「売り物、トン子」と書いて、こっそりと彼女の背中に附けたのです。勿論、後で之が露見したならば又々彼女から物凄く苛められるだらう事も充分予定しての事でした。と云うよりは、寧ろ専ら其れを期待して居たのだと云つた方が更に適切かも知れませんが、幸か不幸か其の効果は予想の域を遙かに超えて、恐る可き反応をしてしまつたのでした。

私は其の日、彼女が一寸した晴着を着て居る事などから、ひょつとしたら背中に例の荷札が附いて居るのも知らずに、その儘お祭に出掛けるような事になるかも知れないとは思わなくてもなかつたのですが、私の期待と予感とは恐ろしいばかりに適中致しました。

狭い田舎町の事ですから、背中に妙な札などをつけて外出しようものなら忽ち友達や近所の誰れ彼に見付かつて、散々に冷かされたであろう事は疑う余地ありませんでした。事実、彼女は夕方近くになつて漸くお祭から帰つて来たのですが、私は一目で彼女の怒り方が只事でないと云う事を悟つた程だったので。ところが不思議にも彼女は此の日に限つて一向に其れを口にも出さず、勿論私を虐めようともしないのです。実は此の間に彼女の恐る可き——前にも記しました様に私にとっては其れが又こよなき快樂でもあつたのです——周密な計画が廻らされ、私に対する御仕置の準備が進められて居たのでした。

彼女がどの様にして事を運んだのかは解りませんが、結局の処、其夜は大人達皆が揃つてお祭の見物がたら、所謂田舎芝居を観て来ると云う事に一決し、双方の父母達は早めの夕食を済ませると早々

に連れ立って出掛けてしまいました。彼女の申出に依って私達二人だけが留守居役となった事は申す迄ありません。

彼女は広い家の中に私達二人以外には人ツ子一人居なくなったのを見定めると、やおらキツとなって私に向い、

「吉ちゃん、あたし今夜貴方にはっきりと訊いて置き度い事があるんだけど、……吉ちゃんは今日あたしの背中に『売り物』だの『ト子』だのって書いた札を附けたわね。」

と、圧しつける様な口調で申します。誠に愚かな次第ですが、私は此の場に至って初めて彼女の深い企みと、其の恐ろしさを知ったのでした。

「うん、……ごめんね。……でも、まさかあの儘知らずにお祭に行くとは思わなかったんだもの。本当に、ごめんね、……ね。」

私は妖しい期待と異様な恐怖との錯綜から、妙に全身の痙攣するのをどうする事も出来ず、之だけ云うのさえやっとの事でした。

「だめよ、吉ちゃんは妾が田舎の娘だと思って、……何時だって人を馬鹿にしてるんだから……。」

「うん、そうじゃないんだよ。たゞ……。」

「駄目……。今日と云う今日は妾本当に恐ったんだから。……妾が本当に恐ったらどんな目に遇うか位、吉ちゃんだって知ってるでしょう?。」

「……………」

私は只黙って首肯くより仕方ありませんでした。

「そう、それだけ分って居るなら大人しく覚悟して妾の御仕置を受けなくちゃ駄目よ。だって、悪い事をした人が後になっていくら謝ったからって矢張り監獄に入れられるじゃないの。それと同じ事

だわ。」

私は彼女の威厳に満ちた口調や桜色に上気した美しい顔立ち、はては妖しい迄に輝くその魅惑的な眼差しに接すると、まるで恰かも蛇に見込まれた子蛙でもあるかの如く、凡てを観念し、彼女の足下にへたへたと崩折れてしまったのです。

「じゃあ、僕、百合ちゃんの御仕置受けるけど、……僕ほんとに悪かったと思ってるんだから、あんまり酷い目にあわせないでよ、ね僕、本当に謝るから……。」

「御仕置の受け方に依つてだわ。どっちにしたって妾は妾の気が済みさえすればいいんだから。……さあ、こんな処で愚図々々してなんか居ないで、早くこっちへおいでな。」

彼女は私の手をとって立上らせると、背後からしっかりと両の腕を捉え、引立てる様にして奥の土蔵へと連れて行くのでした。

痺れるような興奮と息詰るような不安との為に、物を云う事はおろか満足に歩く事すら出来なくなってしまう私は、彼女のふくやかな胸の中にしっかりと抱きかかえられる様にして、恰かも処刑場に引かれて行く死刑囚の如く、よろ／＼とよろめき乍ら、長い渡り廊下を渡って奥へ奥へと連れられて行きました。此の渡り廊下の突き当りが直ちに一段高い石畳となって居り、其処が重い大きな鉄の扉のついた土蔵——即ち彼女が私の為に用意した「苛責の部屋」——の入口だったのでした。

彼女は背後から私を押し込める様にして土蔵の中に入ると、先ず静かに鉄扉を閉めて之に鍵を降し、次いで其の内側にある之又恐ろしく頑丈な造りの板戸をもびったりと鎖してしまいました。鉄扉を

閉める時の「ギーッ」と云う鈍い重々しい音。鍵を降す時の「ガチン」と云う痛い様な金属音。板戸をたてる時の「ゴロ／＼」と云う無気味な音。……寂寞たる土蔵の中一杯に広がっては消えて行く、其の虚ろな響を耳にしながら、次々と去来する不思議な妄想を追って居ると、私には「若しや自分は此の儘本当の氣狂いになって仕舞うのではないかしら？」などと思われて来るのでした。

でも、其の様な妄想も長くは続きませんでした。いや、寧ろ其の様な妄想が愈々現実となって現れたと云った方が一層適切かも知れません。

「ピシッ！」

と云う、鋭い音がすると同時に、私は肩から背にかけて、恰かも鋭利な刃物でも切り裂かれるかの様な激しい痛みを感じたのです。見れば彼女は一本の鞭

―それは多分釣竿の折れたものではなかったかと思いますが―を手に私の背後から振り被って居るのです。

「ほんやりしてちゃ駄目よ……。其処へお坐りって云って居るのに」彼女はこう云い乍らも、矢継ぎ早やに第二第三の鞭を振るって、無理矢理に私を仄暗い電燈の下に連れて行き、其処へきちんと正坐をさせると、さて、おもむろに「御仕置」の宣告を下すのでした。



「吉ちゃん、お前、よくも妾にあんな恥をかかせたね。今度こそは、妾も氣の済む迄、それこそ思いつ切り御仕置して上げるから、その心算で覚悟を決めとくといいわ……。えゝと、そう／＼、後になって変な逆怨みなどされない様に、先ず、証文を書いて置いてもらうの。文章は妾が云うから、お前は其の通りに書けばいいのよ。よくって？」

私はぶる／＼と慄えながらも仕方なく黙って首肯き、与えられた紙と鉛筆とで、彼女の云う通りに証文を書かされました。一寸でも間違えたり聞き直したりしようものなら、それこそ忽ちにして彼女の鞭が喰りを生じた事は申す迄ありません。勿論、其の文章たるや如何にも幼稚で且くど／＼しいものであった事は云う迄ありませんが、現在、私が憶えて居る限りで、其の内容を記して見ますならば、大要次の様なものではなかったかと思ひます。

しよう文

ぼくは何時も百合子様に対して悪い事ばかりして居ましたが、今日は背中にとてもひどい悪口を書いた札をつけて、百合子様を死ぬ程困らせました。だから、ぼくは百合子様からどんな御仕置をされても、それは当り前です。だから、ぼくは百合子様からどんな目に遇わされても、決して逆怨みなんかしませんし、又誰にも云いつけたりなんかしない事をゲンマンします。

新庄百合子様

魔園吉年より

署名の所に「より」と書き加えるのは一寸可笑しい様にも思いましたが、之も彼女の命令で書いた事を不思議と今でもはっきりと憶えて居ます。ゲンマンとは所謂「指切りゲンマン」で、子供同志の真面目な約束には必ず之が行われたものでした。

兎も角も、私が漸くにして証文を書き終るや否や、彼女は更に、「大事な証文なんだから、お前は其処に血判を捺すのよ。いゝこと？」

と云い乍ら、手にした鞭を投出すと、早くも私の左腕を捉えて小脇に搔込み、其の小指をしっかりと握り緊めるのです。見れば、何

時の間に用意をしたものか、彼女の右手には頭部に綺麗な赤いガラス玉のついた留め針が冷たく光って居るのです。

「いゝこと？」

彼女は威厳に満ちた態度で今一度念を押すかの様に云うと、矢庭に針を取り直し、堅く握り緊められて赤黒く充血した私の小指をめてかけて、ズブリ／＼と突き刺すのです。

「アッ！ ウッ！ い、痛たッ！……」

飛び上る様な鋭い激痛を指先に感じた……と思うと、見る／＼うち、其処から真紅の血潮が噴き出して、それ／＼幾つかの丸い小さな珠を作り、其れ等が次第に大きくなって行つて、臍では小指の腹一面が真赤な血潮で彩られ、そして遂には其れが一条の赤い尾を引き乍ら、ポトリ、ポトリ、と床の上に散って行く――。

私は滴る血潮よりもまだ熱い涙をポロ／＼と零し乍らも、じっと之をこらえて居ました。私にとっては其の痛さ、つらさ、悲しさ、……にも増して、名状する事の出来ない、妖しくも不可思議な官能の快楽が五体を駆け巡って居たのです。

「さア！ 早く――何を愚図々々してるの！ そっちの親指につけて――ほら、こうするのよ！」

彼女はこう云い乍らも、素早く私に右の手を出させ、其の拇指を捉まえると、さも心地よげに小指の血潮を塗りつけ、有無をも云わさぬうちにベツタリと例の証文に血判を捺させてしまふのでした。

「フフ、これで証文が出来たから、今度は愈々お前のお仕置をするの。覚悟はよくって？……あら、お前慄えて居るの？……まあ呆れた。いつもあんなに生意気な癖に！ へえーんだ。今更そんなしおらしい振りなんかしたって、騙されなんかなくてよ。さ、いゝか

ら早くお立ち！」

彼女はいきなり私の耳を掴むと、如何にも邪慳に、グイと引張って、無理矢理に私を立上らせませす。

「そう／＼。そして裸におなり。そのシャツもパンツも皆脱ぐのよ。……まあ、ほんとにお前ったら、どうしてこう愚図なんだろ！もう少し男らしくしたらどうなの。……ふん、ちゃんと証文まで書いたくせに！……妾の云うことが素直にきけないんなら其れだけ余計に痛い目を見てよ。ほら、いゝこと？」

彼女の手にした鞭が「ヒュッ」と云う鋭い音を立て、空を切った……と思うと又しても矢つぎ早やに鞭の雨が降り注ぎ、其の度に私の肉体は火花が出て居るのではないかと思う様な激痛に身をふるわせずには居られませんでした。彼女の命令通り裸になったからとお仕置が益々激しくなりこそすれ、決して許してなどもらえない事は重々承知し乍らも、其れが人情の浅はかさでも云うのでしようか。私は現に打ち下されつつある鞭の呵責を、それこそほんの瞬時でもよいから逃れ度いと云う、只其れだけの願望から、私はおど／＼し乍らもシャツを脱ぎパンツを脱ぎしてとう／＼裸になつてしまいました。

「それ御覧な。どっちみち妾の云う事はきかなくちやならないんだから、云われた通りさっさと脱いだらいいのよ。小生意気な態度なんかしたら岬から海ん中へ突き落してやるから！——わかって？」

「——」

私は彼女の鞭に依って刻みつけられた真赤なみみず脹れのヒリ／＼と痛む感觸を、さもいとおしむかの様にそっと撫で擦り乍ら、黙って大きくコックリを致しました。息も詰る程の異様な恐怖と羞

恥と興奮との為に声が出なかったのです。

「そう。じゃあ、今度は妾、お前の体を縛るんだから、——神妙にお縄頂戴しなくちゃ駄目なことよ！」

こう云い乍ら、彼女は早くも細引を手にして私の背後にまわりま

す。

「さ、手から先よ。」

彼女は私の両手を後ろに捻じ上げると、両の手首を合わせてしっかりと押えつけ乍ら驚くばかりの器用さと厳格さとを以てキリ／＼と縄を掛けて行きます。両の手首がヒシ／＼と括り上げられると、次にはその縄を首に廻して息の根も絶えるばかりに引き絞る、更にその先を手首に巻きつけてから、今度はそれを胸や腹へと廻すのです。私は之だけでもその痛さ苦しさと思わず。

「ウ、ウッ」

と呻かずには居られなかったのですが、難て彼女は一方の縄尻を前に廻し、之を首縄から腹にかけて縦に通すと、そのまゝ片足を私の肩にかけ、グイグイと力一杯に其れを引き締めるのです。首縄が胸の方に引き下げられるに従って、左右の首筋が恰かも焼火箸を押し当てられた様に痛むのは勿論、背中に釣り上げられた両腕の骨が今にも崩れ、今にも手首がモリ／＼と音を立て、千切れてしまうのではないかと思う程の激烈な痛苦に、私は到々たまりかねて、

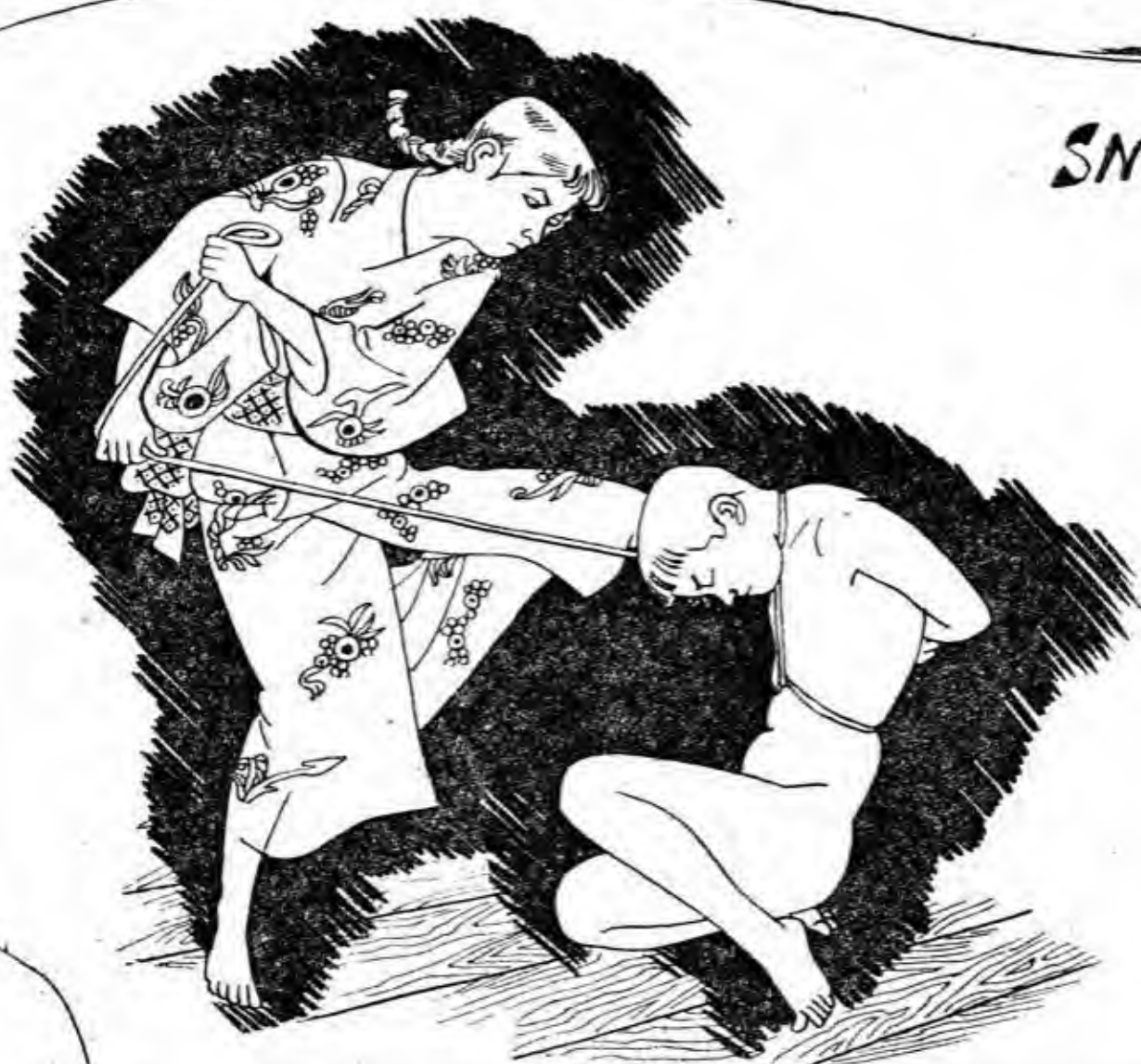
「ア。アーツ、」

と悲鳴とも絶叫ともつかぬ声をあげてしまいました。

「弱虫ね。何さ！ この位のこと。いゝえ、駄目よ。まだ／＼これからなんだからッ。——大きな声なんか出したら承知しないわよ。

——あ、そう／＼、お前みたいな弱虫の泣き虫にはこうしてあげる

SN



方がいゝんだわ。」

彼女はこう云い乍ら矢庭に帯を解き、ズロースを脱ぎとると、無理矢理に私の口に押し込み、其の上から之又今解き捨てたばかりの三尺帯を当てがって、頗る碎けんばかりに固く猿轡を嵌めてしまったのです。

それは私にとって何と云う強烈な、そして恐ろしく又奇怪な快楽だった事でしょう。後手に釣り上げられた両の手首が今にももぎとられるかのように痛むので、つい身を振らせれば、忽ち胸や腹に掛けた縄目がギリ／＼と肌に喰い込んで苦痛は益々激しくなるばかりなのですが、それにも拘らず私は矢張り藻掻かずには居られないのです。而も両頬に焼きついてしまったかの如くに思われる程ひし／＼と固く締められた猿轡の苦しさと言ったら、それこそ例え様もありません。口腔は勿論鼻口迄もがキツチリと覆われて居ますのでさなきだに苦しい呼吸は、痛苦に悶えれば悶える程、益々堪え難い責苦となって今にも悶絶せんばかりです。ほんの僅かに許されたこの猿轡を通しての切ない呼吸も、彼女の味と香りとを堪能させる為にのみ用意された様なものでした。

「ウフフ、苦しい？ いい気味だわ。——でも駄目よ。妾のお仕置はまだ／＼これからなんですもの。」

小麦色の裸像を誇るかの如くに、縄尻をとって私の前に立ちほだかった彼女は、まばゆいばかりの美しさに溢れ、そのキラキラと輝く眼差しには漸くにして南国の太陽を思わせる妖しい情熱と、秋水の凶刃を思わせる冷酷な意慾とをまぎ／＼と露呈して居るのです。余りの苦しさ切なさと思わず眼

を閉じれば、如何にも单调なそれでいて不気味な波の音が、村祭りの鄙びたうら悲しい笛や太鼓の響をさえ乗せて、何処からともなく伝わって来るのでした。ふと気がついて見れば、私は自分自身ですら其れが何故なのか一向に解らない不思議な感情の昂ぶりに、只ひたすらにとめどなき涙をポロ／＼と流して居るばかりだったのでした。私は今自分がどんなにか情ない浅ましい姿にされて蠢めいて居るか考えて見ました。滲み出た脂汗でテラ／＼と光る全身が、堪え切れぬ苦悶に怪しく波を打つ様は、どんなにか奇怪な可笑しい見世物であった事でしよう。

でも、彼女の御仕置は少しの猶予をも許す事なく、どん／＼と進められて行くのでした。

「さあ、お立ち！」

凜とした彼女の命令に、私はよろ／＼と立ち上り、縄尻を引かれるまゝに、傍の太い大きな柱へと導かれて行きました。私に対して彼女が何を意図して居るのかと云う事は最早や明白でした。事実、私の予期した通り、彼女は

「其の柱に向って大人しく立って居るのよ。」

と云い乍ら、早くも余った縄尻を使って私をグル／＼と柱に括りつけるのです。仄暗い電燈の光にもはつきり其れとわかる程上気した彼女の美しい顔色と、ハア／＼と云う息使いとを身近く意識し乍ら、私は次に来る可きものは恐らく鞭の雨だろう位に考え、その程度には一応の覚悟をもって居たのです。併し、間もなく私は彼女が実はもつ／＼周到で且冷酷な計画を廻らして居たのだと云う事を知らされねばなりませんでした。何と、彼女は此処で私を針の山に押し上げようとして居たのです。

彼女は私を其の太い柱と抱き合わさった様な、奇妙な恰好に確かりと括りつけてしまうと、驢て何処からか沢山の剣山——生花、特に水盤などに多く用いるあれです——を持ち出して来て、先ずその幾つかを私の足下に並べ、

「サ、此の上にお乗り！」

と命ずるのです。如何にまだ／＼子供だとは言っても、自分の全体重を鋭い針の上で支えるのですから、到底堪ったものではありません。一度は彼女に足を捉えられて詮方なくおす／＼と片足を乗せたのですが、途端に私は高手小手に縛られた不自由な身を振って迄之を逃れ、厳しい猿轡の下からではあってもあらん限りの声を振り絞って絶叫しないでは居られませんでした。尤もこの悲鳴が声にならない事は勿論、わずかに猿轡を洩れて出る。

「クッ、クッ」

と云うかすかな呻き声すらも、彼女の嗜虐性を益々掻立てる以外には、何の効果もありませんでした。

業を煮やした彼女は狂気の様になって鞭を振って居ましたが、驢て今一本の細引を取出すと素早く私の左足首にその一端をグル／＼と巻きつけ、嫌でも応でも例の剣山に乗らなければならぬ様にして其の儘し／＼かりと柱に括りつけ、固定してしまいました。次で右足も又之と全く同様の運命を辿らされた事は申す迄ありません。

「クッ、クッ、……」

私は骨も砕けるかと思うばかりにズブ／＼と突き刺さって来る針の痛さに、只もう身も世もならず呻き悶えるばかりでした。その辛辣極まる疼痛は、頂度恰かも灼熱してドロ／＼になった熔岩が両の足先から体内に注ぎ込まれるかの如くであり、更にはそれが全身を

逆流するに従って、私の肉体は生き乍らに次々と焼き落されて行くのではないか、等とさえ思われる程の激しいものだったのです。

而も、彼女の恐る可き嗜虐性は益々募りこそすれ、些かの衰えすらをも見せず、懐惨苛烈な此の夜のお仕置は、他ならぬ彼女自身の正に天才的とも云う可き加虐方法の創造(?)に依って、更に一段と其の酷烈さを加えて行くのでした。

彼女は、私が最早殆んど半死半生の状態で切ない苦痛に悶え蠢いて居る様子を、いとも冷やかに見下し乍ら、それでも暫らくは依然としてビシビシと例の鞭を振って居ましたが、臆てふと思いついたかの如くに、残って居た剣山を取り上げると、細い絹紐を用いて先ず其の一つを私の胸の処に、次いで今一つを同じく腹部に、夫々其の鋭い針先が哀れな犠牲者の肌に当る様に加減し乍ら、しっかりと括りつけられて居る柱に固定してしまいました。

彼女に依って次々と加えられるこうした責苦が、どんなに苛烈を極めた恐る可きものであったかは、只身を以て体験した者のみの知り得る処と云う可く、到底筆舌の及ぶ処ではありません。

縄・鞭・狼轡・剣山……之等は全てが一見極めて平凡な、云わばごくありふれた責道具に過ぎないのですが、一度び彼女の手にかゝると、そのしたたかに打ち下す鞭のリズムに従って一箇の精密機械でもあるかの如く、次々と連鎖的に作動して行つて、其の悪魔的とも云う可き苛責作用の機能と効果とを最大限度に迄發揮するのでした。而もこの恐ろしく多角的且有機的に働く「連動加虐装置」は絶えず哀れな被拷者を駆立てて嫌でも次の新しい責めを触発させずには置きませんから、其の徹底的な苛責は、当の責め手たる彼女が自らの意志に於いて之を中止しない限り、瞬時の絶える間もなく無

限に継続するのです。此の恐ろしい責苦から逃れる為、哀れな犠牲者たる私に残された唯一の道として、……あゝ、それこそは私が断末魔の苦痛を経て遂に悶絶し、最後のカタストロフに陥る事以外の何物でもあり得ませんでした。

而も、彼女に依る御仕置は益々そのビツチを挙げ、苛烈さを加えるばかりなのです。

「ビシッ！」

と云う、得も云われぬ不気味な、鋭い音を仄暗い土蔵一杯に反響させ乍ら、仮借なき彼女の鞭が、剥き出された私の後背部に吸い附いて来る度に、私はそれがどの様な恐ろしい結果になるのかという事を充分に承知して居るにも拘らず、どんなに一生懸命に泳いで見ても、つい思わず身を慄わせずには居られませんでした。そしてそれは忽ちにして針の山に立たされて居る両足のさなきだに耐え難い激痛を、何層倍かに増大する事とならざるを得ないので。もう、斯うなれば「苦しみ、呻き、悶える事」それ自体が自分自身の意志等とは全く無関係に、凄まじい勢いでグン／＼とその激しさを増して行つてしまいます。

余りの苦痛にツイ身を反らせば、高手小手に縛められた縄目が一層強く引緊まって、今更の様に身にこたえるのは勿論、反射的に突き出された腹部へ突き刺さる剣山の針は、宛ら灼熱した焼き鏝をでも押し当てられたかの様に、言語に絶する激烈な疼痛を引起すのです。と云って、逆に身を辣めよう等としようものならば、今度は之又全く同様の責苦を胸部に受けなければならぬのです。而も之等の苦痛と苦悶とは夫々が相互に触発し合つて、無限に循環し継続するので、その凄絶さは正に形容の限りではありません。

併し乍ら、之等の正に言語を絶した苛烈な責苦にも増して、一層苦しく且切ないのは例の猿轡でした。口一杯に詰め込まれたその上から、頭も砕けんばかりにキリ／＼と緊め上げられた此の猿轡は、その他には別にこれと云って何をされると云う事もなく只其の儘で静かに放置されて居るだけでさえも、ものの数分とは経たぬうちに早くも全身がカッカッと灼熱し、タラ／＼と滝の様な脂汗が流れる程に息苦しく切ないものですが、其の上に上記の如き凄まじい責め



折檻が間断なく加えられるのですから、其れこそ堪ったものではありません。今にも胸は張り裂け脳髓が砕け散ってしまうのではないかと思う様な恐ろしい苦痛——而も其れは皮肉にも、他ならぬ其の苦しさに堪えかねて身を藻掻けば藻掻く程、益々激しくなるばかりなのです。

死の恐怖——そうです。私は正に此の時、猿轡を嵌められると云う事が如何に恐ろしい責苦を意味するものであるかと云う事をつく／＼と知らされたのです。それは勿論、死其のものに対しての恐怖というよりは、何とも云い様のない苦悶それ自体に対しての恐ろしさであり私は之を逃れる為には寧ろ一刻も早く最後のカタストローフに陥落する事を自ら願った位でした。而も私には此の「最後のカタストローフ」悶絶への逃避すらも許されませんでした。何故ならば先ず第一にはそれが如何に堪え難き苦しみであったにせよ、兎に角極めて僅か乍らも、かすかに呼吸が許されて居たからです。口一杯に詰め込まれた彼女のさるぐつわがじつとりと湿って来るので、私が狂わしいばかりに身を悶え乍らも、絹糸の様に細いかな呼吸をすると、その度に、

「クー、グズ／＼ッ」

と云う奇妙な音を立てるのでした。而し、此の切ない呼吸によって、兎も角も生命だけは保たれたのです。

第二には、彼女の打ち振る残忍な鞭を始めとする、例の「連動加虐装置」です。誠に矛盾した云い様に思われるかも知れませんが、私はこの為には何時も、そして常に新しい且痛烈な刺戟と苦悶とを味あわなければなりません。次々と瞬時も停まる事のない凡ゆる苛責を加えられ、遂には精も根も尽き果て、ぐったりとなつて、あわや最後のカタスローフにと思ふ瞬間、彼女の鞭は又しても新しい苛責と苦悶との開始を私に強いる可く、哀れな奴隷の官能をいやでも再び恐ろしい現実の世界へと呼び返さないでは置かないのです。

言語に絶する残忍酷烈な彼女の御仕置は、斯くして何時果てるともなく続けられるのでした。而もお恥しい話ですが私はその内に、余りの苦悶に堪えかねた所為もあってか、所謂「生理的要求」に迫られて来たのです。まかり間違つて仕置柱に括りつけられた儘、粗相などしたら——それこそどんな事になるか知れないのです。断末魔の苦悶に喘ぎながら、私は思うともなしに父母や弟妹の事、東京の懐しい家庭生活や学校の事、等を次々と走馬燈の様に思い浮べるのでした。

頂度其の時でした。寸毫の容赦もない苛責の下に、殆んど生死の間を彷徨しつゝあった私の耳に、悲しくも又鋭い上り列車の汽笛が聞えて来たのです。

「あら、九時の上りだわ。もうそんな時間になるのかしら？」
 こう云い乍ら、彼女はこの時始めて苛責の手を休めたのでした。

見ればほんのりと紅潮した彼女の肌も、流れ出る汗にテラテラと輝いて、神々しいばかりの美しさです。何と云う威厳！ 何という美しさ！

私は全く無条件で彼女の前に——いや、更には凡ゆる全女性の前に——全身全霊を挙げて屈服せざるを得ませんでした。私の奇怪な性慾、即ち完全なマゾヒストへの転生とその出発とは正にこの時此処に決定してしまつたのです。

「まだ／＼勘忍なんかないわよッ！」

彼女は私を柱から解き乍らもこう云うのでした。

「お芝居のはねるのは十時過ぎなんだから、こんな事位で勘忍してもらえなんて思つたら、それこそ大間違いよッ。」

私は漸くの事で例の柱から解かれ、針地獄の責苦からだけは許されたのですが、後手首縄高手小手と云うむごたらしい迄に緊縛された縄目の苦しさは勿論、最も切ない猿轡も依然として許しては呉れないのです。私はせめて先刻からの生理的要求だけでも彼女に訴えたいと思つたのですが、声は勿論呻き声すらも満足に出せません。私は必死の努力で、ともすればバタリと倒れそうなよろ／＼する体をひきずるようにして、彼女の前に正坐し、コツ／＼と額を床に打ちつけて哀願の意を示さなければなりません。

「ふん、何か妾に御願いでもあるの？ そう。そんなら一寸だけ外してあげるから、泣きべそなんかかゝないではっきり云うのよ。勿論謝つたつて勘忍なんかないからッ！」

彼女はこう云い乍ら、おもむろに猿轡を外して呉れました。頤を締め挙げている扱帯が解かれると、鼻口を蔽つて居た彼女の黒いズロースの一端がだらんと私の口からぶら下る……と同時に私は漸く始

めて楽に息をする事が出来るようになったのです。此の時の生き返った様な気持、——楽に空気を吸う事の出来る身の有難さは何に例え様もありません。

「さ、なあに？ 早く云ってごらん！」

私の口からダランと垂れ下ったズロースを無難作にズル／＼と抜き出してしまうと、彼女は事も無げにこう云って私を促すのです。私は直ぐにも答えようと焦ったのですが、恰かもガーゼを抜きとった時の傷口の様に、私の口や頤は妙に麻痺してしまつて居り、僅かに低い呂律の廻らない口調で

「お、おしっこ」

と云うのがやつとでした。

「あら、大変、一寸お待ち！ 粗相なんかしたら承知しないから——あ、そう／＼、こうすればいいわ、ウフフ……」

彼女は始め一寸狼狽したかの如くでしたが、其れもほんの瞬時で忽ちさも面白い事でも思いついたかの様に、私の縄尻を執つてクルクルと手繰るとそれを首縄の処に搦め、急いで例の御仕置柱から、剣山を縛りつけてあつた絹紐を取つて来るのです。どうせ逃れる事は出来ないのだと思えば、例えこれから又どんな目に遇わされようと、只観念してそれを待つばかりです。

「フフツ……こうすれば粗相する心配もなくつてよ。ほらネツ……」

あゝ！ それは何と云う恥かしさであつた事でしよう。彼女は羞恥に身を悶える私を、無理矢理押えつける様にし乍ら、例の絹紐で………。而もそればかりではありません。事もあるうに、彼女は他ならぬその絹紐の長くのびた他の一端を手にしてやおら私を引立てるのです。

「さあ、愚図々々しないで早くトットとお歩き！」

彼女に絹紐をとられ、よろ／＼と引かれて行く私の姿が、読者兄弟にも大方の御想像はつく事と存じます。一体何れな犠牲者が縄尻をとられ、引立てられてゆく、状景等と云うものは、古今東西を通じてそれこそ無数の描写が示されて居り、絵画、写真、文章、等、其の種類も又極めて多種多様である事は、今更くど／＼と述べる迄もない処ですが、ドイツ及びフランスで出された極く小数の秘密出版物を除いては、斯くも浅ましく、斯くも屈辱的な方法を示したものは、寡聞にして今日に至るも未だに知りません。この一事を以てしても、私は彼女が如何に天才的なサディスティンであつたかと云う事を想起し、讃嘆しないでは居られないのです。

さて、私は正に此の如き、いとも奇妙な、それこそ何とも形容の出来ない様な、浅ましくも又恥かしい姿に括り上げられた儘の恰好で、灰暗い土蔵の中を何回ともなくグル／＼と引ずり廻されなければならなかつたばかりでなく、其の間には絶えず、今は完全なる淫虐の妖姫と化した彼女に依つて、思い出しただけでさえも目が眩み顔が赤くなる様な、ありとあらゆる凌辱を加えられるのを、唯只管に甘受しなければならなかつたのです。

私は此の時の事を、恰かもつい昨夜の事ででもあるかの如くに、生々しく且明瞭詳細に記憶して居るのです——と云うよりは、寧ろ忘れる事が出来ないと思つた方が、より適切であるかも知れませんが、今此処に其れを詳記するのは、さすがに些か恥かしいばかりでなく、之は又現行法規の上から云つても、到底許されない処であるうと思ひますので、此処のところは只々諸兄弟の御賢察に任せ以下には其の極く一端のみを略記するに止めなければならぬと、

云う事を御了承頂き度いと存じます。

兎に角、其れは凡ゆる想像の限界を遙かに超絶した、此の上もない強烈な、刺戟と官能との坩堝であつた、と申しても決して過言ではありません。今、其の一、二を摘記して見ますならば、先ず何と云つても例の絹紐です。細く柔らかな一本の絹紐が、どんなにか恐ろしい、そして又不可思議な責道具としての役割と効用とを示すものであるか？——大変失礼な云い分かも知れませんが、体験なき諸兄弟には到底想像も及ばない処ではあるまいかと思うのです。

彼女の巧妙極まる操作に依つて、例の絹紐が或いは引かれ或いは弛められるに従い、私は、どんなに堪えようとしても堪える事の出来ない激烈な苦痛と、其れにも増して強烈な官能の疼きとに責め苛まれるのをどうする事も出来ないのです。而も、私は此の責苦を自らの肉体の、それも或る限られた一部分を通じてのみ、いやと云う程に堪能させられなければならぬのでした。

否、其ればかりではありません。此の様な恥かしくも又恐ろしい責苦に加えて、其の間には、之又殆んど絶え間なしに物凄い唸りを生じては例の鞭が飛んで来るのです。

そうでなくても我慢の出来ない程に尿意を催して居る処へ殊更に其れを刺戟する様な彼女の責め方、……そして鞭。之等が如何に素晴らしい「責め」の効果を發揮したか、そして又之等が如何ばかり辛辣な疼痛と怪しからぬ快楽とを私に齎したか、——諸兄弟には今更クダクダしく記述する必要もない処であらうと存じます。



更には又、彼女が其の美しい輝くばかりの皓い歯で、私の身体中を——それこそ処構わずに——咬み廻すのも、私にとっては此の上もなく強烈な刺戟であり、快樂でありました。頸、肩、胸、腕、……と、到る処へ次々と彼女の鋭い歯型が刻み込まれて行く度に、私は身体中が彼女に依って今にもズタ／＼に食い裂かれてしまうのではないか？ とさえ思われる様な激しい疼痛を感じ、其の凄まじい苦悩には文字通り七転八倒して身を悶えなければならなかったのですが、其処には又同時に、ノルマルな人々には到底理解する事の出来ない狂気じみた奇怪な快樂——私の如きマゾヒストにとっては、この上もなく、其れこそ正に痺れる様な官能の愉悅と其れへの耽溺と——が存在して居るのでした。

勿論、私にとっては、彼女に依って歯型をつけられると云う事其れ自体が既に——其の激しい苦痛にも増して——一つの大きな快樂であつたのですが、例えば、妖しく上気した彼女の激しい息使いが私の肌を撫でる時のかすかではあるが恐ろしく強烈な刺戟や、同じく其の全身から発散される噓せかえる様な惱ましい芳香、そして更には、彼女の甘く柔らかで且火の様に熱い唇のヌメ／＼とした例え様もない官能的な触感、……等々。数え挙げれば殆んど限りがないのですが、之等が混然一体となつて醸し出す、一種異様な官能、得も云われぬ妖しさと云うものが、如何に凄まじいものであつたか私の筆力を以てしては到底書き表わす事が出来ないと云う事を、只々情なく思ふばかりです。

併し乍ら、実を申しますならば、右に記して参りました様な、之等諸々のお仕置『其の悦虐的体験』は、まだ／＼生易しい、謂わば「序の口」とでも云う可き程度のものに過ぎなかつたのです。です

から、私の此の拙い告白も、本来ならば此の辺りからこそ、漸くに精細の度を加え、其の描写も又ヴィヴィッドなものとなつて行く可き処なのでしようが、今は残念乍ら寧ろ逆に、思い切つてその筆を控えなければならぬのだと云う事を、重ねて御諒承頂き度いと存じます。

尤も、其れだからと云つて、之を全く書かないと云うのでは、余りにも身勝手な一種の「思わせ振」のお考えになるかも知れませんが、私としましては、「物云わざるは腹ふくるるわざ」とやらで恐らくは、後々何時迄も、心残りとなつて致し方ない破目に陥るのではないかと懸念されますので、此処では其れ等の中でも、とりわけて記憶に生々しいものの一つ二つを採り上げ、其れ等に就いての極く大雑把な梗概を、其れも出来るだけ簡単に、摘記させて頂く事と致しましょう。たとえ、其れが如何に莫然としたものであつたにしても、いわば九牛の一毫にも等しい以下の告白に依つて、此の時の状況が幾分なりとも御賢察頂けますならば、誠に幸甚と申すより他ありません。

偕て、今更改めて申し上げる迄もない事とは存じますが、彼女に依つて次から次へと課せられる御仕置の余りにも激しい苦悶と、其の例えようもなく強烈な羞恥との為、私は此の時、もう既に、まともにはじつと立って居る事さえも出来ない程、力無くぐったりとなつてしまつて居たのですが、彼女の方では之に引き換えて、其んな事には一向に頓着しないばかりか、恐る可き其の御仕置は益々苛烈の度を加え乍ら、それこそ際限もなく続けられて行くのでした。

而も、之等が終始一貫、常に新しい、そして又常人には想像だに及ばない様な、物凄い刺戟と興奮と苦痛と快樂と……、そして更

には此の上もない被凌辱感の極致とを伴うものであった事は申す迄もありません。

即ち、彼女はいとも邪慳に私を引立てると、又しても例の御仕置柱の処へ連れて行き、此処で其の夜に於ける最後のそして最大の呵責を試みようとするのでした。

「さ、此処へお坐り！愚図々々なんかしてると堪忍どころかおしっこもさせてやらないから……」

彼女の命ずる儘に、私が柱を背にして跌坐をかくと、恰かもそれを待ち兼ねて居たかの様に、早くも長い細引が胸や腹に掛け渡されその儘キリ／＼と締め上げられて行くのでした。彼女が細引を引絞る度に、私の体は嫌でもグイ／＼と柱に密着して行くのです。そして、其れは長時間——とは云うものの、実は精々二三時間に過ぎないのでが——の厳しい緊縛に依って、今はもう殆んど感覚すらも無くなってしまつて居た両の手首や腕からは首繩に至る迄の凡ゆる繩目が、又しても今更の様に新しい激烈な疼痛を呼び醒さずには置きませんでした。

いや、其ればかりではなく、こんな事はまだまだほんの序の口だったのです。彼女はこの様にして先ず私の上半身を、其れこそ文字通りかすかな身動きすらも出来ない様に厳しく柱に括りつけてしまふと、そこで暫くはさも愉快そうにうっとりとした様子で、浅ましくも又哀れな私の姿を眺めて居りましたが、臆て彼女の手にした細引は、思いもよらない様な方法で私の両足をもからげてしまうのでした。（尤も、其の方法と云うのは、少くとも奇クの読者に関する限りは、決して未知のものではない筈です。と云うのは、つい最近号の口絵で滝麗子氏がいみじくも之を図示して居られるからに他な

りません。）即ち、それは左右の膝頭、太腿、足首、等に繩を掛ける場合、常に必ず仕置柱の裏側を通して之を掛け渡すのです。恰かも踏みつぶされた蟻蛙が無残な姿でのぞけて居るかの如くに、左右の足を引き開けられ、堪え切れぬ苦悶に呻いて居る私の浅ましい姿を御想像下さい。頤と胸とを突き出し、腹を引いて、少しでもこの苦しみを緩めよう、と云うのが私の空しい努力であり、苦悶の姿態であつたのです。

さて、読者の諸兄姉がこの時の彼女であり、或いは私であつたならば、次にはどんな情況を御考へになるでしょうか？ 彼女は例の絹紐の効用と云うものを忘れては居りませんでした。彼女は之を私の首に巻きつけると、その緊張度を加減し乍ら、しっかりと之を結んでしまつたのです。

「ウフフ、これで準備完了よ。……さあ、お前みたいな小生気な子には、斯うしてやるッ。」

彼女はそう云い乍ら、世にも哀れな姿に括り上げられて身動きすらも出来ないで居る私の方に近附いて来るのです。

此の瞬間に、生涯を通じて二度と再び脱け出る事の出来ない、いとも醜怪なる狂氣の泥沼へと溺れ込んでしまつたのでした。

「齒を出すんじやなくてよ！間違つても妾に噛みついたりなんかしたら、其れこそ承知しないからッ！」

勝ち誇つた様な口調で次々と下される彼女の命令は、その一つ一つが何れも明かに次いで起る可き事態をはっきりと見通して居るものでした。私が、必死になつて藻掻き呻かざるを得なかつた事は申す迄ありません。そして其れは必然的に——遅かれ早かれ——何時かは必ず彼女に対して私の齒が触れるのだと云う事を運命づけられ

て居るのでした。

しかも、之に加えて首縄に引き結ばれた例の絹紐が何と云う素晴らしい効用を示した事でしよう。此の世のものとも思われぬ恐ろしい苦悶、そして其れよりも更に激しい悪魔的な快楽——私は到々堪りかねて彼女の肉体に歯を当て、しまいました。

「あっ、あ、痛た、——ようし、やったわね。——そんなら……」

彼女は縄飛びに使う長いゴム紐を持って来ると、

「さ、ペロをお出しッ。出来るっただけ出すんだよ。——ほら、も」とだてばさ……」

と指図をし乍ら、手にしたゴム紐を私の舌に巻きつけると、之又御他聞に洩れず其の余りを後ろの柱にと廻らすのでした。云うなれば之も一種の猿轡であるかも知れませんが、此の様な責めの方法は恐らく彼女の独創であって、諸兄弟の誰方と雖も未だ御経験の無い処ではないかと存じます。勿論、此の方法は加虐者たる女性が被虐者たる男性に対して施す時に於て特に著しい効果を發揮致します。無理矢理に附け根まで引き出された儘固定された舌の為に、彼女……が歯の攻撃から完全に護られるばかりでなく、突出された舌そのものが……更に重要な役割を果し得るからなのです。

◎ 告白記の募集 ◎

- 一、別記の懸賞とは別に月例通り皆様の真実あふれた告白記を募つておりますから、どしどしお寄せ下さい
- 一、文章の巧拙や長短、用紙、書き方等一切御自由です
- 一、投稿者の本名や其の他の一切の個人的秘密に関する事は厳重に秘匿いたします。誌上への発表は匿名で結構です。
- 一、誌上へ掲載した分は掲載後相当謝礼を差し上げます。原稿は御返戻申し上げかねますが、係よりの連絡は差し上げます
- 一、原稿の御送付には開封の上第五種郵便百瓦まで八円にて御願ひ致します

(編集 部)

はないかと思ひます。

「今夜はこれだけにしといて上げるけど、之からは毎日御仕置だから其の心算で覚悟をおし！」

彼女はこう云い乍ら始めて縄を解いて呉れたのです。今はもう起上るだけの力すらもなく、死人の様にぐったりと崩折れ乍ら、自身でも訳の解らない涙を只ハラ／＼と流して居ると、村芝居の打出しを知らせるあの妙にうら悲しい太鼓の音が、遙かの彼方からかすかにかすかに響いて来るのでした。

(完)

何れにせよ斯うして、長い／＼奉仕から漸くの事で解放された、と思うと其れもほんの束の間、彼女は更に徹底した、いやらしくも又浅ましい凌辱を試みるのでした。それは、諸兄弟も既に御推察の通り、私が彼女専用のチエンバーポットにされたということなのです。それは嘗て奇クに連載されて好評を博した鬼山氏の「らぶ・すれいぶ」にも屢々此の様な描写がそれも私などには到底真似も出来ない様な素晴らしい筆致で示されて居りましたが、私の経験からするならば、あの様な直接的方法是実際に試してみると中々困難なので

Das Grausame Weib

▽ 残虐なる女性達 ▽

—1901年刊行の独文絵入単行本より—

森 本 愛 造・訳



十九世紀の中頃まで公式に行われ、非公式には猶、其の後もつゞいて奴隷制度が容認されて居たのは土耳其である。此処でも亦、男女の奴隷は通例はアメリカに於けるよりは残虐にはなかったとしても、矢張り、屢々最も洗練されたやり方でハレムの所有者（サルタン及び貴族達）の妻妾達によって虐待された。

私達がこうした事例を次々と発見するにも

拘らず、トルコでは女性の持つ特有の社会的地位の為に、こうした記述は公刊されず、非公刊であっても猶、余り公開されなかったの、例証はすべて嚴重に隔離されたハレムから僅かに洩れた報告と、後述する特別な人達によって齎されたものである。併し、判別する事の出来る資料からだけでも、充分に奴隷虐待の分布状態についての多くの結論が得られるのである。

ハレムの内部については吾々が特に社会的な地位から云ってもトルコ家庭の内部に入っていく事が出来るか、さもなれば、トルコのハレムの内部の事情を西欧に知らせる事を目的としたトルコの高貴な階級に属する婦人達の記録を手に入れるかでなければ、其の真相を知る事は出来ない。

トルコの婦人達の加虐欲望についての有益な説明が、あるトルコ夫人の自伝の中で述べられて居る。この婦人は一八五〇年前後のトルコのハレムに於ける未だ幾分かは原始的な状態を記している。彼女は其の自伝其の他で、埃及のヴィーゼ王の妃メヘナツドリアリスなるナズリーハーヌムの酒宴につい

て報告をして居る。

——前略——其の間二、三人の若い女奴隷が踊って居たが、彼女達はみずからスペインの娘達がやる様に、カスタニエットで伴奏しながら踊った。その踊りが余りに永かったので、部屋の中で侍立したまゝ一寸も動いてはならない奴隷達の中の一人が疲労の為に床の上へドツと倒れた。その様子を一寸見ても彼等が夜、幾晩も不眠不休で仿かされた事が判るのだったが、本当は彼等はこの激しい労仿に一寸でも疲れている素振りすら見せてはならないのだった。若しそんな様子が少しでも現れた時は、女主人達は少しの容赦もなく、傍らに常に備えつけてある象革の鞭を振うのだった。女主人達はこれまで屢々奴隷達をそうした理由で鞭で打ち殺した事があったのである。

更に、メレーク—ハーヌムの次の様な証言は、その不評判な一般的表現（之はすでに余りにも特殊な事例を挙げて一般的結論を出すという点で学者達に屢々指摘された実例であるが——訳者）によって重大な事実を伝えている。

女奴隷は自分自身の置かれている地位が如何に惨めなものであるかを、一流の家庭内に

於て常に感じる様に取り扱われる。殊に女奴隷が上流の婦人達の居るハレムに入った時は、その立場は全く非道いものになるのである。

女主人達のやかましく騒々しい歓楽の場に居合わせ、少しでも楽しい筈の彼等は、常に不動の侍立を命ぜられるのであった。（此の「不動の侍立」はメタトロピクな要求の中で最も極端な一例である。犠牲者はこゝでは風景の一部に化するのである。人間の家畜化が既に確立したこれらの特殊社会では、人間の無生物化の慾求が一つの具象的なものとしてこの「侍立」となって表現される（訳者）女主人達の全くの気紛れから、彼等は自ら、又は宦官の手によって、奴隷達を乗馬用の革鞭（之は恐らく現在の犬鞭の如き型式であつたろう（訳者）及び河馬や象の革で作られた鞭で血塗れにする様に鞭打つのであった。

（猶、是等の革鞭は当時、甚だしく荒い馬、牛、豚、犬、及び象や河馬等の特に激しい苦痛によってしか統御の出来ない動物達と、奴隷懲戒用に幾つもの結び目を持ったり、又刺を植えたりしたものを特に製作させた事が某書に出ている——訳者）

トルコの夫人達の楽しげな残忍性について

猶多くの事例を提出する事は容易であつてもそれは省略してよいだろう。というのは、上述の諸例からそうした筆者の希望する結論をひき出すに十分な論拠が、少くとも土耳其の上流夫人達の間には実証されたわけであるから。

（訳者註、此處で訳者が不思議に思うのは筆者が土耳其といふ乍ら埃及の例をのみ引き出す事である。筆者は明かに「エロズロ」という言葉を用いてはいるが、之は一八〇〇年代の報告である以上、「回教諸国」という意に解すべきであらう。因に、回教諸国の激しい熱氣と、顔唐の文化とは甚だしく殘虐な好血性を惹起させ、ひいては鞭の様な用具を優美な芸術品的な取扱いをなし——アラビア諸国の革鞭は一本一本細かい裝飾で掩われたものが多い。——その使用法も亦、芸術的に鋭いものであつたろうと思われる。只、訳者の如きSTIEFELFETISCHの傾向の者にとって、STIEFELの現われない事が残念であるにしても、熱帯諸国の一般的なサディズム分布はマゾヒストにとって憧憬を感じさせる。）併し乍らトルコ（及びその勢力範囲）に於ての諸記述については今迄、多くの記録がその内容に余りに多くの幻想的な要素を附加し

ている。私達の此処に求めるものは美しい千一夜の夢ではなく、事実の報告である。勿論、私はハレムの生活や、高貴な婦人達の残忍性について、多くの書籍を読破したが、勿論幻想の基底に存する現実は無視してはならないにしても、それ等が伝説的な豊麗さを過剰に持っている事を考えねばならなかった。

ロシアに於ての諸例は余りに有名であつてそれが実例であるか、幻想であるかを疑う余地は極めて少い。(つまりロシアに於ける残忍な婦人の多数の実在については事実と見做してよい——訳者)他の国々に於ては全く疑わるべき様な記述の大部分が、実際の事件の真面目な記録である事についての年代記作者や歴史上の証明は圧倒的な迫力を持っている。

私は此処で再び(エカテリナ女王の如き)女帝達の残虐な行為については述べるのを遠慮しよう。というのは、其の事実の例証は第一章に於て述べたし、又ロシア女帝達の言動についての報告が今迄女のサディズム研究書の内容の過半を占めて居るからである。男爵達ですら、その妻達に激しい鞭の懲戒を受けた事などはどの本にも書いてある事だからで

ある。

奴隷制が、この権力に服したものの法的な人格を直ちに抹消するものではなかったにしても、法律的な意味での物件であろうと、奴隷(農奴を含む)であろうと、単に主人達に自由の一部を制限される人々であろうと、日常生活に於て、奴隷的な取扱いを受けたという事は間違いのない事であつた。

ロシアの辺境の国家、殊にリーフランドに於ける文明の恥辱とも云わるべき社会状態は博愛主義者メルケルを動かし、彼は西欧の人々の眼を開かせたのであつたが、彼はその著書の中で述べて居る。

「多くの貴族の婦人達は劇場で下らないセンチメンタルな芝居を見てはさめと泣くのだが、劇場でハンカチを持って涙を拭いた同じ手で、鞭を振り、召使達をつまらぬ理由や慰さみの為に血が出るまで引っ張たのであつた。又、一七九四年の夏、Hという夫人はシャツのたゝみ方が悪かったと云つて一人の下女をひどく鞭で打つたので、下女は半時間程の間失神して起ち上れなかった。」

ヴァリスツエフスキの報告も驚異的な事実を述べて居る。

「メツクレンブルグの公爵夫人カタリイナ・

イワノヴァが或時、某国の大使(ベルグホルフ)の会で或る悲劇の上演に立会つた時の事であつた。芝居の途中で彼女は大使に、笑い乍ら、劇中で王様を演じた男は自分の奴隷で、上演の前に激励する為に、二百回程革鞭で打つておいたと語つた。

又、マツソンはロシア婦人について次の様に述べて居る。

「私はロシアでは人間がどんなに嫌らしい方法で取扱われるかについてすでに承知しては居たが、その実情を見て、残酷な方法での懲戒を一目見ただけで、私の感情は凍てついた時々夫人達が平然と奴隷達に課する激しい罰を一秒間でも直視して、不快と驚愕とに耐える為には、私は身体を硬直させていなければならなかった。而も、婦人達が、自ら太い鞭を握つて懲戒するのを見る事は更に嫌悪の情をわかせるのであつた。私は丁度食卓についていたが、女主人は若干の小さな誤ちを犯したという科で一人の下僕を冷血にも、且平然と当り前の様に百回も太い鞭で打つ様に命じた事がある。男は庭や、控えの間で、婦人や娘達が喜んでお茶を飲み乍ら見て居る前で喚き叫び乍ら血塗れにならねばならなかった。私はロシアで婦人達が、一般に男性達よ

りも加虐慾望に於て立ち勝っており、邪惡であり、野蠻である事を觀察した最初の人間ではないが、これは婦女が男達よりも無教養で迷信的である事に由来して居ると考える。」

(以下著者註)

こゝでマツソンは誤って居る。加虐慾望とその実行に対して教養や哲学は決して解毒剤にはならない。社会のどの階層にも残虐な女達は居るのであり、残虐行為を行う機会があるところに、最も多く居るのである。後で、その話が出て来るがシュネルガリーブランドとエストランドで蒐集した見聞を特に参照せられたい。

「侯爵夫人K——KYは凡ゆる罪科、憤怒の激発、及び破廉恥な行為の権化と云えよう。人々は彼女が男達の衣服を脱がせ、面前で鞭で打たせ、冷やかに鞭数を数え、もっと強く打つ様に命ずるのをよく見たのである。又、彼女は飲酒して相当に銘酩して居た時、一人の奴僕と一人の下女を連れてきて、下女に命じて奴僕を全裸にし、柱に縛りつけ、犬を下女に追い廻らせて奴僕に喰いつかせた挙句、犬を追って居た犬鞭で下女に激しく鞭打つ様に命じた。其の上、彼女は自ら犬鞭をひたくり、奴僕の生殖器に思いきり強い鞭を

つゞけざまに当てたし、又ローソクに点火して男の頭髮を焼き、同時に彼女は甚だしい性的満足を感じたと記録されている。彼女が彼女の下女に対して加えた刑罰も亦、同じ様な性質のものであった。そうして下女の鞭刑に際して、刑の執行者としては常に下男が扱われるのであった。夫人は下女を一糸も残さず脱がせた上、先ず鞭を加え、下女達の震えている乳房を大理石の卓子の上にねかせ、自ら乗馬用、又は犬用の鞭でその最も敏感な部分を激しく鞭打つのであった。私はこうした犠牲者の何人かに会ったが、その中の一人は夫人の犬鞭によって不具にさせられて居た。而も其の上、夫人は彼女の口に両手をさし込んで唇を裂いてしまったのである。私はこの怪物的な夫人に公爵の称号を与えた。というのは私は彼女を敢て「女」と呼ぶ事は出来なかったからである。彼女は四〇才で異常に大きく、太って、元氣潑潑として居た。更に私はロシア宮廷でもう一人の女性について述べよう。

彼女は、寢室の中に一種の暗い牢を持って居た。その中に彼女は奴隷の一人を飼って居た。奴隷はカツラを作るのが仕事であって、彼女は現在、婦人達が外出するのに丁度反射

的に櫛を取り出すのと同じ様な無関心さを以て、奴隷を引き出して、髪を結わせて用がすむと再び牢の中へしまっておくのであった。大抵、小さな誤ちの故に、彼女の手は奴隷の頬を打ったし、遠乗りの前等は、勿論手にした乗馬鞭が喰るのであった。奴隷は、牢の中に一片のパンと一杯の水と小さな長椅子と尿瓶とを持って居る事を許されて居た。彼の主人は実は頭が禿げて居たので、その禿げを巧妙にかくす仕事をする間だけ、彼は陽の目を見る事を許されるのであった。この大小屋の様に持ち運びの出来る牢は、始終彼女の寝台の枕元に置いてあり、彼女は自ら田舎へ行く時は、この牢ごと送り届けさせるのであった。夫人の良人は、妻のこの野蠻な行為を恥かしく思つては居たが、忍んで居なければならなかった。奴隷は三年間この牢の中に飼われて居た。そして、表に解放された時、奴隷の様子は此の世のものとは思えない程にひどいものであった。

青白く背が曲り、老人の様にちよまって居るのであった。こうした、異常な残虐の主因は、この処女とも呼ばるべき夫人の「禿げをかくしていたい」という慾望に他ならなかった。その原因の為に彼女は平然と奴隷の一人

(前述の奴隷は当時十八才であつた!)の一生を地上から抹殺したのであつた。その上、付言せねばならない事は、その奴隷が脱走しようとした時と、彼が如何に技術の最高を以てしても年毎に衰えてゆく女の容色を補う事が出来なかつた時とに与えられた、残忍極まる鞭刑である。彼女は全く巧妙に長い鞭を操つて奴隷の全身に血をにじませたのであつた。』

マツソンの提供した資料は以上の通りである。

明らかにサディッシュな傾向に富んで居た或る地主の妻は彼女の所有物である子供達を斬つたり、不具にしたりして楽しんで居た。彼女は或る時、その理由を訊ねられたが、その返事に、『私はたゞたのしく、退屈しのぎをやつてみたいのさ』と云つたと記されている。

広く流布されて居る他の諸国の奴隷の状態の中から、次に色々な報告を紹介しようと思ふ。

(訳者)是から彼は、北欧及びスラヴ諸国についての諸例を挙げ始めるのであるが、此処に訳者は二、三、必要と思われる説明と共にロシア及び北欧諸国のマゾヒスティックな例

証と、その心理的な解明とをさせて貰いたいと思う。そうして、此の部分で、之から次々と記述されてゆく驚くべき歴史の裏面が、如何にマゾヒスティックな人々の読物として充分な感激を呼び起すかについて、その関連せる諸例を引用しておきたいと思う。之は、私が本書の翻譯に當つて、一寸書いておいた様に、マゾヒスティックな文献の中で最も簡明に、且つ集大成したものにしたから他ならない。其の故に私は個人的な秘密を守つて、その個人の一切の特定条件が判別されない様な方法で、現代日本に於ける女性加虐、又は男性被虐の全ゆる写真、資料等を時々併記してゆき度いと思う。私はこの乱雑な長つたらしい文章が何か、世のマゾヒスティックな性愛癖を有する方々の性愛の補助になり、其の上、望むべくんば、自分自身夫々の在る性愛上の位置を知り、常に人生の快樂の重要な一部門である性愛に於て、少しでも快樂を増加し、而もそれが社会的に秩序を乱さず、平穩裡に行われる事を切に祈つて止まないのである。

補助文献 ①

マグヌス・ヒルシュフェルト博士著「性愛分析学」より、第二卷、第二四七頁より。

女性に踏んだり、蹴つたりされる事に、性的な愛好を感じる傾向は、通常打たれる事を好む様になり、惹いては病的に女性から鞭打たれる事を希む様になる。その形式は当初は女性の手によって肌を直接打つて貰う事から始まり、奴隷用の革鞭や、生徒矯正用の笞や鞭で打たれる事によって一つの行為を監視される事を希むに至る。そうして、家畜の様に犬鞭や乗馬鞭で打たれる事を求め、更に別の形では、長靴を穿いた婦人に踏まれる事にまで慾望を感じるのである。有名な性的拷問室への着想は、之等の拷問具によってなされた其処には、全ゆる種類の鞭打用の器具、刺傷を与える為の用具―例えば女性が男性に対して其の上に坐る様に強制する一種の有刺布団―等のおびたゞしい種類の拷問具が用意されて居る。時には之等の偏愛者の皮膚に対して鋭い刺激を与える特殊の化学薬品が発見される事がある。

私が或る時診察を依頼された一人の男性は絶食を強制された為の斑痕が身体中に発見された。彼は自分自身で自ら身体を傷つけたのであつた。其の為、灼鉄による刺激の跡が発見された。之等は、共に彼に性的な楽しい満足を与えるのであつた。私は、同時に同様の

性愛の方法が、隅なく一般に行われて居る事を知った。又、或る三十才の商人は愛する女性によって、（而も其の行為の間中彼女は冷酷無情でなければならぬのであったが）半裸体になって少女の服を着る事を強制される事によって永い間性的満足を得て居た。最も一般的になった此の種の性愛の方法について更に一例を挙げよう。

それは猿轡及び馬用の轡についての实例である。轡——殊に馬用の場合——歯と唇と舌とが通常性交の場合の性器対性器との結合による快感と同一の結果を持たらすと云う前提に基いている。従って、轡は常に受動的にのみ施されるのである。之は当然征服的な方法によって行われ、その作用の仕方は被動的な面での咬みキスやフェラチオに酷似して居る。

皮膚への加虐は、皮下出血を招来するので——即ち鞭打、咬傷及馬勤等の方法——之等メタトロピステイクな方法も亦、性愛の一つのグループを作成するに至る。そして之等の特殊な行為は嗅覚や知覚に対して特別な関連を持って居る。

——以下略——

上述の翻譯は勿論、加虐性愛の方法に対する一つの紹介と心理上の関連について重要と

考える。

補充資料 ①

マグヌス・ヒルシュフェルト博士著「右と同書」第三巻、第六十七頁より、（崇拜症）

非常に多くの場合特に注意すべきは、愛好する対象（この場合靴 SCHUH）の形状である。その個人々々によって半長靴に対して特殊な反応を示すもの、乗馬用長靴について反応を示すもの、更に旅行用長靴、折返しといった長靴、紐付、又はボタン止めの編上長靴及、特に胴の長い（股にまで革が捲くもの）乗馬用長靴等について、夫々特殊な反応を示すもの等がある。何れにせよ彼等はその愛好する種類の対象を精神内の浄化によって、高雅に尊崇すべきものと化するのである。

更に素材に対する極めて嚴重な愛情によって、フェティスムの方向の相違は目立ってくるのである。多くの場合布製の靴は形状の如何を問わず対象とならない様である。特に愛好者の多いのはエナメル塗り、即ち光沢の極度に強い革製の長靴である。

この二つの相対する愛好の間に存在するものが、皮革製、牛革、其の他の革類によって作られた靴が位置するのである。

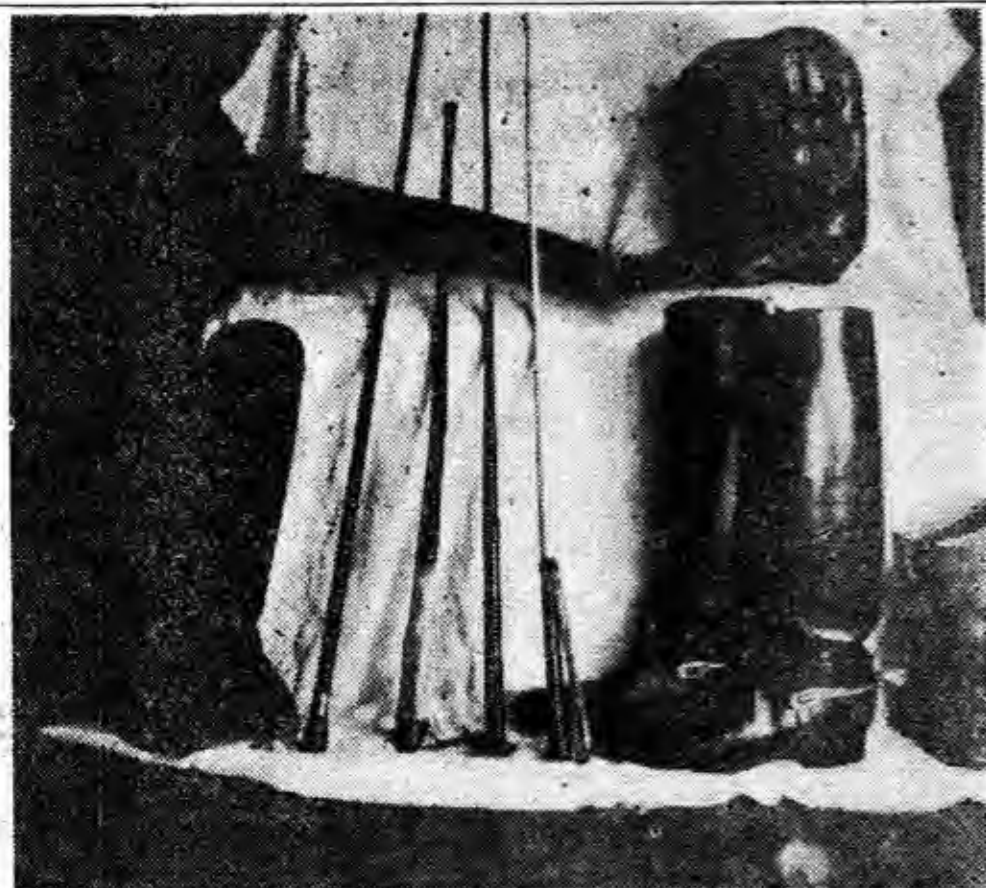
某馬化狂の性的實道具 1

性的乗馬前戯に用いられる拍車のいろいろ、立てかけてあるものはねかせてあるものと同じ対のもの。左から、女性用小型拍車、男子、女子共用拍車の同じく横窓式止革、縦に並んでいるのが左から二本宛対で一九二五年頃の女子用拍車に用いられたもの、次の二組と最右端のものは通常のもの、長いのは横窓式に用いるもの、横窓式に用いるもの、横向は現代用の女子用拍車の止め革らしい。



某馬化狂の性的賣道具 ②

向つて左より、下段、硬革婦人用乗馬長靴。鯨芯の編み鞭、藤芯の編み鞭。これは犬に使うもの、握りは鹿の脚で出来ている。革製乗馬用鞭、鉄芯麻巻乗馬用鞭、男子用乗馬長靴及拍車、女性用遊歩用、又は無台用半長靴、上段左より、軟革男子用乗馬靴西部スタイル女子用乗馬用半長靴。勿論、性的鞭打其の他の諸加虐行為に用いられたもの。



「或る性的知識の殆んどない少女についての報告があるのでそれを紹介しよう。」

彼女は或る士官と結婚したが結婚生活後一年にして離婚訴訟を提起した。彼女の夫は彼女にいつも云ったという。即ち、自分の愛好する（性的な行為の為に用いる為の——の意）長靴はいつも真黒くしておかねばならぬ。そうして其は、どれでも長い脛と高い踵を持って居なければならぬ。そうして、小さな円い黒くピカ／＼光るボタンで止めるものがよろしい。そうして、何時も彼にとって長靴についての話は好ましいものであった。（女性のそれをはく時には）長い靴下とズボンをはく事が必要だったし、其等も亦黒いものでなければならなかった。其様な服装をした女に彼は皮紐できつく縛って貰いたかったし、女が革のバンドをしっかりと締める事を欲した。性行為の時こ

の少女はコルセットをつけ、長靴下をはき、高い踵のついた長靴をはかねばならなかった。

そうでなければ彼は嫌がったのだ。態位は常に女上位であった。彼女は云っている。以前私は性交に際して、彼の四肢を革紐でしばりつけ、オールド・コロニエをすり込み、私のはいている高い踵のついた長靴で、彼を踏んだり、蹴ったりせねばならなかった。そこで私は、自分の母に一切を打明けた。

斯様にメタトロピストは女の脚、ひいては女の脚につける靴に対して明白な重要さを感じるのである。

つまり、靴に対する愛好は屈從慾の現われであると考えられる。かくして、靴愛好は愛好者自身に対して強制力を持ち、屈服の快感を与えるものに対する憧憬の表現であると考えてよいであろう。

以上の如く、ヒルシュフェルト博士は述べている。私はこゝに手許にある資料の中から二枚の長靴愛好者によって作製された写真を参考に提供しよう。

（未完）

×

×

×



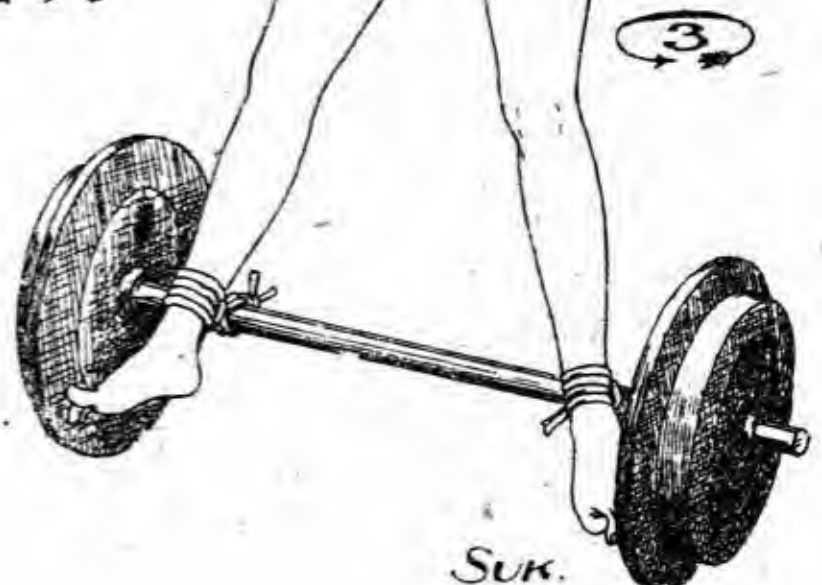
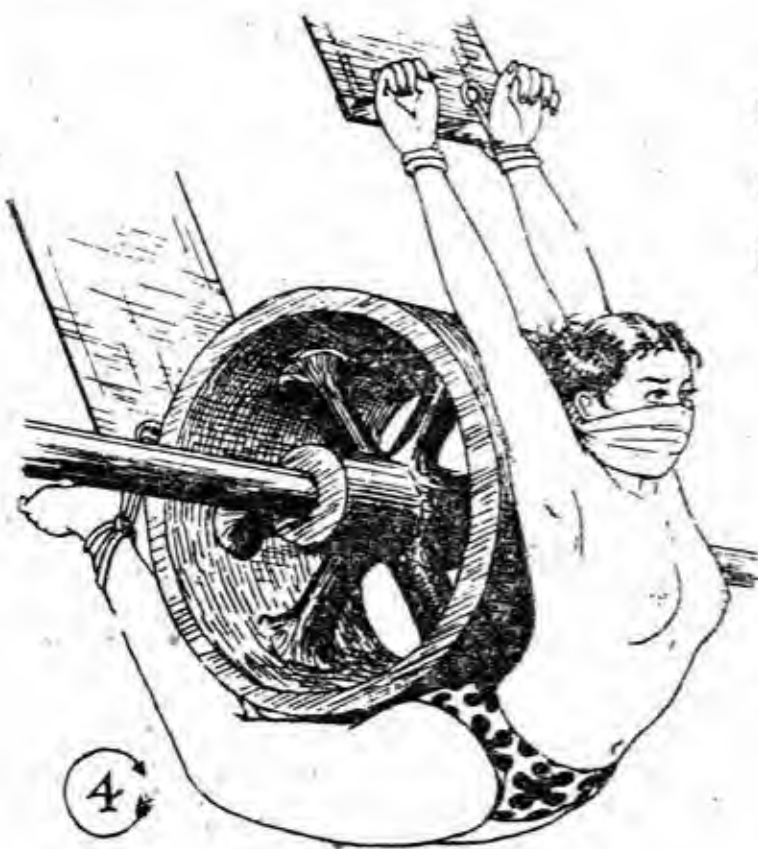
人間は平衡を失うと恐怖を感じます。併しそれに馴れると却って興奮を覚えるものです。幼児を高く差し上げて揺ぶってやるとよろこぶのもその一つの現れです。今月は一っ麻理公を思い切りふり廻してやりましょう。

—これは失礼。申し遅れましたが黒髪以来、皆様にあられるのない姿を御覧に入れていますこの少女は麻理と申しますどうか可愛がってやって下さい。

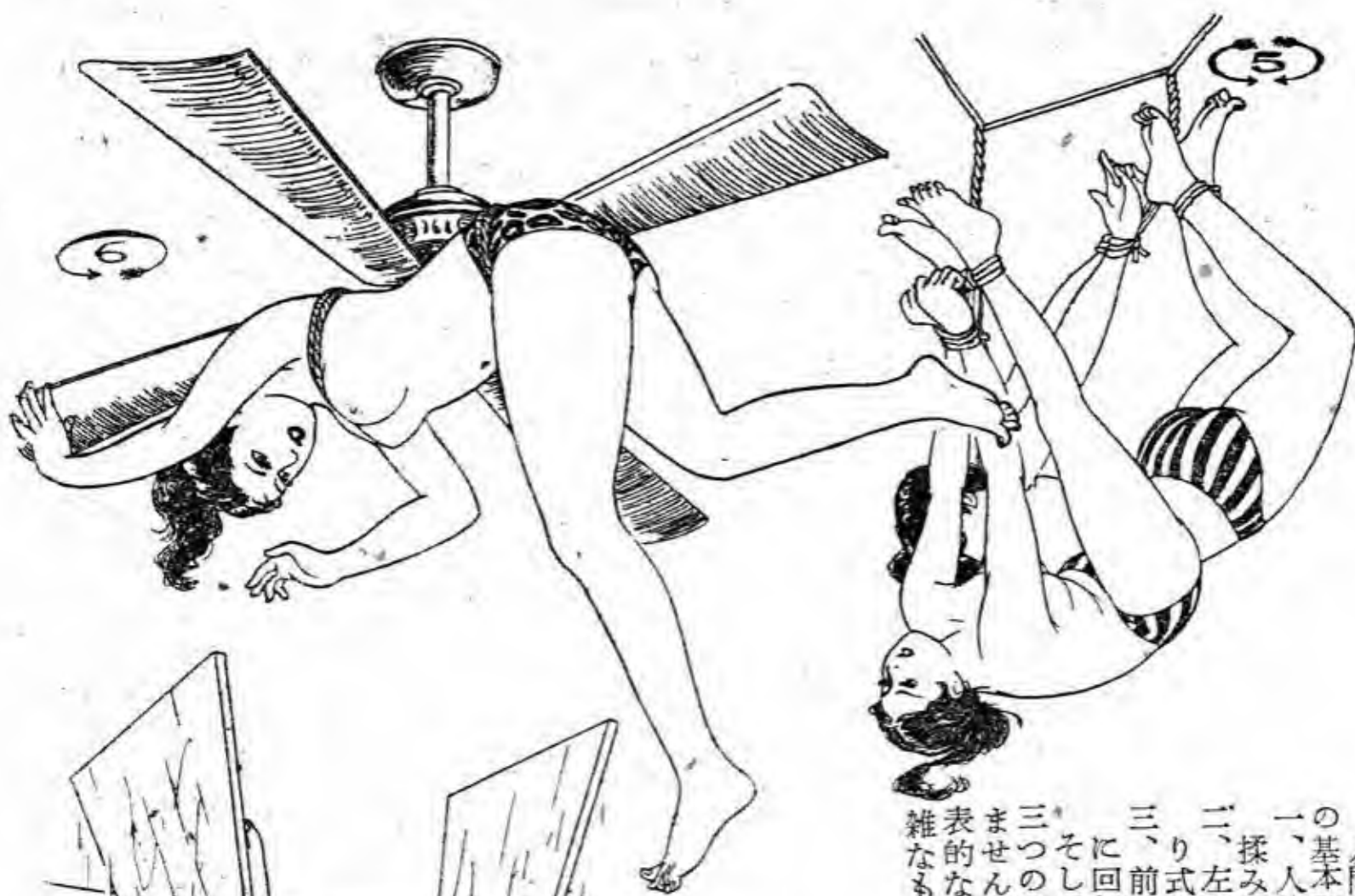
回 戯 画

轉 亭 数 久

文 並 画

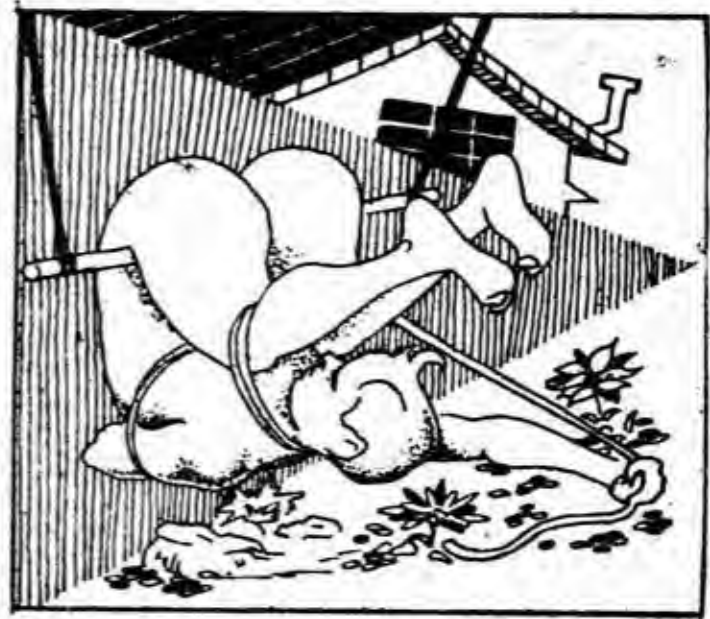


SUK.



人間を回転させるには三つの基本型が考えられます。
 一、人体の上下を軸として錐採み式に回転させる。③⑤⑥
 二、左右を軸としてとんぼ返り式に回転させる。①④⑦
 三、前後を軸として横倒し式に回転させる。②⑤⑥⑦⑧
 そしてあらゆる回転はこの三つの応用乃至綜合に外なりません。こゝに挙げたのは代表的なものです。まだまだ複雑なものが考えられます。





責繪に憑かれた

男の秘密日記

青柳謙次

(KK通信才四号に一部発表)

×月×日 晴

今日はいよいよ僕達、青年団が遺家族慰問の為の演芸会の日だ。稽古は一カ月前からして居たが、自信がない！まして此の僕が女形になるんだから、いやになっちやう。プログラムが進行して、いよいよ私の番が来た。芝居の題名は「縁切れ柳」私の名はお玉ちゃん！舞台裏で本式の顔づくり、衣裳着付の人達から、顔、胸そして手の指先までベタベタと白粉をぬられ、かつらを冠らされ衣裳を着せられた僕。着付の女が「まあ、なんてよ

く似合うのでしよう。この人にだなんて、思わず赤面しちゃった。そんなによく似合うのかと鏡台を覗くと、美しい女性が微笑んでいる。よく見ると僕の顔だ。しやなりしやなりと舞台に出ると物凄い人気！のぼせ上って台詞を間違えちゃった。舞台では此の美しい僕に三人の青年が恋をするんだけど、でも此の三人、白粉で顔を奇麗にして居るけれど、本当は美青年ではないので、いやになっちやう、デブにチビにそして背高ノッポ、おまけに揃いも揃ってニキビ面。僕の憧れる様な好男

子だったら、舞台の上で本当にキッスもし物凄くサービスも致しようと思ったに、実に残念！それ以来僕は「お玉ちゃん」のニックネーム。

×月×日 雨

朝からシトシトいやな雨だ。昼になってもやまない。母と姉は久しぶりで母の実家に行った。夕方から町の常会で父は留守、兄はただ会社から帰って来ない。

「よし今だ」とばかり家風呂に飛び込んだ僕は、一度湯をあびてから風呂場の隅にあぐらを組み、その両足首を縛り全身を二つ折りにして、その縄尻を首に巻きつけぐと強く引きしめた。海老責にしたかったのだ。でも足首がほんの少し浮いただけで、体の中心を失った僕はその場に、仰向けに転んでおまけに風呂場の柱で、いやという程頭を打ちつけてしまった。「アツ痛たッ」一人では駄目だ。海老責の自虐をあきらめた僕は、なんとかして奇抜な拷問で、我が身を責めたいと思う。先ず左手を背の後に廻して荒縄を右手でグルグルと裸体に巻きつけ、その縄尻で更に胸部に廻して喉にも巻きつけた。身動きも出来ぬ心よい緊縛感が物凄い勢いで全身を駆けめぐ。僕は更に親指程の太さの棒切れを、両股

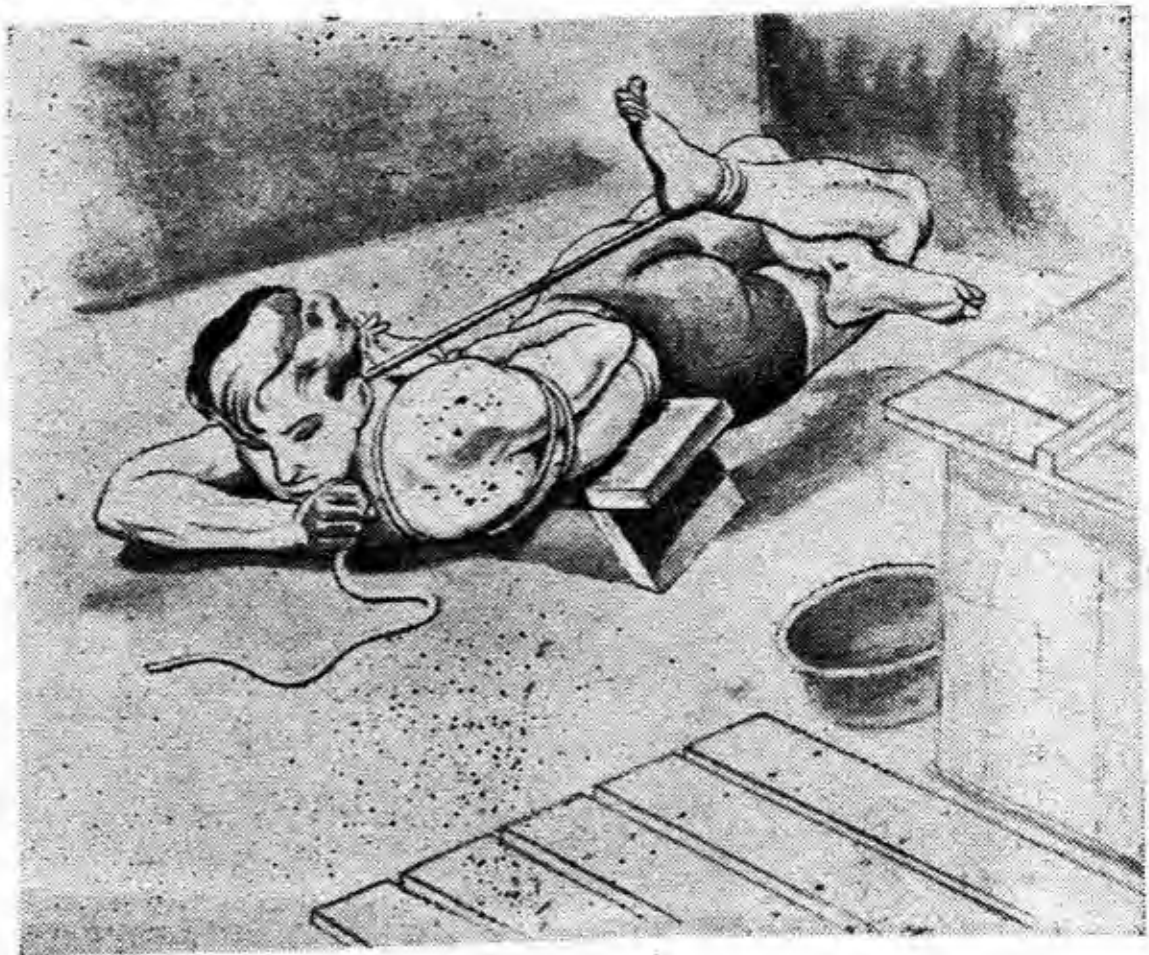
の間へ挟んで自由のきく右手で無理矢理にグツとこじてみた。そして風呂場から雨の中に飛び出して、ぬかるみの泥の中へ転げまわった。

降りしきる雨の冷たさが、全身にこたえたが泥まみれとなった僕の惨めな責め姿に天国にも登る様な、何んとも云えぬ恍惚感が味わえた。今夜の自虐(責め)はとても愉快!

×月×日 曇

今日は朝から少し頭痛がする。母親が心配してノーシンを飲ませてくれた。昼過ぎから頭痛がうそのように治ったので久し振りに街へ出た。ロビンフッドの冒険! 面白そうだった。一つ見てやれと映画館に入った僕。「実に素晴らしい」断然気に入った。一回の観覧料で二回も見ちゃった。

エロルプリンの扮するロビンフッドが、たくましい体を半裸体にはがれて牢獄に鎖でつながれているシーン、そして鞭で打たれ、ついに死刑場に引き出されるプリンの苦痛にゆがむ、クローズアップがたまらなく僕の神経を刺戟する。僕も一度プリンの様な逞ましい男性的な男を責めてみたくて仕方が



ない。あゝ、空想しただけでもたまらない。その帰り町の風呂屋で汗を流した。その時、僕の横で背中を流していた中年の逞ましい土方風の男に魅力を感じた。こんな人を縛ってみたい僕の理想の人だ。と思って前にまわって顔をみたら、がっかり、僕の好むにがみの

走った好男子ではなかったから。でも、今日の映画がよかったから満足だ。

×月×日 晴

あと数日で新しい年を迎えるのだ。今朝の北風はヒエビエと冷たい、こんな寒い日に全裸体で縛られ頭から冷水をかぶせられてみた。水責めの様に。

今晚は青年団の年末夜警だ。夕方から少し頭痛がしたけれど「拷問だ」と我慢して夜警に出た。夜警所内では顔見知りのデブやノッポが盛んに、好色の話で持ち切りだ。僕も早速、彼等の仲間に入ってつまらない事を云ってゲラゲラ笑わしてやった。チエツいやになっちゃう、此んな話をするにデブやノッポの奴、目の色を変えて興奮するんだもの。誰か残酷な拷問の話でもしてくれないかなあ。夜中の二時頃カチカチと拍子木を叩いて、暗闇から暗闇を廻った時連れの奴、「今頃あれの真盛中だ、何処か一軒のぞいたろうか」だ。て浅間しいたらありやしない。その奴の顔を月の光で覗いてやったら、間抜けた顔が尚さら間抜けて見えた。「フッフ」思わずふき出しちゃった。僕には好色や男女の話など、くそ面白くもない、まして小便くさい異性の話などおかしくて……。